



一般社団法人

日本体育・スポーツ・健康学会

第71回大会報告書

The 71st Conference of the Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

共生社会への新たな扉を開く

— 日本体育・スポーツ・健康学会へ —

同時双方向オンライン開催

日 程

2021年9月7日(火)～9日(木)

主管校

筑波大学 *University of Tsukuba*



はじめに

「共生社会への新たな扉を開く—日本体育・スポーツ・健康学会へ」を大会テーマとする第71回大会が、東京オリンピック・パラリンピック競技大会閉幕直後の2021（令和3）年9月7日～9日の3日間にかけて開催されました。本大会は、学会の名称と目的が改称・改正され、さらにプログラムの構成原理と運営方式までもが大きく様変わりした、学会にとっても大きな転換期となるものでした。

また、全世界の脅威となった新型コロナウイルス（COVID-19）の蔓延により緊急事態宣言が発令されるという異例の事態に見舞われ、学会大会初の同時双方型オンライン方式による開催となりました。筑波大学が主管をつとめるのは今回が3回目でありましたが、このように新しいイノベーションの採用と緊急事態への対応という難題に対応することが求められ、常に不安を抱えながらの大会運営となりました。

大会1～2日目は、体育・スポーツ・健康科学の社会的課題への貢献を強く意識した2つの本部企画を皮切りに、応用（領域横断）研究部会が企画・運営する15の「テーマ別シンポジウム」そして各応用領域（スポーツ文化、学校保健体育、競技スポーツ、生涯スポーツ、健康福祉）が設定するテーマに対応した169題の研究が口頭発表されました。特に、テーマ別発表では、同一のセッションに異なる専門領域の研究者が配置され、これまで触れることのなかった他領域の発表を視聴し、質疑応答が行われました。異分野間のコミュニケーションは、まだ不慣れなせいかな全般的には決して活発であったとはいえませんが、新しい本学会の存在意義を確かに感じさせるものでもありました。これから、この芽を大切に育てていくことで学際的な総合学会としてのオリジナリティに磨きがかかるものと確信します。また、大会3日目は、従来通りの専門領域別研究発表255題、及び5つのキーノートレクチャー（専門領域別シンポジウムは廃止）及び専門領域の総会等の諸会議が実施されました。

さらに、大会終了後～9月末日まで、大会Webサイトにおいて、専門領域別企画・発表を除くすべてのプログラムがオンデマンド配信され、対面方式では不可能であった同時時間帯に並行して行われるプログラムの視聴や繰り返しの再生もできるようになりました。この試みは、参加者の皆さまにおおむね好評であり、皮肉にもコロナ禍によって花開いたICTテクノロジーにより多くの知的刺激を提供できたのではないかと思います。このように、オンライン学会という形式は、決して主催者側が望んで選択したわけではありませんでしたが、学会大会における新たな情報発信・知識共有の仕組みとして、今後も引き継ぐべきかどうか一考の価値はあろうかと考えます。

最後になりますが、難しい学会大会の運営にご尽力・ご支援・ご協力いただきました理事会・学会

事務局、後援組織・団体、協賛企業・団体の関係者各位そして約 2,000 名の参加者の皆様方に主催者を代表して、心から感謝申し上げます。また、何よりも大会の全日程を大きなトラブルもなく終えることができましたのは、この大役を少数精鋭で一致協力し立派に果たしていただきました組織委員会／実行委員会の構成員および大会運営の中心的業務を代行していただきました株式会社アトラス様、創文印刷工業株式会社様のおかげです。皆様、本当にありがとうございました。

日本体育・スポーツ・健康学会
第 71 回組織委員会／実行委員会
委員長 清水紀宏

日本体育・スポーツ・健康学会第71回大会

期 間	2021年9月7日（火）、8日（水）、 9日（木）
開催形式	同時双方向オンライン開催（一部オンデマンド配信）
主 催	一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会 日本体育・スポーツ・健康学会第71回大会組織委員会
主 管	筑波大学
後 援	スポーツ庁 公益社団法人 全国大学体育連合 公益財団法人 日本オリンピック委員会 公益財団法人 日本障がい者スポーツ協会 公益財団法人 日本スポーツ協会 独立行政法人 日本スポーツ振興センター (50音順)
大会本部	〒160-0013東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号 JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会事務局内 日本体育・スポーツ・健康学会第71回大会事務局 大会ホームページ https://confit.atlas.jp/guide/event/jspehss71/top

目次

はじめに	1
大会概要	3
大会日程	5
大会役員・大会組織委員会・大会実行委員会	8

全体概要

大会運営の概要	9
大会の準備と実施	11
大会運営上の反省点と次回大会への提言	22

学会本部企画

本部企画シンポジウム 1	26
本部企画シンポジウム 2	28
交流企画：若手研究者委員会プレゼンツ 「学会の未来を語る会」	30

テーマ別研究発表・シンポジウム

テーマ別研究発表・シンポジウムについて（まとめ）	32
テーマ別研究発表・シンポジウムについて（テーマ一覧表）	33
スポーツ文化研究部会	36
学校保健体育研究部	42
競技スポーツ研究部	48
生涯スポーツ研究部会	55
健康福祉研究部会	61

専門領域企画・研究発表

体育哲学	67	測定評価	74
体育史	68	体育方法	75
体育社会学	69	保健	76
体育心理学	70	体育科教育学	77
バイオメカニクス	71	スポーツ人類学	78
体育経営管理	72	アダプテッド・スポーツ科学	79
発育発達	73	体育・スポーツ政策	80

監査報告書

学会員及び大会参加者を対象とした第71回大会の運営と実施に関するアンケート調査結果

大会日程 1日目 9月7日(火)

		9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00
学会本部企画	会場1 (webinar)	オープニング セレモニー・総会 9:00-10:20		本部企画シンポジウム1 体育・スポーツ・健康科学を基盤とした Evidence Based Sport Policyの開発 に向けて 10:30-12:30								
	会場2 (webinar)			本部企画シンポジウム2 若手研究者に求められる体育・ スポーツ・健康科学の社会的使命 10:30-12:30								
	会場3					名誉会員 懇談会 12:30-13:30					交流企画 (若手の会主催) 17:30-19:00	
応用研究部会企画 テーマ別 シンポジウム スポーツ文化 学校保健体育 競技スポーツ 生涯スポーツ 健康福祉	会場4 (webinar)								スポーツ文化 課題A シンポジウム SDGsとスポーツとの接点を探る 15:15-17:15			
	会場5 (webinar)								学校保健体育 課題A シンポジウム 大学体育の社会的使命と その実現可能性を考える 15:15-17:15			
	会場6 (webinar)								競技スポーツ 課題A シンポジウム トップアスリート養成の拠点としての 大学の意義と問題点 15:15-17:15			
	会場7 (webinar)								生涯スポーツ 課題A シンポジウム 共生社会と生涯スポーツは 共存できるのか 15:15-17:15			
	会場8 (webinar)								健康福祉 課題A シンポジウム ライフスタイルに応じた健康増進・ 体力向上の捉え方 15:15-17:15			
応用研究部会企画 テーマ別 研究発表	スポーツ文化	会場9					課題A 口頭発表① 13:30-14:45		スポーツ文化【課題A】 グローバル課題の解決に向けて スポーツから何が提案できるか			
		会場10					課題A 口頭発表② 13:30-14:45					
	学校保健体育	会場11					課題A 口頭発表① 13:30-14:59		学校保健体育【課題A】 大学体育の授業をいかに良質なもの にするか			
		会場12					課題A 口頭発表② 13:30-14:59					
	競技スポーツ	会場13					課題A 口頭発表① 13:30-14:40		競技スポーツ【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的 に行うか			
		会場14					課題A 口頭発表② 13:30-14:40					
		会場15					課題A 口頭発表③ 13:30-14:40					
	生涯スポーツ	会場16					課題A 口頭発表① 14:05-15:00		生涯スポーツ【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と 協働システムをいかに構築するか			
		会場17					課題A 口頭発表② 13:55-15:00					
	健康福祉	会場18					課題A 口頭発表① 13:30-14:40		健康福祉【課題A】 健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか			

ポスター発表(専門領域別)は、9月7日(火)～9月16日(木)17:00までConfitシステム上に掲載いたします。
 質疑応答は、発表ごとにConfitのコメント機能(チャット)を用いて適宜行っていただきます。大会期間中にZoomでのやりとりは行いません。
 ポスターへのコメント受付期間は、9月7日(火)～9月9日(木)17:00までです。発表者によるコメントへの回答期限は9月16日(木)17:00までです。

大会日程 2日目 9月8日(水)

		9:00		10:00		11:00		12:00		13:00		14:00		15:00		16:00		17:00		18:00		19:00	
学会本部企画		会場1								地域協力学会 連絡会議 12:45-13:45													
応用研究部企画 テーマ別 シンポジウム スポーツ文化 学校保健体育 競技スポーツ 生涯スポーツ 健康福祉		会場2 (webinar)				スポーツ文化 課題B シンポジウム スポーツの理想とその暴力性 10:45-12:45										スポーツ文化 課題C シンポジウム スポーツ文化の浸透戦略 15:30-17:30							
		会場3 (webinar)				学校保健体育 課題B シンポジウム より良質な保健体育授業の具体像を 考える 10:45-12:45										学校保健体育 課題C シンポジウム 科学的エビデンスからみた保健体育 のカリキュラムと学習指導 15:30-17:30							
		会場4 (webinar)				競技スポーツ 課題B シンポジウム パラ競技スポーツにおけるコーチ養成 の現状と今後の方向性 10:45-12:45										競技スポーツ 課題C シンポジウム ハイパフォーマンススポーツにおける フィジカルトレーニングの新たな潮流 15:30-17:30							
		会場5 (webinar)				生涯スポーツ 課題B シンポジウム Well-Beingの実現にむけて 10:45-12:45										生涯スポーツ 課題C シンポジウム 国民の運動・スポーツ参加の現状 および問題点 15:30-17:30							
		会場6 (webinar)				健康福祉 課題B シンポジウム 認知機能改善のための 身体活動の在り方 10:45-12:25										健康福祉 課題C シンポジウム テレワーク時代における心身の 健康の保持増進の工夫と提言 15:30-17:30							
応用研究部企画 テーマ別 研究発表	スポーツ文化		会場7		課題B 口頭発表① 9:00-10:15		スポーツ文化【課題B】 人々の生活に根ざした多様なスポー ツ文化をいかに醸成していくか						課題C 口頭発表① 13:45-15:15		スポーツ文化【課題C】 多様なスポーツ文化の保存・流通・ 促進をいかに刷新していくか								
			会場8		課題B 口頭発表② 9:00-10:20								課題C 口頭発表② 13:45-15:15										
			会場9		課題B 口頭発表③ 9:00-9:55																		
	学校保健体育		会場10		課題B 口頭発表① 9:00-10:05		学校保健体育【課題B】 保健体育授業をいかに良質なものに するか						課題C 口頭発表① 13:45-15:05		学校保健体育【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健 体育の進展にいかに関与できるか								
			会場11		課題B 口頭発表② 9:00-10:10								課題C 口頭発表② 13:45-15:10										
			会場12		課題B 口頭発表③ 9:00-9:45				課題C 口頭発表③ 13:45-15:10														
			会場13						課題C 口頭発表④ 13:45-15:15														
			会場14								課題C 口頭発表⑤ 13:45-15:15												
	競技スポーツ		会場15		課題B 口頭発表① 9:00-10:05		競技スポーツ【課題B】 競技スポーツにおけるコーチ養成を いかに効果的に行うか						課題C 口頭発表① 13:45-15:00		競技スポーツ【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ(トップレ ベルの競技スポーツ)におけるトレー ニングをいかに効果的に行うか								
			会場16		課題B 口頭発表② 9:00-9:50								課題C 口頭発表② 13:45-14:55										
			会場17						課題C 口頭発表③ 13:45-15:05														
			会場18						課題C 口頭発表④ 13:45-15:00														
			会場19						課題C 口頭発表⑤ 13:45-15:10														
			会場20								課題C 口頭発表⑥ 13:45-14:35												
	生涯スポーツ		会場21		課題B 口頭発表① 9:45-10:30		生涯スポーツ【課題B】 スポーツの産業化は生涯スポーツ・ 人・地域社会といかに関連するか						課題C 口頭発表① 14:00-15:15		生涯スポーツ【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々 のスポーツ権を保障するか								
			会場22										課題C 口頭発表② 14:20-15:15										
	健康福祉		会場23		課題B 口頭発表① 9:00-10:25		健康福祉【課題B】 認知機能の維持・改善に運動・ スポーツはいかに貢献するか						課題C 口頭発表① 13:45-15:00		健康福祉【課題C】 運動不足(不活動)に伴う心身機能 の低下をいかに予防するか								
			会場24		課題B 口頭発表② 9:00-10:10								課題C 口頭発表② 13:45-15:00										
			会場25						課題C 口頭発表③ 13:45-15:15														

大会日程 3日目 9月9日(木)

		9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00
専門領域企画	学会本部企画	会場1										
										専門領域 連絡会議 17:00-18:00		
	体育哲学	会場2	口頭発表① 9:00-9:30	浅田学術 奨励賞受賞 記念演題 9:40-10:40	総会 10:50-11:50							
	体育史	会場3	口頭発表① 9:00-9:25	口頭発表② 9:30-9:55	口頭発表③ 10:00-10:25	口頭発表④ 10:30-10:55	口頭発表⑤ 11:00-11:25	口頭発表⑥ 11:30-11:55				
	体育社会学	会場4	口頭発表① 9:00-9:50	評議員会 10:00-11:00	口頭発表② 11:00-11:50	総会 12:00-13:00	口頭発表③ 13:00-14:15	口頭発表④ 14:25-15:15	口頭発表⑤ 15:25-16:15			
	体育心理学	会場5	キーノート レクチャー1 9:00-10:00	キーノート レクチャー2 10:00-11:00	総会 11:10-12:10		口頭発表① 13:00-14:00	口頭発表② 14:10-15:10	口頭発表③ 15:20-16:20			
	バイオメカニクス	会場6		口頭発表① 10:00-10:43	キーノート レクチャー 11:00-12:00	理事会 12:00-13:00	口頭発表② 13:30-14:13	口頭発表③ 14:30-15:13				
	体育経営管理	会場7		口頭発表① 10:00-11:20								
	発育発達	会場8					キーノート レクチャー 13:00-14:00	理事会 14:00-15:00				
	測定評価 ※理事会は領域独自のZoomで開催(8日)	会場9	口頭発表① 9:00-9:54	口頭発表② 10:00-10:54	口頭発表③ 11:00-11:54	総会 12:10-12:50						
	体育方法	会場10				理事会 12:00-13:00						
	保健	会場11		口頭発表① 10:30-11:06	口頭発表② 11:15-11:51	総会 12:15-12:45						
	体育科教育学 ※理事会は領域独自のZoomで開催(8日 12:45-13:45)	会場12	口頭発表① 9:00-10:00	口頭発表② 10:00-11:00	口頭発表③ 11:00-11:45	総会 12:00-13:00	口頭発表④ 13:00-13:45					
	スポーツ人類学	会場13			口頭発表① 11:00-11:40	世話人会 12:00-13:00		口頭発表② 13:30-14:30	キーノート レクチャー 15:00-16:00	総会 16:00-17:00		
	アダプテッド・スポーツ科学	会場14	評議員会 9:00-10:00	口頭発表① 10:15-11:20	総会 11:30-12:20							
	体育・スポーツ政策	会場15							設立総会 16:00-17:00			

ポスター発表(専門領域別)は、9月7日(火)～9月16日(木)17:00までConfitシステム上に掲載いたします。
 質疑応答は、発表ごとにConfitのコメント機能(チャット)を用いて適宜行っていただきます。大会期間中にZoomでのやりとりは行いません。
 ポスターへのコメント受付期間は、9月7日(火)～9月9日(木)17:00までです。発表者によるコメントへの回答期限は9月16日(木)17:00までです。

※本大会では、運動生理学専門領域および介護予防・健康づくり専門領域の企画はございません。

大会役員・大会組織委員会

大会名誉会長	筑波大学長 永田 恭介						
大会会長	一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会	会長	菊 幸一				
組織委員長	清水 紀宏						
副委員長	菊 幸一						
事務局長	會田 宏						
副事務局長	深澤 浩洋						
事務局	齋藤 うい†	宮川 山水†	山野 陽子†				
総務	藤井 範久	大林 太朗	片岡 千恵	佐藤 貴弘			
企画	中田 由夫	大山卞圭悟	國部 雅大	松井 崇	宮崎 明世		
	柳沢 和雄*						
渉外	大藏 倫博	佐川 和則*	前村 公彦				
経理	齊藤まゆみ	坂本 拓弥	佐々木玲子*				
監事	西保 岳	長谷川聖修	中川 昭*				
*：日本体育・スポーツ・健康学会理事会選出委員							
†：日本体育・スポーツ・健康学会事務局選出委員							

大会実行委員会

委員長	清水 紀宏						
副委員長	菊 幸一						
委員	會田 宏	大藏 倫博	大林 太朗	大山卞圭悟	片岡 千恵		
	國部 雅大	齊藤まゆみ	坂本 拓弥	佐藤 貴弘	中田 由夫		
	深澤 浩洋	藤井 範久	前村 公彦	松井 崇	宮崎 明世		
事務局	齋藤 うい	宮川 山水	山野 陽子				

応用（領域横断）研究部会

スポーツ文化研究部会	深澤 浩洋*	近藤 智靖†	高尾 尚平‡
学校保健体育研究部会	岡出 美則*	細越 淳二†	
競技スポーツ研究部会	中川 昭*	土屋 裕睦†	熊野 陽人‡
生涯スポーツ研究部会	柳沢 和雄*	水上 博司†	香村 恵介‡
健康福祉研究部会	沢井 史穂*	都筑 真†	辻 大士‡

*：部会長

†：副部会長

‡：事務局長・庶務

全体概要

1. 大会運営の概要

(1) 新運営方式への移行、並びにコロナ禍における開催方式と会場の検討

主管校が主体となって運営を行う従来の方式から、理事会や学会事務局が大会運営を主導し、主管校は会場の確保・整備・運営や運営スタッフの確保・配置を担うという役割分担をする方式へ移行することとなった。第 71 回大会は、この方式へ移行する過渡期であるとの認識の下、理事会や学会事務局と主管校との間で確認をしながら、運営体制づくりを進めた。理事会の学会大会担当理事と確認した内容を理事会で説明し、役割分担が曖昧な部分の確認に努めた。加えて新型コロナウイルス感染状況が見通せないことから、開催方式や会場について検討が重ねられた。

理事会での審議経過は次の通りであった。

2020 年 4 月 18 日：【日程・企画運営主体】日程を 2021 年 9 月 7 日（火）～9 日（木）の 3 日間とする。理事会における「学会大会のあり方（審議事項 4）」の議論を踏まえて、第 71 回大会を企画・運営していくが、第 71 回大会は移行期間として、学会大会の企画内容を組織委員会、学会本部、応用（領域横断）研究部会が協議をしながら決定していく。

2020 年 5 月 30 日：【組織委員会・会場】大会組織委員会を理事会・本部事務局と主管校大学（筑波大学）が合同で設置する。対面で学会大会を開催する場合、会場については、筑波大学あるいはつくば国際会議場とする。オンラインによる開催も含め、第 71 回大会の開催方法、会場、委託業者等については、随時、メール審議や理事会等での検討を進め、2020 年 10 月までに決定する。

2020 年 8 月 22 日：【組織委員会構成・会場】組織委員会構成案の承認。学会本部から選出される組織委員については、学会理事の任期が 2021 年 6 月までであるが、大会が開催される 2021 年 9 月まで組織委員を務める。会場については、筑波大学またはつくば国際会議場、オンライン開催、対面会場とオンラインの併用開催かを組織委員会で継続的に検討する。

2020 年 10 月：【開催形式・企画・会場キャンセル料・発表申し込み】2021 年 2 月下旬までに開催形式原案を作成し、2021 年 3 月の理事会にて審議する。つくば国際会議場は仮予約のためキャンセル料は発生しないが、別団体の本予約申し込みがあった場合は本予約が必要となり、その後は 3 か月前までの取り消しで 50%のキャンセル料が発生することを確認。企画委員会にて大会シンポジウムの内容を検討し、2020 年 12 月の理事会に提案する。応用（領域横断）研究部会にてテーマ別シンポジウム並びにテーマ別研究発表の内容について検討し、2020 年 12 月の理事会に提案する。応用（領域横断）研究部会のテーマ別研究発表及び専門領域の一般研究発表における発表申し込みは 1 名につき 1 演題までとする。

2020 年 12 月：【予算書と大会参加費・大会参加・発表申し込み】4 つの開催形式（①フルリモート形式、②対面とリモートのハイブリッド形式、③つくば国際会議場での対面形式、④筑波大学での対面形式）ごとの予算案と参加費案が提示された。3 月の理事会で継続審議する。参加・発表申し込みスケジュール決定。オンライン及びハイブリッド開催の場合、当日申込を設定しないことを確認。本部企画シンポジウム案と各応用研究部会のテーマ案が提示される。応用研究部会シンポジウムにおけるシンポジストへの謝金並びに交通費の支給について検討。

2021 年 3 月 6 日：【開催形式の決定・プログラムの検討・参加費の再検討】オンライン開催が決定。プログラム案が承認された。口頭発表の会場（ブレイクアウトルーム）への出入りの仕方や 1 会場あたりの上限人数、口頭発表の資料の配布方法、オンライン参加のセキュリティ等については今後、大会組織委員会において検討する。予算案が提示された。参加費を例年の金額よりも減額する方向で再検討する。大会テーマが決定。参加発表申込、参加費の支払いスケジュール等確定。

テーマ別シンポジウムの企画案が了承。

2021 年 4 月 17 日：【広報活動・予算書の承認・協賛等に関わる渉外活動依頼】プログラム案、協賛申し込み状況、大会 Web サイトとポスターについて説明。参加費を前回大会から約半額とする予算書が承認された。各理事に対して広告協賛等に関わる渉外活動の依頼。第 71 回大会以降の学会大会の運営（主管校と事務局、学会理事会の責任分担）について承認。

2021 年 5 月 22 日：【申し込み状況等の報告】5 月 19 日時点での参加登録数、研究発表演題数、協賛申し込み状況等について報告。各理事に、引き続き広告協賛等に関わる渉外活動の依頼。

2021 年 7 月 10 日：【プログラム等の説明・広報依頼】プログラム案、修正予算書、参加登録数について説明。各理事に大学院生の参加を促すよう依頼。また、第 71 回大会本部企画の文字起こしについて審議。

2021 年 9 月 6 日：【当日の運営等についての説明】以下が報告される。1) 予定より 20%ほど参加登録数が少ない。2) 500 万円ほどの黒字が見込まれる。3) 大会中のトラブルの対応については電話対応のデスクを設置する。4) 報告書は冊子体では発刊せず、大会ホームページに掲載する。5) 第 71 回大会において、第 72 回大会の案内を行う。

（２）各委員会の設置

○準備委員会

組織委員会を構成する際の主要メンバーで次の通り組織し、2020 年 7 月から組織委員会の構成や開催方式の可能性などについて検討を進めた他、学会大会業務委託業者との打ち合わせを同年 8 月 20 日に行った。

大会委員長（清水紀宏）、大会副委員長（菊幸一・前田清司*）
事務局長（會田宏）、副事務局長（深澤浩洋）

*前田氏は 2021 年 3 月筑波大学を退職したため、組織委員会には加わらなかった。

○組織委員会

理事会から柳沢和雄企画担当理事、佐川和則学会大会担当理事、佐々木玲子会計担当理事、また、本部事務局員と主管校の筑波大学のスタッフで構成され、オンラインにて組織委員会を計 7 回開催して、大会準備を進めた。主な議題・共有事項は次の通りであった

第 1 回（2020 年 9 月 3 日）組織委員会の構成と役割、準備スケジュール、予算

第 2 回（2021 年 2 月 4 日）開催方式、予算案、協賛企業、ウェブサイト

第 3 回（2 月 22 日）開催方式、各プログラム実施案、予算案、参加費、協賛、大会までのスケジュール

第 4 回（3 月 15 日）大会テーマ、開催方式、プログラム、会場、経理、渉外、総務

第 5 回（5 月 28 日）参加登録数、協賛申込状況、臨時雇い、発表数、
プログラム作成までのスケジュール、マニュアル作成

第 6 回（8 月 27 日）登録状況、収支見込み、大会全体の流れ、トラブル対応、報告書

第 7 回（9 月 21 日）今大会の準備と実施における反省点、次回大会への提言

○実行委員会

2021 年6 月大会実行委員会を組織した。構成員は以下の通りとした。

- ・大会組織委員会から学会理事会選出委員と監事を除いた委員
- ・応用（領域横断）研究部会において、各部会の企画運営に関わるコアメンバー

なお、専門領域担当については、オンライン開催となり、当日の役割分担がないため構成員としないこととした。

実行委員会内で調整・共有すべき事項は、適宜メール等で連絡し、委員会は開催しなかった。

（3）業務委託内容と業者の選定

○業務委託内容

主な委託内容は、大会ホームページの作成、大会参加システムの構築、プログラム&予稿集、大会参加証、抄録データの J-Stage 登載であった。

○業者選定の経緯

2020 年 1 月：学会大会委員会にて、業務委託内容の検討

2020 年 2 月：4 社（①株式会社アトラス、②創文印刷工業株式会社、③勝美印刷株式会社、④株式会社国際文献社）へ見積依頼

2020 年 3 月：2 社（①株式会社アトラス+創文印刷工業株式会社（共同提案）、②勝美印刷株式会社）から提案書の提出

2020 年 4 月 18 日：理事会において学会大会運営支援業者を 2 社に絞って選定作業を進めていること、第 71 回大会組織委員会、学会大会委員会および本部事務局で委託内容のすり合わせを行い、4 月中に委託業者候補を決定することを報告

2020 年 4 月 30 日：学会大会運営委託業者選定のため会議

- ・参加者：(学会大会委員会) 佐川、佐々木、(第 71 回大会組織委員会) 清水、會田、(常務理事) 木塚、学会事務局

- ・委託業者を「株式会社アトラス+創文印刷工業株式会社」に決定

選定理由：①株式会社アトラス+創文印刷工業株式会社は、既存のシステム（Confit）を使用するためランニングコストは発生するが、実績やサポート体制は充実しており安定した運用が可能である。また、大会運営にあわせて学会側でカスタマイズが可能となり、柔軟に対応できるため。

②勝美印刷株式会社は、オリジナルシステムを開発するため、学会の要望に応じて構築できる点は魅力だが、開発費用は高額となる。また、コンビニ決済やその他の項目で利用実績がないものもあり、運用面で不安が残るため採用を見送る。

2. 大会の準備と実施

（1）広報

○大会案内

本大会から大会案内の冊子体は廃止し、すべて大会ウェブサイト上に掲載した。前回大会の内容を参考に学会事務局において原稿を作成し、主管校及び学会大会委員会において内容を確認した。

○大会ウェブサイト

本大会から Confit 機能の大会ウェブサイトを利用した。ウェブサイトの構築及び更新作業は、学会事務局において担当した。トップ画像については創文印刷に委託した。大会ウェブサイトの制作過程は表 1 の通り。

表 1 ウェブサイトの制作過程

作業月	内容等
2020 年 9 月	アトラス社との打ち合わせ
10 月	大会ウェブサイトの提供・掲載内容の検討・ヘッダー画像の作成
2021 年 1 月	トップページ、ご挨拶、開催概要、重要なお知らせ、参加登録の申し込み、研究発表の申し込み、広告・協賛等の公開
3 月	開催形式（同時双方向オンライン）決定に伴う各ページの更新
4 月	早期参加申込・研究発表申込の開始
5 月	早期参加申込（早期参加費）、研究発表申込を〆切 事前参加申込（事前参加費）開始 大会日程・企画の公開
6 月	WEB 企業展示の公開
7 月	タイムテーブル、プログラム、大学・大学院紹介の公開
8 月	口頭発表者の皆様へ、ポスター発表者の皆様へ、コーディネーター・座長の皆様へ、Zoom 利用の手引き、オンライン視聴の手引きの公開
9 月	オンライン視聴用の Zoom ボタンの公開 オンデマンド配信の開始

○ポスター

当初ポスターは作成しない予定だったが、2021 年 3 月 15 日に開催された組織委員会において、参加登録促進のためにポスターを作成することが提案され、総務委員会で担当することになった。ポスターのデザインについては、ウェブサイトのデザインをもとに創文印刷に依頼した。

印刷数：600 部

ポスターの発送先：学会役員と代議員（今期+次期） 114 名 各 2 枚

2019 年の年次大会案内ポスター配布先 107 箇所 各 2 枚

協賛企業・団体・大学 40 箇所 各 1 枚

筑波大学 残部の半数（60 枚）

ポスターファイルの配信先：地域協力学会、専門領域

（2）協賛

- ① 渉外委員会の最初の仕事は、大会のおよそ 1 年前（2020 年 10 月）に一般社団法人つくば観光コンベンション協会に対しておこなった「コンベンション開催支援補助金交付申請」であった（交付申請額 205 万円）。しかし、その後、本大会はオンライン開催と決定されたことから本支援補助金の該当から外れることとなった。
- ② ①の理由により、渉外委員会の最大の仕事は協賛金を集めることとなった。
第 3 回組織委員会（2021 年 3 月 15 日）までに、以下の協賛メニューを作り、予算（協賛金目標額）

は 633 万円に設定した。

<協賛メニュー>

- ・プログラム冊子広告（カラー・白黒、面積により 1 件あたり 3 万円～20 万円）
- ・企業 WEB 展示（1 件 10 万円。出展者自身がページを編集する Confit マイページシステムの経費は追加で 10 万円だった。）
- ・大学・団体 WEB 紹介（1 件 5 万円）
- ・WEB 書籍展示（書店に対してはプログラム冊子広告 5 万円以上の場合に無料サービス）
- ・バナー広告（1 件 5 万円、プログラム冊子広告で表 2～4 の大口協賛企業がさらに 5 万円を支払っていただける場合にバナーを設置するというもの）
- ・寄付金

③ これまでに協賛実績のある企業・大学・団体に対して、大会事務局から 2 回（2021 年 1 月中旬と 3 月下旬）にわたり協賛依頼（趣意書）を送付していただいた。これだけで 300 万円以上の協賛金が獲得できた。しかし、まだ目標額を大きく下回っていたことから、2021 年 4 月からは実行委員を中心に、個人的なつながりのある企業・大学・団体に対して協賛依頼を集中的に行うことになった。

④ 協賛についてはプログラム広告、WEB 企業出展、大学・大学院紹介、大会ホームページ上のバナーに分類し、2021 年 1 月より募集を開始した。協賛金の獲得結果は以下の通りであった。プログラム冊子広告への依存度が非常に高かった（71 件、75%）。A

協賛金 655 万円（協賛団体一覧は表 2～5 の通り）

（内訳）プログラム冊子広告	71 件 505 万円（75%）
WEB 企業展示	7 件 70 万円（8%）
WEB 大学・大学院紹介	13 件 65 万円（14%）
ホームページバナー掲載	3 件 15 万円（3%）

表2 プログラム広告への協賛団体一覧

企業・団体(五十音順)	
アーカイブティップス株式会社	株式会社SPLYZA
株式会社アイ・ケイ コーポレーション	株式会社スポーツフィールド
アイエムエフ株式会社	特定非営利活動法人スマイルクラブ
株式会社アシックス	ゼロシーセブン株式会社
株式会社アポワテック	株式会社大修館書店
有限会社市村出版	株式会社タニタ
株式会社エイジェイカンパニー	筑波大学アスレチックデパートメント (3枠)
有限会社エスアンドエムイー	株式会社テキスト
株式会社MPandC	株式会社テック技販
株式会社学研教育みらい	東亜道路工業株式会社
北関東体育学会	東郷町施設サービス株式会社
株式会社ギムニク	株式会社東洋館出版社
株式会社Q'sfix	株式会社トーヨーフィジカル
株式会社杏林書院	公益社団法人日本柔道整復師会
株式会社光文書院	日本体操学会
株式会社晃洋書房	特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会
株式会社コムラ	NP0法人 パルシュール ジャパン
コガソフトウェア株式会社	PAEグローバル株式会社
酒井医療株式会社	株式会社フォーアシスト
サクセス・ベル株式会社	富士医科産業株式会社
公益財団法人笹川スポーツ財団	株式会社不味堂出版
株式会社ジアース教育新社	北海道体育学会

大学関係(五十音順)	
鹿屋体育大学	東京女子体育大学
九州大学大学院人間環境学府健康・スポーツ科学コース	新潟医療福祉大学大学院健康スポーツ学分野
近畿大学	日本女子体育大学
国際武道大学	日本体育大学
国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科	日本大学スポーツ科学部
順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科	八戸学院大学
中京大学大学院スポーツ科学研究科	びわこ成蹊スポーツ大学
筑波大学出版会	福岡大学スポーツ科学部
筑波大学大学院スポーツ医学学位プログラム	北翔大学大学院生涯スポーツ学研究科
筑波大学大学院体育科学学位プログラム	武庫川女子大学健康・スポーツ科学科
天理大学	山梨学院大学スポーツ科学部
桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部	立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科
桐蔭横浜大学大学院スポーツ科学研究科	

表 3 WEB 企業展示への協賛団体一覧

【WEB 企業展示】	
アーカイブティップス株式会社	株式会社ナックイメージテクノロジー
イースポート株式会社	株式会社ノビテック
株式会社大武・ルート工業	株式会社ベースボール・マガジン社
株式会社ザオバ	

表 4 WEB 大学・大学院紹介への協賛団体一覧

【WEB 大学・大学院紹介】	
朝日大学	筑波大学大学院パブリックヘルス学位プログラム
大阪体育大学・大学院	東海大学体育学研究科
順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科	東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科
筑波大学大学院コーチング学学位プログラム	日本福祉大学大学院スポーツ科学研究科
筑波大学大学院スポーツ・オリンピック学学位プログラム	法政大学大学院スポーツ健康学研究科
筑波大学大学院体育学学位プログラム	武庫川女子大学健康・スポーツ科学科
筑波大学大学院大学体育スポーツ高度化共同専攻	

表 5 ホームページバナー掲載への協賛団体

ホームページバナー掲載
筑波大学アスレチックデパートメント

- ⑤ 協賛企業、団体・大学に協賛金額に応じて参加招待枠を設定した。協賛金 5 万円以下は 1 名、10 万円以上は 2 名としそれ以上参加希望の場合は有料で参加とした。招待枠の申し込みは 14 名だった。
- ⑥ 大会プログラムが完成次第、協賛企業、団体・大学に組織委員長名の送付状と共に大会事務局より送付した。大会後、組織委員長名でお礼状と報告書を送付した。
- ⑦ 以下の団体に後援名義使用許可申請を行い許可された。
 スポーツ庁
 公益社団法人 全国大学体育連合
 公益財団法人 日本オリンピック委員会
 公益財団法人 日本障がい者スポーツ協会
 公益財団法人 日本スポーツ協会
 独立行政法人 日本スポーツ振興センター

(3) 経理

第 1 回の組織委員会（2020.9）で経理委員会の役割が示された。
 その後、Zoom によるオンライン会議（1 回）とメール審議（随時）を開催した
 経理委員会の役割の確認
 予算書の作成方法の確認
 参加者と参加費の試算
 委託費見積依頼
 予算書（案）の作成・修正
 第 71 回大会における臨時雇いに関する申し合わせの作成

(4) 企画

企画委員会が中心となり、関係各所に確認をとりながら、プログラム案を作成し、調整、準備を進めた。
 プログラムは、1) 学会本部企画、2) 応用研究部会企画テーマ別シンポジウム、3) 応用研究部会企画テーマ別研究発表、4) 専門領域企画に大別される。

1) 学会本部企画

- ① オープニングセレモニー・総会（1 日目）：大会名誉会長として、筑波大学長永田恭介先生にご挨拶をいただけるように準備した。総会の実施については、学会事務局が担当した。
- ② 本部企画シンポジウム 1・2（1 日目）：本部企画シンポジウムの企画運営については、政策検討・諮問委員会と若手研究者委員会のそれぞれが進めたため、組織委員会としては運営上の責任を果たす必要は特になかった。
- ③ 交流企画（1 日目）：交流企画の企画運営については、若手研究者委員会が進めたため、組織委員会としては運営上の責任を果たす必要は特になかった。
- ④ 名誉会員懇談会（1 日目）、地域協力学会連絡会議（2 日目）、専門領域連絡会議（3 日目）：懇談会および連絡会議の実施については、学会事務局が担当した。

2) 応用研究部会企画テーマ別シンポジウム

①スポーツ文化研究部会

課題 A：グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか（1 日目）

課題 B：人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか（2 日目）

課題 C：多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか（2 日目）

②学校保健体育研究部会

課題 A：大学体育の授業をいかに良質なものにするか（1 日目）

課題 B：保健体育授業をいかに良質なものにするか（2 日目）

課題 C：体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか（2 日目）

③競技スポーツ研究部会

課題 A：トップアスリート養成をいかに効果的に行うか（1 日目）

課題 B：競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか（2 日目）

課題 C：ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか（2 日目）

④生涯スポーツ研究部会

課題 A：共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか（1 日目）

課題 B：スポーツの産業化は生涯スポーツ・人・地域社会といかに関連するか（2 日目）

課題 C：人生 100 年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか（2 日目）

⑤健康福祉研究部会

課題 A：健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか（1 日目）

課題 B：認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか（2 日目）

課題 C：運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか（2 日目）

上記、5 つの応用（領域横断）研究部会とそれぞれの 3 課題ずつの計 15 のシンポジウムについて、実施の時間枠と会場を設定した。1 日目午後に課題 A のシンポジウム 5 題、2 日目午前に課題 B、午後に課題 C のシンポジウムを 5 題ずつ設定した。

進行は、応用（領域横断）研究部会が行なったため、当日は組織委員会として特に関与することはない。

3) 応用研究部会企画テーマ別研究発表

①スポーツ文化研究部会

課題 A：2 会場、8 演題（1 日目）

課題 B：3 会場、11 演題（2 日目）

課題 C：2 会場、11 演題（2 日目）

②学校保健体育研究部会

課題 A：2 会場、10 演題（1 日目）

課題 B：3 会場、11 演題（2 日目）

課題 C：5 会場、27 演題（2 日目）

③競技スポーツ研究部会

課題 A：3 会場、12 演題（1 日目）

課題 B：2 会場、7 演題（2 日目）

課題 C：6 会場、26 演題（2 日目）

④生涯スポーツ研究部会

課題 A：2 会場、7 演題（1 日目）

課題 B：1 会場、3 演題（2 日目）

課題 C：2 会場、7 演題（2 日目）

⑤健康福祉研究部会

課題 A：1 会場、4 演題（1 日目）

課題 B：2 会場、9 演題（2 日目）

課題 C：3 会場、16 演題（2 日目）

5 つの応用（領域横断）研究部会とそれぞれ 3 つの課題に応じて、発表時間枠と会場を設定した。発表申し込みされた各演題をどの枠に配置するかについては、応用（領域横断）研究部会に依頼し、演題番号については付与作業を担った。

4) 専門領域企画（3 日目）

①体育哲学：口頭発表（1 演題）、浅田学術奨励賞受賞記念講演、総会

②体育史：口頭発表（6 演題）

③体育社会学：口頭発表（10 演題）、評議員会、総会

④体育心理学：キーノートレクチャー（2 演題）、口頭発表（9 演題）、ポスター発表（43 演題）、総会

⑤バイオメカニクス：キーノートレクチャー（1 演題）、口頭発表（9 演題）、ポスター発表（20 演題）、理事会

⑥体育経営管理：口頭発表（4 演題）、ポスター発表（4 演題）

⑦発育発達：キーノートレクチャー（1 演題）、ポスター発表（13 演題）、理事会

⑧測定評価：口頭発表（12 演題）、ポスター発表（17 演題）、総会

⑨体育方法：ポスター発表（64 演題）、理事会

⑩保健：口頭発表（6 演題）、総会

⑪体育科教育学：口頭発表（14 演題）、ポスター発表（14 演題）、総会

⑫スポーツ人類学：キーノートレクチャー（1 演題）、口頭発表（5 演題）、ポスター発表（1 演題）、世話人会、総会

⑬アダプテッド・スポーツ科学：口頭発表（4 演題）、評議員会、総会

⑭体育・スポーツ政策：設立総会

各専門領域企画に関しては、各専門領域が企画したため、組織委員会として特に関与することはなかった。なお、ポスター発表については、Confit システム上に掲載され、質疑応答は、発表ごとに Confit のコメント機能を用いて行われた。

（5）参加・発表申し込み

○事前準備

本大会から Confit 機能の参加登録システム・演題登録システムを利用した。システムの構築は、学会事務局において担当した。2021 年 1 月にアトラス社と打ち合わせを行い、2 月下旬には組織委員会並びに理事会メンバーへ試行運用サイトでのテスト登録を依頼し、4 月 1 日から本番環境サイトを稼働した。

○領収書発行

Confit の領収書ダウンロード機能を利用し、参加者自身で大会マイページより発行できるようにした。

領収書ダウンロード機能は、クレジットカード決済並びに銀行振込のみの対応のため、その他決済の方には個別に対応した。

○大会プログラム（冊子）作成

大会プログラム（冊子）に関する校正、印刷、発送等の作業については、創文印刷に委託した。大会プログラムの制作過程については、表 6 の通り。

表 6 プログラムの制作過程

作業月	内容等
2021 年 5 月末	プログラムの掲載順・掲載事項について、組織委員会に打診
6 月初旬	アトラス社、創文印刷との打ち合わせ
6 月末	申込演題、シンポジウム、専門領域企画の原稿データがアトラス社から創文印刷へ送付された。順次原稿の校正が始まる。 校正作業は、組織委員会と応用部会担当者に依頼した。
8 月 11 日	校了
8 月下旬	8 月 20 日頃より、参加者にプログラムが発送された
9 月中旬	申し込み期限延長後の参加者には、大会後、プログラムを発送した

○参加者数内訳

参加者数とオンライン会場の参加者数については、表 7・表 8 の通り。

表 7 参加者内訳

会 員	一般	1390	1661
	学生	253	
	名誉会員	18	
非会員	一般	106	260
	学生	154	
海外協定学会招聘者		2	2

* 重複申し込み：7名

表 8 オンライン会場の延べ参加者数

セッション	参加者数
オープニングセレモニー・総会	585
本部企画シンポジウム①	500
本部企画シンポジウム②	620
スポーツ文化 課題A シンポジウム	244
スポーツ文化 課題B シンポジウム	243
スポーツ文化 課題C シンポジウム	165
学校保健体育 課題A シンポジウム	252
学校保健体育 課題B シンポジウム	336
学校保健体育 課題C シンポジウム	292
競技スポーツ 課題A シンポジウム	319
競技スポーツ 課題B シンポジウム	178
競技スポーツ 課題C シンポジウム	283
生涯スポーツ 課題A シンポジウム	266
生涯スポーツ 課題B シンポジウム	192
生涯スポーツ 課題C シンポジウム	134
健康福祉 課題A シンポジウム	205
健康福祉 課題B シンポジウム	191
健康福祉 課題C シンポジウム	113
スポーツ文化 課題A 口頭発表①	114
スポーツ文化 課題A 口頭発表②	181
スポーツ文化 課題B 口頭発表①	135
スポーツ文化 課題B 口頭発表②	147
スポーツ文化 課題B 口頭発表③	67
スポーツ文化 課題C 口頭発表①	125
スポーツ文化 課題C 口頭発表②	86
学校保健体育 課題A 口頭発表①	216
学校保健体育 課題A 口頭発表②	175
学校保健体育 課題B 口頭発表①	156
学校保健体育 課題B 口頭発表②	160
学校保健体育 課題B 口頭発表③	81
学校保健体育 課題C 口頭発表①	89
学校保健体育 課題C 口頭発表②	142
学校保健体育 課題C 口頭発表③	85
学校保健体育 課題C 口頭発表④	129
学校保健体育 課題C 口頭発表⑤	100
競技スポーツ 課題A 口頭発表①	138
競技スポーツ 課題A 口頭発表②	188
競技スポーツ 課題A 口頭発表③	173

セッション	参加者数
競技スポーツ 課題B 口頭発表①	106
競技スポーツ 課題B 口頭発表②	105
競技スポーツ 課題C 口頭発表①	90
競技スポーツ 課題C 口頭発表②	83
競技スポーツ 課題C 口頭発表③	81
競技スポーツ 課題C 口頭発表④	90
競技スポーツ 課題C 口頭発表⑤	164
競技スポーツ 課題C 口頭発表⑥	56
生涯スポーツ 課題A 口頭発表①	71
生涯スポーツ 課題A 口頭発表②	96
生涯スポーツ 課題B 口頭発表①	108
生涯スポーツ 課題C 口頭発表①	79
生涯スポーツ 課題C 口頭発表②	48
健康福祉 課題A 口頭発表①	130
健康福祉 課題B 口頭発表①	139
健康福祉 課題B 口頭発表②	42
健康福祉 課題C 口頭発表①	55
健康福祉 課題C 口頭発表②	79
健康福祉 課題C 口頭発表③	79
交流企画	184

専門領域名	参加者数
体育哲学	120
体育史	141
体育社会学	511
体育心理学	630
バイオメカニクス	519
体育経営管理	116
発育発達	182
測定評価	223
保健	102
体育科教育学	440
スポーツ人類学	274
アダプテッド・スポーツ	106
体育・スポーツ政策	64

○研究発表数一覧内訳

研究発表数一覧については、表 9 の通り。

表 9 研究発表数一覧

テーマ別研究発表	区分	口頭発表	ポスター発表	合計
スポーツ文化研究部会	課題A	8	0	8
	課題B	11	0	11
	課題C	11	0	11
学校保健体育研究部会	課題A	10	0	10
	課題B	11	0	11
	課題C	27	0	27
競技スポーツ研究部会	課題A	12	0	12
	課題B	7	0	7
	課題C	26	0	26
生涯スポーツ研究部会	課題A	7	0	7
	課題B	3	0	3
	課題C	7	0	7
健康福祉研究部会	課題A	4	0	4
	課題B	9	0	9
	課題C	16	0	16
合計		169	0	169

専門領域別研究発表	口頭発表	ポスター発表	合計
体育哲学	1	0	1
体育史	6	0	6
体育社会学	10	0	10
体育心理学	9	43	52
バイオメカニクス	9	20	29
体育経営管理	4	4	8
発育発達	0	13	13
測定評価	12	17	29
体育方法	0	63	63
保健	6	0	6
体育科教育学	14	14	28
スポーツ人類学	5	1	6
アダプテッド・スポーツ科学	4	0	4
合計	80	175	255

(2021年8月5日時点)

※下記の 2 題が取り下げとなった。

[09 方-ポ-63]、[02 社-ロ-11]

(6) 会場

1) Zoom 会場

1,000 名まで入室できる会場を 2 会場、500 名まで入室できる会場を 3 会場、300 名まで入室できる会場を 13 会場、計 18 会場で運営した。本部企画シンポジウム、応用研究部会企画テーマ別シンポジウムはウェビナー形式で、その他のプログラムはミーティング形式で実施した。入室許可（待機室）の設定を行わなかった。ウェビナー形式のセッションにおいては、コーディネーターおよびシンポジストをパネリストとして設定し、事前にログイン情報を通知した。

2) 運営と補助

1 日目および 2 日目の各セッションについては、創文印刷が会場担当者を手配した。

応用研究部会企画テーマ別シンポジウムのコーディネーターおよびシンポジストに対しては、各セッションの開始 15 分前に入室するように連絡し、会場担当者が出席を確認した。質問は Q&A 機能または「手を挙げる」機能が使用できることを伝え、当日の進行方法は各コーディネーターに一任した。

応用研究部会企画テーマ別研究発表においては、当日のタイムキーパーを組織委員会の手配した。筑波大学の大学院生など 18 人を募って雇用し、彼らの希望する研究部会や課題も考慮しつつ、適切に配置した。また、事前にマニュアルを作成・配布し、進行に支障が生じないように努めた。

各専門領域企画に関しては、それぞれの専門領域に関係の深い組織委員会委員が共同ホストを務め、適当な委員がいない専門領域には、筑波大学の教員または博士課程大学院生が共同ホストを務め、ネットワークトラブルなどに備えた。なお、大学院生 2 名については、アルバイトとして雇用した。

3) オンデマンド配信

本部企画シンポジウム 1・2、応用研究部会企画テーマ別シンポジウム（15 セッション）、応用研究部会企画テーマ別研究発表（39 セッション）について、オンデマンド配信した。

オンデマンド配信にあたり、発表及び質疑応答の内容に人権または倫理的な問題が含まれないことを確認する必要があった。そのため、シンポジウムのコーディネーターおよびテーマ別研究発表の座長に対し、個人のプライバシーや尊厳に関わる発言や発表があり、そのまま配信されることが適切でないと判断される事例がないか確認を求めた。その結果、1 例について、適切でない発言部分を削除し、編集した録画動画を配信した。

3. 大会運営上の反省点と次回大会への提言

(1) 広報

○大会案内

ウェブサイトの公開スケジュールに合わせて、掲載内容の検討を進める。専門領域への確認及び理事会での承認が必要な事項もあるので、早めに準備していくとよい。

○大会ウェブサイト

Confit のウェブサイトを利用するため全体のデザインは変更できない。そのため、トップ画像や

配色で主管校の特色を出していくとよい。

本大会では、広報に関わる委員会（担当）がなかったため、情報発信があまりできなかった。今後は、SNSを活用し積極的に情報を発信できるとよい。

○ポスター

早めに後援団体の承認を取り、ポスターに掲載できるようにする。また、ポスターの発送は、遅くとも早期参加登録前に行うとよい。

（２）協賛

- ① オンサイト（予算：中）、オンライン（予算：小）、ハイブリッド（予算：大）のいずれとするかは早めに決定することが重要。そのことが協賛メニューの作成や協賛依頼を効果的かつ早めに行えることにつながるため。
- ② 毎年協賛していただいている企業、および毎年ではなくてもこれまでに協賛していただいたことのある企業は、次回大会においても有力な協賛企業候補であるので、次回大会の実行委員は、早めに（できれば大会の１年前から）それらの企業に連絡をとり、協賛打診することが大切と考えられる。特に、プログラム冊子広告で表２～４に協賛してくれる大口企業は最も早い段階でアプローチしておくことが重要である。また、繰り返しになるが、実行委員個人のつながりも非常に重要である。
- ③ オンライン開催の場合には、企業側からみた魅力的な協賛メニュー（特に WEB 展示関係）が必要である。シンポジウムや口頭発表などの前後や合間に協賛企業の広告宣伝をするサービスがあってもよいかもしれない。ただし、そのことによる費用（経費）のアップにもなってしまうため、その必要性については慎重に検討すべきである。
- ④ 必ずしも協賛金を沢山獲得することが良いわけではなく、あくまでも必要経費の合計から参加費収入および本部からの補助金を引いた残りを協賛金で賄うことになるので、そういう意味では、予算委員会（・広報・企画委員会）との緊密な連携が不可欠である。
- ⑤ ②でも記載したが、実行委員が関係（声掛け・依頼）する企業、大学、団体からの協賛が多かったことから、実行委員の選定（企業や団体とのつながりが多い・強い委員を選定すること）は重要と考えられる。
- ⑥ 協賛メニュー金額（プログラム冊子広告やWEB 展示など）の妥当性（費用対効果）については、十分に検討し尽しているとは言い難く、大会ごとに精緻な検討が必要である。特にオンライン開催の場合には、大会HPへのアクセス数、WEB 展示へのアクセス数などを大会後に入手することができるサービスを付加しておくともよいかもしれない。

（３）経理

- ① 経理委員会はどこが主導するのか？
経理委員会は、主管校から２名と学会理事（会計委員長）１名の計３名で構成され、学会事務局の会計担当と連携して進めていった。組織委員会と学会本部との役割がはっきりとしなかったが大会開催経験がある学会本部の助言を適宜得ながら、主管校主導で進める方が効率的である。
- ② 開催形式の決定時期はいつ決まるのか？
大会開催形式が決まらない段階で予算書を理事会に提案することになったので、大会開催形式（フルリモート、ハイブリッド、対面）ごとに、予算案を作成することとなった。特に、支出の大部分を占める外部委託経費については、フルサポートから最小限のサポートまで３段階を想定したうえで、企画委員会と話し合いながら何度も修正をした。大会参加費についても、前回大会の参加費と参加者数を参考にして設定したが、フルリモート形式で、いずれも大幅に変更すること

となり、収入減にみあう予算案を再構成することとなった。その段階で、渉外委員会と会議をもち、協賛金の目標等を修正して具体的な動きを進めたが、負担が大きかったように思う。

③ 金銭出納は事務局で一元化

主管校では現金を扱わず、すべての金銭的なやりとりは事務局で対応することとした。

そのため、大会用の新たな口座開設は行っていない。そこで、新たに臨時雇いについての申し合わせを作成し、フローに則って企画委員会、総務委員会とも連携して従事者募集と業務管理を行ってもらった。

経理委員会は提出された書類の確認と支払い指示をした。また、外部委託費や印刷費等は、組織委員会で確認した見積・請求書を事務局に提出し、事務局が支払いを行う形にしたことで、主管校が直接現金を扱う必要がないようにした。

(4) 企画

企画は、企画委員会のプログラム担当 2 名（中田・國部）が主に担当した。各セッションの運営方法を検討し、プログラムの時間割を作成し、演題番号を付与し、アルバイトを配置した。特に、演題締切後の 1 ヶ月程度で、Confit に演題情報を入力する作業が、時間も限られており、負担が大きかった。

組織委員会、学会本部、応用（領域横断）部会、専門領域の間の連絡が煩雑であった。各応用研究部会、各専門領域の代表者が組織委員会に入っていると、より連絡がスムーズであったかもしれない。

オンライン業務を取りまとめる創文印刷、ウェブシステムを構築しているアトラスそれぞれに連絡が必要なことがあったり、それに対して事務局、経理委員会、企画委員会が個別に関わるがあったりして、情報共有が難しい時があった。連絡調整はメールベースでなく、プラットフォームで行った方がよかったかもしれない。

テーマ別研究発表の数がセッション間で偏りがあった。今回は課題 C（2 日目午後）の発表数が多かったことから、次回大会ではそれを踏まえた対応ができると良い。また、発表申込時に、テーマ別研究発表とするか専門領域での一般研究発表とするか迷った会員がいた。応用研究部会における議論を伝える工夫がなされると良い。

オンライン発表では質疑応答が難しく、議論を活発にするための工夫（コメント欄やブレイクアウトルーム、メール等の活用、英語による発表への配慮）があると良い。また、テーマ別研究発表では議論が不十分であると感じた。例えば数名の発表後、発表者間で議論をする方法も考えられる。

(5) 参加・発表申し込み

○参加・発表申し込み

登録システム移行後のはじめての大会となるため、試行運用サイトでのテスト登録を大勢の方々に協力いただき、事前に改修することができた。4 月以降の申し込みでは、例年に比べて問い合わせも少なく、とくに大きなトラブルも発生しなかった。

○領収書発行

参加者より、領収書の発行方法がわからないという問い合わせが数件あった。ウェブサイト上に、発行手順の詳細を掲載しておくといよい。

○大会プログラム（冊子）作成

今大会から領域横断セッションが主となり、プログラム構成が大幅に変更されることになった。そのため、プログラムの構成やデザイン、演題・シンポジウムに関する掲載ルール等について、作業を進めながら対応・方針を検討することが多く、当初の予定よりも校正に時間がかかってしまった点が次年度への課題である。

（６）会場

会場は、企画委員会の会場担当３名（宮崎・大山・松井）が主に担当した。オンサイトからオンラインに切り替わったことから、会場担当はオンラインでの実施に必要なマニュアルや注意事項の作成を担った。

反省点としては、Zoom の使い方に慣れていない方用のマニュアルを作成したが、そもそもの大会参加システムのマニュアルが必要だったのではないかと考える。大会当日まで、どのように大会システム（Zoom）に入ればよいか、という点の案内が不十分であった。

テーマ別研究発表では、タイムキーパーを設置したが、ベルの音がノイズとみなされ、聞こえないことがあった。ノイズ処理の解除方法に気づき、対応したが、事前に周知できればよかった。

本部企画シンポジウム 1

日 時： 9 月 7 日（火） 10：30 ～12：30

会 場：会場 1

テーマ：体育・スポーツ・健康科学を基盤とした Evidence Based Sport Policy の開発に向けて

コーディネーター：工藤 保子（大東文化大学）、水上 博司（日本大学）

シンポジスト：水上 博司（日本大学）

学会の組織資源を活かしたエビデンス蓄積の仕組み

田邊 解（筑波大学）

スマートウェルネスシティ創生のためのエビデンス蓄積と政策提言

田原 淳子（国士館大学）

日本学術会議における健康・スポーツ科学分野の活動と提言

熊谷 哲（公益財団法人 笹川スポーツ財団）

国が推進する EBPM の課題と教育現場の実際

○シンポジウムについて

本シンポジウムは、学会理事会内に設置されている政策検討・諮問委員会「政策課題化検討分科会」が、2020 年 3 月に議論の成果を取りまとめ発表した「日本体育学会における日常的な Evidence Based Sport Policy（EBSP）蓄積に向けた仕組みづくりに関する提言」を受けて企画したものである。本提言では政策エビデンスを「つくる」「つかう」「つたえる」という 3 つの局面から想定される学会の構造改革プランが描かれているが、このプランの背後には数多くの困難が待ち受けている。

初めに、2017・18 年度の政策課題化検討分科会の座長を務めた水上博司氏（日本大学）から、本シンポジウムでは、こうした困難を共有し、体育・スポーツ・健康科学の「社会還元」という目的を果たすための EBSP 開発の道筋を提示したい旨の趣旨説明がなされた。続いて田邊解氏（筑波大学）からは、同分科会で水上氏と共に検討を重ねた経験と筑波大学スマートウェルネスシティ政策開発研究センターで複数の自治体を対象に取り組まれている実践者の立場から、田原淳子氏（国士館大学）からは、日本学術会議の連携会員として「健康・スポーツ科学分科会」に 2006・20 年、提言の作成に関わった経験と体育分野以外の学会の視点も含めた立場から、学会員以外でシンポジストを引受けてくださった熊谷哲氏（公益財団法人 笹川スポーツ財団）からは、京都府議会議員を 3 期務め、内閣官房行政改革推進本部審議官や、内閣府規制・制度改革事務局長等を歴任し、国や自治体の課題解決に長年取組まれてこられた立場から、多くの知見や示唆をいただいた。

○内容について

水上博司氏は、体育・スポーツ・健康科学を基盤とした Evidence Based Sport Policy（EBSP）開発の重要性と、開発の道筋では経験に基づく Episode-Based から Evidence-Based へ。個人では困難なエビデンスの収集・蓄積を学会という組織資源の動員による個人から組織・制度への可能性を述べた。本学会の「社会のための学術」を目指すこれまでの取組みを紹介するとともに、2020 年にまとめた提言から、エビデンスをつくる（ビジョン先行型の研究）・つたえる（組織内資源の再構築）・つかう（研究業績の評価）を詳細に報告し、この仕組みの限界と可能性を睨みつつ各報告者から議論を深めていただきたい旨を述べた。

田邊解氏からは、本学会が研究成果を政策エビデンスとして収集・蓄積し、EBSP へ活用していくためには、どのような課題や可能性があるのかについて、自身が所属する研究センターで実践している「健康ポイント制度」を事例に報告いただいた。健康寿命延伸のためには「予防政策」が重要であり、そのために個人の健康投資を後押しするシステムとしてこの制度を展開しているが、当初の自治体の反応は

「公平性」が壁となり、センターではエビデンスとなるデータを提供し続けることによって理解を得たとのこと。現在は実証フィールドとして 6 都市で展開しているが、4 つのプラットフォーム（自治体の首長研究会／民間企業の協議会／政府のヘルス&コミュニティ議員連盟／センターが担う学術機関）の連携協力により、エビデンスの蓄積と政策提言を目指している。最後に、EBSP 開発の道筋として、① 社会課題の解決に向けた社会実証実験の必要性、②領域横断的な研究チームの構築と実証フィールドの確保、③社会実証実験の成果を政策に落とすルートの構築の必要性を述べた。

田原淳子氏からは、日本学術会議がスポーツ庁からの審議依頼を受けてまとめた「科学的エビデンスに基づく『スポーツの価値』の普及の在り方」の検討内容として、アウトカムの明確化や EBPM（証拠にもとづく政策立案）に必要なエビデンスの定義、エビデンスレベルの定義と把握、EBPM推進のための体制整備が紹介された。健康・スポーツ科学分科会でまとめた「子どもの運動・スポーツ」に関する提言内容の審議過程では、2008年当時、子どもの運動指針策定に必要な科学的エビデンスが十分でないことが明らかとなり、その後2017年まで継続的に検討・提言がなされた。日本学術会議の現状の認識としては、社会問題の解決に向けて、単独の学術分野から得られる知のみでは解決が困難なため、社会のための学術としての「知の統合」の確立が不可欠とのこと。まとめとしては、①エビデンスづくり（つくる）・伝達（つたえる）・活用（つかう）を循環で考えること、②社会還元できる「知の統合」を増強する仕組みを多角的につくること、③日本学術会議、学術連合等との組織的な連携を拡大・強化することの必要性を述べた。

熊谷哲氏からは、EBPMの推進は、今から 10年前の 2012 年度「目標管理型の政策評価」からはじまり、2017 年の EBPM 推進方針が今につながっているとのこと。EBPM の現状における政府の課題認識としては、実際の政策プロセスでロジックモデルの活用等を実践する取組は未だ限定的であること、ロジックモデルの意義や作成方法が分からないまま作成されるケールがあること、また効果検証で統計的手法を用いた因果関係の分析等を実施しているものは限定的であることを指摘している。EBPM推進上の課題についてスポーツ基本計画を例に説明がなされ、指標と具体的施策の関係が曖昧であること、指標としての平均値への過剰依存などが指摘された。最後に、2020年 3月に本学会でまとめた提言に基づいて、EBSPの構築に向けた問題提起を行い、既存政策（施策・事業）検証の重要性、異なる調査・研究データの統合利用と取得するデータ項目の共通化、ロジックモデルの精緻化への貢献など、本学会に向けて多くの示唆をいただいた。

○運営について

事前の打合せは、本番1 週間前の8 月31 日13 時からオンラインで実施した。当日は15 分前に Zoom会場に入室可能となるが直前の打合せ時間がとれないことから、本番を想定して詳細確認を行った。

当日は、演者も含めて約 300 人の参加があった。タイムスケジュールは、コーディネーターからの趣旨説明 15 分の後、演者 3 名から各 20 分発表、質疑応答を 20 分の流れで進行した。資料の配布については、各演者の発表後、ウェビナーのチャット機能を使って共有した。後日閲覧可能であるオンデマンド配信時には配布をせず、ライブ配信時の参加者のみの特典とした。質疑応答については、ウェビナーの Q&A 機能を使用した。書き込みの際の留意点として、口頭の質問と同様に、質問者の名前と所属を記入後、どの演者への質問かを明記したうえで、簡潔な質問を書き込むようお願いをした。

○その他

最後に、本シンポジウムの企画は、日本体育・スポーツ・健康学会の理事会内に設置された政策検討・諮問委員会「政策課題化検討分科会」の座長を務められた水上博司氏の企画・構想により実現したものである。ここに水上氏の献身的なご尽力に、深く感謝を申し上げます。

文責：工藤 保子（大東文化大学）

本部企画シンポジウム 2

日 時： 9 月 7 日（火） 10：30 ～12：30

会 場：会場 2

テーマ：若手研究者に求められる体育・スポーツ・健康科学の社会的使命
—「学際性」のリアルとロマン—

コーディネーター：藤川 和俊（帝京平成大学）、中澤 雄飛（帝京大学）

指定討論者：菊 幸一（筑波大学）

シンポジスト：竹村 瑞穂（日本福祉大学）

スポーツ科学研究における学際性の確立に向けて

工藤 裕子（中央大学）

外からアプローチする「スポーツ科学」と中から外へのアプローチの可能性

松井 崇（筑波大学）

二流柔道家の“ありのまま” 研究半生に学際性はあるか？

—運動、武道、そして e スポーツへ—

○シンポジウムについて

本シンポジウムは、日本体育・スポーツ・健康学会の若手研究者委員会での議論を経て企画されたものである。それは、本学会が「学際的」ないしは「領域横断的」な研究を推進している状況を鑑みてのことである。しかし、学際的・領域横断的な研究には、その社会的意義と共に様々な課題も指摘され、若手研究者の立場からはそれを「リアル」と「ロマン」と表現した。リアルには研究費や研究環境、ポストの確保という課題、他分野との関わり方、個別の専門領域（discipline）とのバランス等があり、他方、ロマンには新しい分野への挑戦や研究テーマの発掘、学術の社会的意義の発信等があると思われる。そこで、実際に学際的・領域横断的な研究を実践されている先生方をお招きし、キャリアパスやリサーチパス等からこれからの若手の研究とその社会的使命というものを検討することとした。

まず、竹村先生からはご自身のキャリアパス・リサーチパスをご紹介頂きつつ、ドーピング問題を事例に哲学・倫理学から学際的研究に発展させる具体的なプロセスをお話し頂いた。さらに、研究においてはその目的を明確にするために「現実的な世界の問題となんらかのつながりを持つこと」が重要であること、そしてそれには「教養」および「教養教育」が重要であることをお話し頂いた。続いて、松井先生からはご自身の柔道の経験が体育学の研究へと繋がってきたこと、そして「経験に基づくフレッシュで実感のこもった課題感が、学問としての発展に特に重要になる」というお話しを頂いた。3人目に登壇された工藤先生からは、スポーツ科学の外と中、両方の視点からお話し頂いた。ここでは、学際的研究の機会（偶然の「出会い」）を大切にすること、戦略的ないしは個々の研究者の特性を活かしたメンバー編成が必要であること、加えて学際的研究には双方に学びの可能性があるのみならず、新しい研究課題・方法論を発見できる可能性もあることをお話し頂いた。

3名のパネリストのご発表の後、菊先生を指定討論者としてお迎えして議論が交わされた。菊先生からは、まず体育・スポーツ・健康科学には職業的基盤があること、すなわち大学およびそれまでの教育機関（初等・中等教育）において体育・スポーツ・健康科学に関する教育が行われているからこそ、大学での学問が可能となっているという前提が確認された。その上で、「学際的に展開されていた研究をどのように社会あるいは体育・スポーツ・健康科学に還元するのか」、また「他学問とはどのように出会っていくのか」という質問が挙げられた。これに対して、パネリストの先生方からは「アウトプット（例えば論文投稿）の方法は個別の研究領域毎にならざるを得ないのか」、「体育・スポーツ・健康科学は、教育学、福祉分野と親和性があるように思われるが、意外にも出会う場が少ない」という意見が出され、新たな課題が見出されたところで本シンポジウムは終了した。

○運営について

ウェビナー形式のため、視聴者の顔が見えないのは、(仕方がないことではあるが) 会場の雰囲気が掴みにくく、進行の上で少々難しさを感じた。また、シンポジウムの途中から参加する方もいたため、はじめに注意事項やお願いを説明しても、ご理解頂けないケースもあった。この点については、チャットに記載し、掲示を残しておく等の工夫が必要であったと反省している。同様に、Q&A 機能による質疑応答の際にも、本文に所属と氏名を記入しないと「匿名希望」と表示されてしまうため、予め準備をしておけば良かったと感じている。業者のシステム管理の方が常駐してくださったことは、大変有り難く、安心感があった。進行役としては、Zoom ミーティングとウェビナーでは異なる点もあるため、できれば事前に簡単なリハーサルを行っておけば、よりスムーズな運営ができたのではないかと反省している。

○その他

同日の夕方に開催された交流企画（「若手研究者委員会プレゼンツ『学会の未来を語る会』」にもパネリストの方々にご参加頂けたことで、シンポジウムと交流企画の双方の内容がより充実したものになったように感じられた。他方、「もう少しだけ感じた感じで交流したかった」という意見もあり、この点については、今後の課題としたい。オンライン形式での開催の場合、従来の「フロアでの意見交換・交流」という場面がないため、このような大会期間中のいわゆる「余白」のような場で行われる交流の意義をどのように捉え、解釈し、交流の方法を検討していくことは今後も必要であると思う。

文責：中澤 雄飛

交流企画：若手研究者委員会プレゼンツ「学会の未来を語る会」

日 時： 9 月 7 日（火） 17：30 ～19：00

会 場：会場 3

○企画について

今回の学会大会は全面オンライン開催となり、例年であれば学内の食堂等で飲食・歓談をしながらの情報交換会が行われていたところ、それもかなわない事態となった。そこで初日を振り返り、学会役員、組織委員会の先生方や本部企画シンポジウムのシンポジストを交え、これからの学会並びに学会大会の未来について語り合う場としての交流企画を zoom のミーティングにて設けることとなった。

当日は、一階千絵若手研究者委員会委員長（群馬県立女子大学）の司会の下、日本体育学会会長である菊幸一先生（筑波大学）、次いで大会事務局長の會田宏先生（筑波大学）にご挨拶をいただいた。続いてテーマ別企画の振り返りとして応用（領域横断）研究部会を代表して中川昭先生（筑波大学名誉教授）に企画実施に至るまでの経緯のご説明と今後の展望についてお話しいただき、若手研究者委員会委員 5 名がそれぞれの部会のシンポジウムを聴講して所感などを報告した。さらに当日午前の本部企画シンポジウム 2「若手研究者に求められる体育・スポーツ・健康科学の社会的使命：「学際性」のリアルとロマン」のシンポジスト 3 名にご参加いただき、延長戦とも言うべきシンポジスト間でのコメントの交換をいただいた。最後に、内藤久士先生（順天堂大学）より次回学会大会のご案内、菊幸一会長より改めて本企画を振り返っての一言をいただき、閉会となった。参加者は最大時で約 120 名であった。

○運営について

本企画の運営に当たっては、ほぼ全面的に若手研究者委員会の裁量に任せていただけることになったことが、従来の学会大会時の情報交換会との大きな違いであった。

若手研究者委員会で本部企画シンポジウム 2 と交流企画にかかわることになった時点から、これらに関連付けて行うことはできないかという構想があった。そこに、学会名称の変更、全面オンライン開催、テーマ別研究発表・シンポジウムの本格的な導入といった大きな変化もあることから、今回の学会大会の考え方や狙いをひろく会員の皆様へ理解していただく場として本企画を位置づけていくこととなった。

企画の内容や当日の進行については委員会内で繰り返しメール審議を行った。本部企画シンポジウム 2 コーディネーターの先生にはシンポジストの先生方へご参加を呼びかけていただいたり、すべての専門領域から委員が出ていることを生かして各研究部会のシンポジウムを分担して聴講したり、企画開催中は委員 2 名がシンポジストへのコメントのまとめ役として対応に当たったりと、若手研究者委員会総出で準備・運営に従事したと言ってよい状況であった。

○その他

従来の対面形式での情報交換会と大きく異なったのは、参加者間、特にスピーカーとして登場しない参加者間の意見交換・情報交換の機会が大きく制限されてしまったことだと考えられる。「チャットに打ち込むのは時間がかかりもどかしい」という声は交流企画以外の場面についても聞かれ、また個別チャット機能を用いると 1 対 1 のやり取りになってしまうため他の参加者がやり取りに入ってこられなくなる。実際に、交流企画中にチャット機能を用いて本部企画シンポジストの先生方への質問やコメントを募ったが、寄せられたコメントは 1 件だけにとどまった。活発な情報交換を促すための取り組みは、今後情報交換会をオンラインで行うにあたっての課題の一つと言えよう。

また、飲食・歓談を楽しみながらの和やかな雰囲気を楽しむためにも、対面形式での学会、情報交換の復活が待たれるところである。

文責：一階 千絵（群馬県立女子大学）

テーマ別研究発表・シンポジウムについて（まとめ）

今回の学会大会では、テーマ別の研究発表とシンポジウムが中心的なプログラムとなり、3日の大会期間の中で1日半をかけて集中的に実施された。このテーマ別企画の目的は、重要な社会的／実践的課題の解決に向け、様々な専門領域の研究知見を集積し統合すること、併せて、異なる専門領域間での研究者の交流と連携を図ることであった。

そのために、学会内に新たな研究組織として設置された5つの応用（領域横断）研究部会において、それぞれ3つの「解決すべき上位課題」が設定され、これらの課題に応じて研究発表とシンポジウムが組織化された。この内、テーマ別研究発表では、設定された上位課題に広く関連を持つ幾つかのテーマの下で口頭発表と質疑が行われ、テーマ別シンポジウムでは、設定された上位課題に関連する1つの特定のテーマに焦点を当て多様なバックグラウンドを持つシンポジストを中心に討議が行われた。

研究知見の統合化や学際的な議論の活性化といった当初掲げた目的が今回どの程度達成されたかの評価は、オンライン開催という別の要因の影響と相俟って、なかなか難しいところであるが、学会員が新たな形式の学会大会を実際に経験し、今後本学会が進むべき1つの方向性を認識できたという点においては確かな成果があったと言えるであろう。

一方で、今回の学会大会の企画と実施を通して、幾つかの問題点や課題が見えた。これらについては36ページ以降の研究部会別の報告にも記載されているが、全体として以下にまとめておく。

○テーマ別研究発表について

- ・「解決すべき上位課題」に関連させた発表や議論が少なかった。また、互いの発表内容の類似性が乏しいセッションが少なからずあった。今後は、テーマ別研究発表として採用する際の基準を再考し明確にすることが必要と考えられる。
- ・専門領域別研究発表について、研究発表の数が非常に少ない専門領域が幾つかあった。今後は、テーマ別研究発表を絞り、テーマ別研究発表と専門領域別研究発表の数的バランスを考慮することが望ましいと考えられる。
- ・セッション内での発表者同士の議論の機会がなかった。また、発表者とフロアーとの議論も十分ではなかった。今後は、以前にオーガナイズドセッションとして実施されていたように、各セッションの最後に総合討議の時間を設けるなど領域横断的な議論を活性化させる工夫が必要と考えられる。

○テーマ別シンポジウムについて

- ・テーマ別シンポジウムの中には、シンポジストの専門性に偏りが見られ「解決すべき上位課題」への学際的／総合的なアプローチが十分に実現されていないものがあった。今後は、学際性／総合性をより一層考慮したシンポジストの選定が必要と考えられる。また、このことが難しい場合、今回設定された「解決すべき上位課題」を再考することも必要であろう。
- ・シンポジスト同士、シンポジストとフロアーとの議論の時間が少なかった。これにはオンライン形式の影響もあったが、今後は、シンポジストの人数や討議に割り当てる時間枠を再考することが必要と考えられる。
- ・女性のシンポジストが少なかった。今後は、ジェンダーバランスを考慮したシンポジストの選定が必要と考えられる。
- ・今後、学会員の学際的活動をより一層活性化するために、公募型シンポジウムなど多くの学会員が主体的に関与できる企画を新たに導入することが望ましいと考えられる。

文責：中川 昭

テーマ別研究発表・シンポジウムについて（テーマー一覧表）

「スポーツ文化」研究部会		
解決すべき上位の課題	テーマ別シンポジウムのテーマ	テーマ別研究発表のテーマ
【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか	SDGsとスポーツとの接点を探る	【課題A-①】スポーツと国際平和
		【課題A-②】スポーツを通じた開発
		【課題A-③】格差・貧困問題（健康格差／地域格差含む）と運動・スポーツの推進
		【課題A-④】地球環境と共生するスポーツ
		【課題A-⑤】スポーツと人間の幸福
		【課題A-⑥】持続可能なスポーツ文化（環境、用具、施設など）
		【課題A-⑦】グローバル・スポーツイベント
【課題B】 人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか	スポーツの理想とその暴力性： 多様なスポーツ文化の醸成へ向けたスポーツ研究の自己反省	【課題B-①】スポーツと倫理的諸問題
		【課題B-②】スポーツと科学のかかわり（自然科学、人文社会科学、科学技術など）
		【課題B-③】スポーツと地域・社会（ボランティア、非常事態下のスポーツなど含む）
		【課題B-④】スポーツと経済（雇用、契約関連など含む）
		【課題B-⑤】スポーツと身体運動文化（e-sports、エクストリームスポーツ、ゲイゲームズなど含む）
		【課題B-⑥】スポーツの組織・ガバナンス
【課題C】 多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか	スポーツ文化の浸透戦略(1)： 文化の保存・流通の批判的検討から	【課題C-①】スポーツ文化におけるメディアの役割と課題
		【課題C-②】スポーツ施設・用具の流通と促進
		【課題C-③】スポーツ文化の記録・保存（スポーツ博物館、図書館、資料館など）
		【課題C-④】身体文化の保存・伝承活動（武術、芸能など含む）
		【課題C-⑤】スポーツプロモーションとしてのスポーツ教育（アンチ・ドーピング、オリンピック・パラリンピック教育など）
		【課題C-⑥】スポーツ文化とレジャーの課題・可能性（ツーリズム、環境保全など含む）
「学校保健体育」研究部会		
解決すべき上位の課題	テーマ別シンポジウムのテーマ	テーマ別研究発表のテーマ
【課題A】 大学体育の授業をいかに良質なものにするか	大学体育の社会的使命とその実現可能性を考える： 歴史的変遷からみる大学体育の現在地	【課題A-①】大学教育と大学体育
		【課題A-②】大学体育の指導内容
		【課題A-③】大学体育の授業デザイン
		【課題A-④】大学体育の評価と効果検証
		【課題A-⑤】大学体育の制度設計と運営
【課題B】 保健体育授業をいかに良質なものにするか	より良質な保健体育授業の具体像を考える： コロナ禍の保健体育から、あらためてその意義と価値を整理する	【課題B-①】保健体育授業に関わる政策
		【課題B-②】保健体育授業の評価
		【課題B-③】保健体育授業を支える諸制度
		【課題B-④】インクルーシブの視点を踏まえた保健体育カリキュラム
		【課題B-⑤】保健体育教師教育制度
【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか	科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導： 学習指導要領の内容と保健体育授業の実状との乖離	【課題C-①】体育・保健体育のカリキュラムに関する研究
		【課題C-②】体育・保健体育の学習指導方法に関する研究
		【課題C-③】幼児期から児童期の発育発達に関する研究
		【課題C-④】子どもの運動指導に関する研究
		【課題C-⑤】保健体育の指導に役立つ科学的エビデンス

「競技スポーツ」研究部会		
解決すべき上位の課題	テーマ別シンポジウムのテーマ	テーマ別研究発表のテーマ
【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか	トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点	【課題A-①】大学スポーツとトップアスリート養成
		【課題A-②】トップアスリートの養成システム
		【課題A-③】トップアスリートへのサポート
		【課題A-④】トップアスリートのキャリア
		【課題A-⑤】トップアスリートの価値
		【課題A-⑥】タレントの発掘、育成、トランスファー
【課題B】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか	パラ競技スポーツにおけるコーチ養成の現状とこれから	【課題B-①】障がい者を対象とした競技スポーツのコーチング
		【課題B-②】障がい者を対象とした競技スポーツのコーチ制度と養成システム
		【課題B-③】競技スポーツ（女性・ジュニアのスポーツを含む）のコーチング
		【課題B-④】競技スポーツ（女性・ジュニアのスポーツを含む）におけるコーチ制度と養成システム
【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか	ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるフィジカルトレーニングの新たな潮流	【課題C-①】競技者の体力に関するトレーニング
		【課題C-②】競技者の技術に関するトレーニング
		【課題C-③】競技者の戦術に関するトレーニング
		【課題C-④】競技者の心的・知的能力に関するトレーニング
		【課題C-⑤】競技者の複合的なトレーニング（①～④を複合的に組み合わせたトレーニング）
「生涯スポーツ」研究部会		
解決すべき上位の課題	テーマ別シンポジウムのテーマ	テーマ別研究発表のテーマ
【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか	共生社会と生涯スポーツは共存できるのか：スポーツのパラダイムチェンジが共存への鍵	【課題A-①】共生社会の実現に向けたスポーツ関連組織の可能性と課題
		【課題A-②】総合型地域スポーツクラブの質的充実と協働システム
		【課題A-③】学校運動部活動と地域スポーツのシステム化
		【課題A-④】地域の健康づくりに関わる協働システム
		【課題A-⑤】パラスポーツ推進をめぐる課題と協働システム
		【課題A-⑥】共生社会の実現に向けたスポーツ法・政策の可能性と課題
【課題B】 スポーツの産業化は生涯スポーツ・人・地域社会といかに関連するか	Well-Beingの実現に向けて：生涯スポーツのこれからと社会・産業、そして人	【課題B-①】健康づくりの産業化と生涯スポーツの推進
		【課題B-②】トップスポーツの産業化と課題
		【課題B-③】スポーツイベントの役割と課題
		【課題B-④】スポーツ空間産業とスポーツライフ・自然
		【課題B-⑤】ICTと身体・スポーツ体験の変容
【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか	国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点：国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて	【課題C-①】運動・スポーツへの参加を促す環境及び諸施策
		【課題C-②】運動・スポーツ習慣の形成・維持
		【課題C-③】運動・スポーツへの参加と心身の発育発達
		【課題C-④】アスリートにおける生涯スポーツの継続とその支援
		【課題C-⑤】女性や障がい者の運動・スポーツ環境と施策

「健康福祉」研究部会		
解決すべき上位の課題	テーマ別シンポジウムのテーマ	テーマ別研究発表のテーマ
【課題Ａ】 健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか	ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方： 「女」を生きることと健康・スポーツ	【課題Ａ-①】対象者に応じた心身における健康増進の捉え方やその評価
		【課題Ａ-②】運動指導による健康増進や体力向上
		【課題Ａ-③】アスリートやパラ・アスリートにおける心身の健康と福祉
		【課題Ａ-④】福祉社会（政策、制度、文化等）における運動と健康増進・体力向上
		【課題Ａ-⑤】運動と健康増進・体力向上をめぐる思想・歴史
【課題Ｂ】 認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか	認知機能改善のための身体活動の在り方	【課題Ｂ-①】体力・身体活動と認知機能
		【課題Ｂ-②】心理・社会的要因からみた運動・認知
		【課題Ｂ-③】運動・認知機能の発育発達
		【課題Ｂ-④】認知症予防（食事・栄養、認知と転倒、社会参加、政策、プログラム開発、その他）
		【課題Ｂ-⑤】運動・認知機能の測定評価
【課題Ｃ】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか	テレワーク時代における心身の健康の保持増進の工夫と提言（新しい生活様式と健康の保持・増進）	【課題Ｃ-①】身体活動・運動による生活習慣病の予防
		【課題Ｃ-②】身体活動・運動による心身の機能低下の予防
		【課題Ｃ-③】発育期・青年期における運動不足の現状と心身に及ぼす影響
		【課題Ｃ-④】生活習慣病予防のための身体活動・運動の動機づけと指導法（オンライン指導含む）
		【課題Ｃ-⑤】身体活動・運動の実施率を高める環境と福祉

スポーツ文化研究部会 課題A 研究発表

口頭発表①会場 9 では、40 名程度の参加があった。第 1 演者の藤谷氏・山田氏によるコスタリカへの野球の伝播・定着に関する研究、第 2 演者の阿羅氏による蹴鞠の保存・普及について新たなテクノロジーを用いた取り組み、第 3 演者の下窪氏による社会調査を利用したオリンピックの外国イメージの影響に関する研究、第 4 演者の溝口氏によるオリンピックの事前キャンプの参与観察の報告があった。阿羅氏の報告は、「グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか」という課題設定の本応用部会において示唆的であった。伝統芸能である蹴鞠の保存・普及には、鞠を作成できる職人や素材が限られているという課題がある。発表者は、鞠の皮をこれまで利用されていた雌鹿ではなく、エゾジカを利用すること、また発表者の勤務校の工学系の知見を利用し、新しい鞠の作成を検討している。質疑応答の議論の中で、報告者は、現在の蹴鞠の伝統的な方式を残しつつ、スポーツ・競争とは異なる日本的な身体文化を継承するために、これまでよりも簡易な方法で鞠を作成することにより、蹴鞠の文化を保持したいと回答した。伝統的な文化の消滅の危機はグローバル課題である。本報告のように、継承されてきた身体文化を、新たなテクノロジーを利用し、保護することにより、人類の豊かな文化を維持することが期待できる。

口頭発表①会場 10 では、80 名程度の参加があった。第 1 演者の清水氏は、「スポーツと幸福研究」の問題関心について概説し、OECD の「よい暮らし指標」等の事例を挙げ、幸福に関する国際社会の関心が高まるにつれて、「スポーツと幸福」に関する英語論文は増加している一方で、日本国内の関連研究は低調であると指摘した。第 2 演者の君塚氏は、スポーツと幸福に関する海外レビュー論文の傾向を分析し、掲載ジャーナルは心理学・医学系のものを中心になっていると同時に、スポーツや身体活動の範囲が各研究で統一されておらず、幸福度の測定方法にも課題があると指摘していた。第 3 演者の横山氏は、スポーツと幸福に関する文献の計量分析を実施し、競技的スポーツよりもレクリエーション的スポーツのほうが幸福に影響を及ぼし、チームスポーツよりも個人スポーツのほうが人生の目的に影響を与えうるのであると指摘していた。以上の研究は、「個人の幸福と～共生社会の実現に寄与する」という本学会の目的に合致するものであり、今後の学際的研究の進展が期待されるものである。第 4 演者の林氏は、体育学がいかなる倫理基盤のもとで、「Well-Being」に向けた研究を進展させるのかという問いをもとに、哲学的視点から検討を行い、体育学研究は倫理学における「卓越主義」に裏付けられたものであると指摘していた。非常に明快な考察がなされていたが、「卓越主義」と発表タイトルにある「Well-Being への隘路」との関係性について触れられていなかった点が惜しまれるところである。

スポーツ文化研究部会 課題A シンポジウム

シンポジウムのテーマ	SDGs とスポーツとの接点を探る
------------	-------------------

グローバル課題の解決にスポーツはいかに貢献できるのか。スポーツ文化研究部会の初日のシンポジウムでは、初年度の取り組みとして、国連が 2015 年に採択した「持続可能な開発目標 (SDGs)」を取り上げ、スポーツとの接点を探ることをテーマに議論を展開した。シンポジウムへの参加は 130 名ほどであった。

シンポジストは 3 名であり、一般財団法人グリーンスポーツアライアンスの澤田陽樹氏からグローバル課題とスポーツとの関係について「戦略的基軸の変化—本質とその客観的可視化—」と題する報告がなされた。澤田氏は海外のスポーツ団体と SDGs に関連する様々なプロジェクトを運営しており、海外の動向だけでなく、日本の課題を明確化する重要な示唆を提供してくれた。奈良女子大学の石坂友司氏には「オリンピックから考える SDGs とスポーツの関係性」と題して、東京 2020 大会における持続可能性のコンセプトや具体的な取り組み、その発信、評価や課題についての紹介をいただいた。東京 2020 大会では、脱炭素社会や自然共生都市の実現など Ecological な側面のみならず、多様性やパートナーシップなどの Sociocultural な領域でも多くの実践がなされており、東京 2020 大会の持続可能性に係る評価結果など、今後の課題につながる指標も示された。筑波大学の澤江幸則氏からは、「アダプテッド体育・スポーツが SDGs に果たす役割」についての報告があった。澤江氏は障がいを持つ方など多様な人々に運動やスポーツの機会を保障し、そのための方法論についても豊富な知識とご経験を有している。運動やスポーツの貢献として「人を育てる、人をつくる」という視点が示され、多くのスポーツ（研究）領域の日常的なシーンや取り組みの中に、グローバル課題の解決や持続可能性につながる貢献のあり方が潜在する可能性が浮上した。

議論を通じて、グローバル課題に対する体育・スポーツ・健康領域からの貢献は可能だと言える一方で、現在の日本は持続可能性への認識・取り組みのレベルが様々混在する時期にある。シンポジストの提案も踏まえ、今後の課題を以下に挙げる。

- ・SDGs の本質をつかむこと。我が国においてはキャッチーな言葉がコミュニケーションツールにとどまっているという懸念があり、澤田氏の指摘から「モード（空気）をコード（価値）に高めていく」必要性があること、そのために成果を数量的に評価し、価値を可視化することを目指す。＜新たなモデル・事例の提示＞
- ・石坂氏の提案の通り、IOC 等が主導する SDGs の発信力や取り組み自体は評価できるものの、より広く浸透させるためには、東京 2020 大会後も個々の意識を高める動きを持続させ、この課題に対する本気度を高めていく必要がある。＜議論の継続性＞
- ・澤江氏の報告から、グローバル課題や持続可能性につながる取り組みは、すでに日常シーンで非意識的に行われている（生態学的、社会文化的、個別的）。これらを積極的に意識化・言語化する機会を増やす。＜取り組みと認識の共有＞

スポーツ文化研究部会 課題 B 研究発表

スポーツ文化研究部会「課題 B」のテーマ別一般研究発表は、9月8日（水）に口頭発表①～③の3会場で行われた。

口頭発表①での研究発表4件は、スポーツ社会学やスポーツ哲学の視点からのものと思われる研究だった。その意味では領域横断の構成であった。また、視聴者は多かったと思われ、質問が出ないということにはなかった。但し、領域横断であるためか、あるいはオンラインであるためか、質疑時間に入っただけには質問が出ない、という傾向が共通していた。

口頭発表②では、宇野氏によるテキストマイニングを用いたスポーツマネジメントの研究動向に関する分析、林田氏による素朴理論に基づいた複数種目制運動部の学生の意識に関する調査研究、佐藤氏の丹下保夫の教育思想に着目した研究、張氏の新制度派経済学・組織の所有理論によるスポーツ事業組織モデルの考察の4つが行われた。発表者は分野以外の聴衆にもわかるように説明を工夫していたが、発表内容のテーマが多岐にわたっており、課題の核心をつく質問が生じにくかったように感じた。1つの発表会場で何か共通するテーマ（「オリンピック」や「部活動」など）を設定し、異なる分野の発表者が各々の視点から発表できるような場の設定の仕方も肝要であると考ええる。

口頭発表③は、男子新体操の発祥起源から今日的発展に至った経緯に関する山田氏の発表、1930年代前半の戦前日本におけるスポーツ医学者の発言や動向に注目した佐々木氏の発表、学問の拡大化と専門化に関するスペインの思想家オルテガ・イ・ガセットの論考を手がかりに本学会のあり方へ問題提起を行った高橋氏の発表の3題であった。紙面の都合上、ここでは印象深い質疑応答を挙げておく。それは、本学会が研究者の「居場所」として実感を持つことのできる組織であるべきではないかとする高橋氏の発表に対し、本学会には現場の人とつながる場がすでにあるのではないかと疑義が参加者から投げかけられたことであった。学会に対する認識の違いが明らかになるとともに、社会の細分化や多様性が広がる中、「総合的な解釈」を希求することの意義をめぐっても議論が交わされた。「スポーツの理想とその暴力性」と題したスポーツ文化研究部会「課題 B」のシンポジウムにつながる重要な論点であったことは間違いない。

最後に「課題 B」の一般研究発表全体に通底する課題を2つ挙げておく。

プログラム p. 18 に記載の『上位の解決すべき課題』の解決へ向けての示唆や提案に言及して下さい』との記述から、口頭発表①では、質疑応答の際に座長から発表者へ発言を求めた。但し、研究発表のなかで上位課題への示唆や言及を示した発表者はいなかった。他の研究発表を一部拝聴したが、その限りでは上位課題へのコメントを求めた座長はいなかった。今後、上位課題と一般研究発表との繋がりについては検討が必要であろう。

チャット機能を用いた質疑応答は、書き込み時間等の理由により行いにくかったのではないかと推察される。「手をあげる」機能による質疑の方が活用されていたように見受けられた。5分という質疑応答の時間の短さを考えると、「手をあげる」機能による口頭での質疑応答の方がスムーズに進行しただろうと考える。

スポーツ文化研究部会 課題 B シンポジウム

シンポジウムのテーマ	スポーツの理想とその暴力性 —多様なスポーツ文化の醸成へ向けたスポーツ研究の自己反省—
------------	--

本シンポジウムは、スポーツ文化研究部会「課題 B」の 1 年目の企画である。「課題 B」では、「人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか」という上位課題を設定している。本シンポジウムは、この上位課題を検討するための出発点として、体育学に関する学問論的省察を企図した。具体的に本シンポジウムでは、体育学に潜む暴力性（＝多様性を排除する力）に焦点をあて、既存の体育学のパラダイムや制度設計に存する課題を省察した。なお、本シンポジウムの参加者数は、総じて 240 名程度であった。

本企画の登壇者は、樋口聡氏（広島大学名誉教授）・清水諭氏（筑波大学）・森丘保典氏（日本大学）の 3 名であった。樋口氏からは、学問の暴力性との向き合い方やスポーツ科学論の立場についてお話いただき、暴力性の自覚・把握の必要性や「体育人のエートス」の変化に伴う学会の位置づけの変更可能性などをお示しいただいた。次に清水氏からは、わが国のスポーツ政策の変遷と多様性にかかわる諸問題についてお話いただき、政策とは異なる文脈からなされているアスリートの表現・主張に目を向けてゆくことの必要性などをお示しいただいた。最後に森丘氏からは、スポーツ科学における学際性・総合性および EBM（Evidence-based Medicine）の本来の意味についてお話いただき、研究者が実践者と解決すべき課題を共有したうえで、研究手法や解決方法を練りあげてゆくことの重要性などをお示しいただいた。

フロアディスカッションでは、主に、①東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の開催是非について学問の立場からどのように考えてゆくべきか、②各学問領域の専門性と領域間の学際性をいかに架橋してゆくか、の 2 点が議論された。東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会については、この大会を突き動かしている力の自覚・把握の重要性やスポーツ界の外部にまで視野を広げた議論の必要性が示された。また、専門性と学際性については、学問領域の制度的な独自性や学際という理念に拘泥するのではなく、具体的な課題への応答から研究のスタイルを模索してゆくことの必要性が示された。

概して、本シンポジウムの論点は、拡散している観がある。但し、この拡散は、多様性を確保しようとする本企画の趣旨からして一定の必然性を有する。その一方で、三者の議論に通底していたのは、体育学を顧みるうえでの、他者（実践者や体育・スポーツ界の外部）への応答の必要性であり、スポーツと多様性の問題を体育学の内部のみで考えることの限界であったといえる。こうしたことから、多様なスポーツ文化を醸成してゆくための鍵は、多様な人びとへの具体的な応答にあると推察できる。体育学には、多様性を一方的に尊重しようとする態度ではなく、多様性への具体的な応答から研究成果を産出・発信してゆく態度が求められるのかもしれない。上記の論点を整理しつつ、次年度の課題を検討してゆきたい。

スポーツ文化研究部会 課題 C 研究発表

本テーマ別研究発表報告では「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題が設定されている。参加者は30～50名を推移していた。スポーツ文化研究部会には、比較的、体育哲学、体育史、スポーツ人類学、体育社会学に籍を置く会員が多かったように思う。

質疑応答では、チャット欄に書き込む方法だと入力にかかるので、現場の判断で口頭での質問を併用するようになった。また、1度目の質疑に続く、2度目以降の細かなやり取りについては、口頭のほうがスムーズになる。質疑については、対面での学会大会で行われている形式に沿うように進めたほうが良い部分もあり、それは、座長、発表者、質問者に共有されていたように思われる。

発表者は、研究の背景に応用研究の趣旨を汲んでそれに言及する発表もあった。例えば、SDGsの項目と発表者の研究がどのように繋がっているのかを示すもの、シンポジウムとのつながりを意識するものなどである。その意味で、今大会から始めた応用研究というコンセプトは一定の理解が共有されているように思われる。

しかし、応用研究というコンセプトを汲み、研究の目的や結論の部分に研究成果を実社会に活かすための方向性を示そうとする発表者もいるが、その具現化の可能性については、今後の推移を見ておく必要があるように思う。

また、推論の域を出ないが、体育・スポーツ・健康学会という体育の中心学会で応用研究を志向すると、それが波及して体育やスポーツや健康の個々の学会でも基礎研究ではなく、応用研究としての研究がいくらか増えるかもしれない。

個々人の理解可能な範囲がどこまであるのかによるが、それでも、それぞれの専門領域で使用されている研究方法や学術用語が用いられると、専門領域から外れる人にとっては理解が追いつかなくなる部分があるように思う。このとき、体育学として蓄積してきた共有される研究方法や学術用語が、本当にあるのかが問われるように思う。また、発表者は、専門領域内と専門領域外のそれぞれに理解可能な説明をすることが求められるわけで、それは裏返せば体育学の全体像が見えているかどうかの問題かもしれない。しかし、発表者と質問者の専門領域が異なる場合、そのやり取りはそれぞれにとって考えていなかった関心や視点から生まれるので、有意義なやり取りもあったように思う。

これまでの体育学会では、13の専門領域があるにもかかわらず、参加者は自らが所属する専門領域の研究発表の場にいる傾向があった。そのため、長らく議論されてきた学際性や総合学としての体育学会というより、それぞれの体育やスポーツの専門領域の寄せ集め学会のようであった。そのため、学会大会で新しく知る研究者や研究成果も専門領域の範囲内に収まる傾向があった。しかし、今回の学会は、単純に個々人が所属する専門領域の枠組みを超える知を獲得する機会になったように思う。

スポーツ文化研究部会 課題 C シンポジウム

シンポジウムのテーマ	スポーツ文化の浸透戦略(1) —文化の保存・流通の批判的検討から—
------------	--------------------------------------

スポーツという文化に対する理解やイメージ形成に寄与していると考えられるその保存や流通、促進がいかにつえられるのか。それらをめぐって批判的に検討し、今後議論を掘り下げていく上での課題や論点を浮かび上がらせるべく、本シンポジウムは文化の保存と流通にフォーカスして企画された。参加者は、160名程であった。シンポジストの1人目、鈴木明哲氏（東京学芸大学）は、「スポーツ文化は保存できない」という命題を提示した。そして、スポーツ文化そのものの保存が可能であるなら、それはスポーツ実践の痕跡を記録することと言い換えられるべきであり、また保存というよりもそうした実践の継続継承であろうと述べ、この継続的営みを阻害する要因を取り除くべきことを主張された。では、実践の痕跡を記録するとは具体的にはいかなることか。続く2人目のシンポジスト、瀬戸邦弘氏（鳥取大学）は、スポーツ文化の動態をアーカイブする事例として応援団文化を取り上げ、スポーツ（特に野球）の周辺に存在してきたこの文化がいかに関承されてきたかを語った。

瀬戸氏は、濃密な関係の中で育まれる身体文化の継承は、自校文化の継承やそのアイデンティティ獲得のプロセスを内包した文化装置として機能していると述べる。続けて、動きの型を可視化するような技術や蓄積されてきている情報などをもって、研究者は何を保存し、保護するのか、活きた文化をどのように評価するのか、またそれをどのように文化財として生き続けさせるかという課題を提起した。そして、3人目の滝口隆司氏（毎日新聞社）は、コロナ禍での取材方法の変化やAI導入による実況や報道の変容を紹介し、その背景にスポーツ情報の多角化と取材体制の省力化があると述べた。そして、スポーツそのものがメディアになっている様相を指摘した。そうした変化においてスポーツ報道が伝えるべきものとは何か。AIにはできないことを念頭に、滝口氏は、それを関係性に見出す。アスリート同士や地域、自然、過去などとの関係を描く中から人間らしさやスポーツの文化的価値を浮かび上がらせることになる」と述べた。

シンポジストらの発表を受けて、指定討論者の來田享子氏（中京大学）は、シンポジスト間の関連性を整理し、課題や議論の可能性を浮かび上がらせた。それは、

- 1) スポーツに関わる「モノの保存」をめぐる諸課題（史資料の収集・保存管理にとどまっていた可能性、スポーツ史資料の再定義）
- 2) 情報に対して時・場・人の多様性の関与が映し出す意味・解釈・価値づけ
- 3) 情報のアーカイブやその方法・形態に対する自然科学系や技術の貢献の可能性（映像処理等）などである。

2年目のシンポジウムに向けてこれらの事柄を念頭に企画内容を検討したいと考えている。

学校保健体育研究部会 課題 A 研究発表

本部会では、「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」という上位の課題の解決にむけて、①大学教育と大学体育、②指導内容、③授業デザイン、④評価と効果検証、⑤制度設計と運営の5つのテーマに関して、計10件の口頭発表が展開された。会場11では特に①③④にフォーカスした報告があり、①については「身体的リテラシー」の獲得という観点から、大学の体育授業において運動技術を学ぶための方法を提示すること、学生自身がその知識をもとに自らの身体運動を実践することの重要性が指摘された。③については、コロナ禍の大学体育におけるダンス授業のデザインについて、オンライン形式及び対面実施との併用を通した「主体的な学び」のための工夫点について報告された。④については、やはりコロナ禍で中止や方法の変更・調整が迫られた大学体育の授業について、目標到達度、身体不活動時間とライフスキル（目標設定・考える力・謙虚な心・感謝する心）等との関連から客観的評価と効果が検証され、特に寺岡ら（慶応義塾大学体育研究所）によれば、運動部に所属していない大学一年生にとって、対面形式での体育実技の履修がライフスキル獲得のための重要な機会となっていることが指摘された。オンライン参加者は216名（同時最大約80名）、質疑では学生からのフィードバックを受けた教員側の対応や、オンラインだからこそのメリットに関する意見交換があった。

会場12では②③④にフォーカスした報告があり、参加者は175名（同時最大約60名～70名）であった。②については、オンラインによる体育実技の実践例（ヨガ）が紹介され、オンラインでの体育実技授業の改善方法が提示された。③については、剣道形の体育授業においてアクティブラーニングを取り入れた実践例が紹介され、アクティブラーニングによるより深い学びに対する有効性が示された。④については、時勢を反映して、体育実技の遠隔授業／オンライン授業の学修成果をテーマにした2題の発表がなされた。特に西田の発表では、遠隔授業にとどまらず、将来的な体育実技授業のDX（デジタルトランスフォーメーション）化にまで踏み込んだ議論がなされ、対面授業を行うことによる重要な学修成果を示すことが必要であると指摘された。

次回に向けた課題としては、まず運営面での課題として、領域横断的に自由に議論するための空間づくり（座長によるアナウンスメントの工夫）の必要性が挙げられる。また、時間の都合上、回答できない質問があったが、対面での発表であればフロアにて継続した議論が可能である。しかし、今回はオンラインでの発表であったため、そのような質問への応答ができなかったことから、何らかの形で対応できなかった質問・意見へのリアクションができると良いと感じた。最後に、研究テーマに関する課題としては、授業デザインと評価・効果検証に関する実践的研究と並行した理論的研究の充実が挙げられる。

学校保健体育研究部会 課題 A シンポジウム

シンポジウムのテーマ	大学体育の社会的使命とその実現可能性を考える —歴史的変遷からみる大学体育の現在地—
------------	---

本シンポジウムでは、これまでの大学教育の制度や大学体育の実践によって積み重ねられてきた知を歴史的変遷から読み直し、現代社会に求められる大学体育のあり方について探究した。3名の演者からの以下の報告がなされ、討議が進められた。

1つ目は、木内敦詞氏（筑波大学）による大学体育授業の制度や仕組みの変遷についての報告である。1991年の大学設置基準大綱化を起点とした高等教育改革の中、多くの大学で体育は選択科目への移行を余儀なくされた。しかしこの30年の中で、授業改善を研究にする **Scholarship of Teaching and Learning (SoTL: 教授と学修の学識)** の土壌が徐々に形成され、大学体育教育の実践知が蓄積されている。授業の有効性検証が中心であった従来の研究から、今日では学生の成長を導く「大学体育授業の仮説モデル」が提唱されている。大学体育の最終的な「目的」は人間的な自己成長であり、技能獲得や体力向上などはそこへ至る過程「目標」であることを確認した。

2つ目は、金谷麻理子氏（筑波大学）による大学体育授業の実践内容及び大学体育の教員養成の変遷についての報告である。体育の中核的な学修活動の一つであるスポーツの運動学習に着目した場合、自身の授業では一貫してスポーツ技能の向上を目指しつつ、その目的は徐々に変化し「人間性の向上」に至った。またその背景には、組織の研究プロジェクトへの参加や、自身の研究において大学体育の教育的価値を意識的な運動学習の体験による「身体的なコミュニケーション能力の向上」とまとめたことが影響した。大学体育教員の養成では、授業担当者の当事者意識、大学体育教員としての自覚や使命感を醸成することによって一定の資質を身につけられる可能性がある。

3つ目は、高村秀史氏（日本福祉大学）による大学体育授業の運営及びそれを通じた教員の組織作りの変遷についての報告である。所属する大学では大学設置基準の大綱化以前から大学で学ぶに値する体育の在り方について検討し、必修としての体育の学内理解を求めるために改革を進めてきた。その結果、大学体育の成果の到達点として「20歳の学力」を設定して授業を運営し、現在では初年次教育に資する内容を提供している。一方で、多くの大学で体育授業を非常勤講師が担当している現状がある。質の高い学びを学生に提供するために、専任・非常勤を問わず、体育授業の理念の理解や授業実践や問題点の共有、解決方法等をお互いに学び合い、研鑽を重ねている。

3名の報告後、5つの観点から討議が行われた。1つ目は **SoTL** 等を用いた大学体育の知見の集積方法及びその意義である。2つ目は教材の選定と担当教員の専門性との関係である。3つ目は大学教育の目的や授業実践と授業者の研究者としての態度との関係である。4つ目は共通した大学体育の社会的使命の設定についての是非である。5つ目は高校までの体育・保健体育と生涯スポーツとの繋がりを作る大学体育の意義である。

学校保健体育研究部会 課題 B 研究発表

口頭発表①では、奥村拓朗氏らによる「ゴール型のボールを持たないときの動き」を対象としたルーブリック開発についての報告、森田啓氏らによる大学生が小中高等学校時代の保健体育授業を振り返って評価し、それについて分析考察した調査報告、中山正剛氏による児童と教員を対象とした水泳に関する意識についての調査研究、杉山りん氏による中学校教員を対象としたダンス授業に対する意識調査の結果が報告された。発表⑤、研究の手続きや結果及び考察について、研究結果と実践に対する現場のとらえ方等について質疑応答が行われた。(参加者数 156 名)

口頭発表②の 1 件目は、齋藤まゆみ氏らにより、障害者スポーツ関連授業の効果尺度の作成と妥当性に関する研究発表が行われた。質疑応答は、授業効果に影響を及ぼす教師の力量の形成、実践した種目の選出根拠、結果の分類根拠の 3 件であった。2 件目は横尾智治氏らにより、高等学校における授業の楽しさと主体的行動の因果構造のに関する研究発表が行われた。質疑応答は、楽しさの定義、身体活動に偏った質問項目に関する見解等の 3 件であった。3 件目は奥平龍之介氏により、体育授業における雰囲気と感情の関係性を現象学的に考察した研究発表が行われた。質疑応答は、雰囲気が醸成する前提の要件、求められる教師の態度、悪い雰囲気の定義の 3 件であった。4 件目は木原誠一郎氏らにより、体育教師の授業の力量形成とその変容過程の開示を目的とした研究発表が行われた。質疑応答は、授業スタイルを変容させるに至った契機、研究成果の般化に関する 2 件であった。(参加者数 160 名)

口頭発表③の 1 件目は、加藤凌氏による「ジェンダー平等の実現を目指す体育授業のあり方に関する一考察」について研究発表が行われた。質疑応答は、コーフボールの事例検討をもとに他のスポーツに般化しうる可能性について、このルールによる性バイアス強化についてなど複数の議論が展開された。2 件目は、本田千晶氏らによる「発達障害児にとっての ICT 機器活用の有効性と可能性について」の研究発表が行われた。質疑応答では、本研究成果からの体育場面での問題点や課題について、また ICT の具体的なハードやソフトについての内容についての議論が交わされた。そして 3 件目は原祐一氏による「豊かなスポーツライフを実現するコンピテンシー」についてての研究発表であった。データ収集方法についての確認と、社会との関連についての議論が交わされた。3 件ともに有意義な発表と質疑応答が行われたことを報告する。(参加者数 81 名)

学校保健体育研究部会 課題 B シンポジウム

シンポジウムのテーマ	より良質な保健体育授業の具体像を考える —コロナ禍の保健体育から、あらためてその意義と価値を整理する—
------------	--

長期的な COVID-19 拡大の影響は、子どもにとっての運動の意味や友達の存在の重要性、運動生活と衛生、運動と健康に関わること等、多くの課題を浮き彫りにした。本シンポジウムでは、コロナ禍における国からの発信や体育、保健、特別支援学校における実践を通して、今後、求められるより良質な体育・保健体育の方向性について議論することにした。当日は、336名の参加者を得てシンポジウムが展開された。

シンポジストの関伸夫先生からは、国からの COVID-19 への対応とともに、子どもの運動機会や安全・安心な学校生活をどう保障するか、子どもたちの学びをどのように保障していくかについて、その背景も含めて具体的な情報発信の内容が報告された。

永末大輔先生からは、誰のための、何のための体育授業なのかという大きな問いかけの下で、コロナ禍で取り組んだ「プログラミング教育の体育実践への導入」「スマートモビリティの体育授業への導入」といった実践報告が行われた。

丸山洋生先生からは、「感染症に対する当事者意識の欠如」「意志決定と行動選択の危うさ」「経験したことのない事態に対処する力の必要性」という課題意識の下で行われた感染症に関する保健学習の実践の具体が、その授業成果とともに報告された。

鈴木敏成先生からは、コロナ禍における子どもの実態についての報告、その状況を踏まえてオンラインで実施可能な体づくり運動の授業実践の様子が具体的な指導の工夫とともに報告された。

ディスカッションでは、子どもにとっての体育・保健体育の在り方を考える上で重要となる視点に関する質疑応答や、教師の教えやすさから子どもの学びやすさへの指導観の転換の必要性、コンピテンシー育成のためのコンテンツの明確化とそのための授業デザインを研究していくことの重要性等など、体育・保健体育の方向性についての意見が示された。また、具体的に家庭で実施可能なコンテンツ開発のポイントや ICT 機器の活用についてのアイディア提示や、保健学習を通して学習した知識をいかにして「生きた知識」として行動変容につなげていけばよいか、子どもの実態や環境条件を考慮した上で、その子が見通しをもって学習に取り組める環境の保障の重要性等についての質疑も行われた。

コロナ禍を通して、あらためて子どもにとっての運動や健康な生活の重要性が確認されたこと、子どもたちに真に身に付けてほしいことがらやそのための指導の在り方等について等、今後につながる非常に有意義な議論を展開することができた。

学校保健体育研究部会 課題 C 研究発表

口頭発表①では、教育現場での取組に関する研究発表が 5 つ行われ、参加者 85 名程度であった。演題の被験者は大学を対象としており、検討されたプログラムの対象者を変えた場合の差異がみられるのか、今後につながる研究課題であった。プログラムに座長の所属やどの専門領域に所属しているのか記載することで、質問し易い雰囲気作りができるだろう。これまでの以上に演者の抄録の記載や発表の工夫が必要であり、フロアは事前の抄録の確認が必須である。発表時間は 15 分あると方法論など丁寧に説明できるためフロアが理解しやすいだろう。

口頭発表②では、小中学校におけるダンス授業に関する研究が 3 演題と小学校体育のボール運動に関する 1 演題、中学校におけるバスケットボールの授業に関する 1 演題の計 5 つの発表が行われた。全ての演題に関して、チャットによる質疑や口頭による質疑が発表者と参加者との間で比較的活発に行われた。

口頭発表③では、6 題の発表が行われた。4 題が小中学校の現場の教員による発表、2 題が大学教員による発表であった。10 分間の発表時間であったため、内容が全体的に概要の説明に留まらざるを得ず、質疑応答が座長と発表者とのやり取りに留まることが多かった。5 分の質疑時間も短く、発表が終了してから質問をコメントに記入しても時間に間に合わなかったり、十分な回答が得られないまま時間が終了するという事態もあった。オンライン発表は、自由に意見が出される雰囲気であった半面、時間の設定や質疑応答のシステムにミスマッチが生じてしまったことから、十分に議論が深められなかったと考えられる。

口頭発表④では、5 題の発表が行われた。楽しい時間を過ごさせて頂いたことについて、5 名の先生とセッション配置をご采配頂いた先生に感謝したい。次に各研究をほとんど横断・融合できずに終了してしまったことを反省したい。個人的にはであるが、「能力の個人差がどう生まれるのか?」、「その過程がスポーツや遊びの経験でどこまで説明できるのか?」、今後はこういった可能性を検討しつつ「学校保健体育の進展に対する体育・スポーツ・健康科学の貢献」を考え、結果として分野が融合していけたらと考えた。

口頭発表⑤では、6 題の報告が行われた。体育と保健の学習指導並びにカリキュラムを巡る問題に関して多様な関心と多様な方法で研究がなされ、多面的な授業ないし学習指導に関わる問題群が一連の問題意識のつながりの中に展開された。特に、対象となる教育事象にアプローチする際の学際性が、従来の領域別の報告より色濃く出ていた。100 名前後の参加者の中からも、多様な視点からなる質問・意見と報告者からの応答がなされ、テーマ部会の持つ可能性を柔らかに感じられた。他方では、研究としての深まりや新規性や合理性の担保における、議論の拠り所がやや弱く感じられる場面もあり、今後のより良いあり方が期待される。

学校保健体育研究部会 課題 C シンポジウム

シンポジウムのテーマ	科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導 ー学習指導要領の内容と保健体育授業の実状との乖離ー
------------	---

本シンポジウムは、コーディネーターを末永祐介（東京女子体育大学）と柏木悠（専修大学）が務めた。フロアには約 292 名の方が参加され、その多くは小中の学校現場に関わる教育者が多い傾向であった。シンポジウムの趣旨説明を柏木から行った後に、体育科教育が専門の末永へ進行が委ねられ進められた。シンポジストには、白旗和也氏（日本体育大学）、佐藤義人氏（東京学芸大学）と研究部会より木島章文氏（山梨大学教育学部）によって議論が繰り広げられた。白旗氏からは、学習指導要領を作成する文部科学省教科調査官を経験した立場より発表して頂き、学習指導要領の役割や位置づけについて根本的な部分を丁寧に説明して頂いた。特にその中でも体育指導を言語化することの難しさを述べられ、省内で教科書を重視する傾向の中で、他教科と体育特有の教育形態の違いに整合性が求められ、現場と行政との困難さが指摘された。また、現場教員が学習指導要領の内容を深く理解していないことも乖離が生じる要因として考えられ、周知の方法の工夫が急務であると述べられた。二人目の佐藤氏からは、現場教員を経験した立場から持久走・長距離走と運動遊びの実践研究を紹介し、現在の学習指導要領の問題点が指摘された。佐藤氏は、学習指導要領を絶対視する様な教育現場の風潮によって、むしろ体育嫌い、運動嫌いの子どもたちを体育の授業が生んでいるかと問題を投げかけられた。更に、学習指導要領を伝達する日本の教育機関のシステムにおいて、その内容の解釈が現場教員に届くまでに大きく歪められている問題点を指摘された。三人目の木島氏からは、体育心理の視野から保健体育の役割について、子どもの認知発達観の観点の起点を例に挙げ発表された。その中で、特にヒトは他者と連携・協調しながら物理的に変動する動作環境を自由に動ける資質を持っており、身体的知性をどのように保健体育が教育していくのか、そのアイディアを発表された。本シンポジウムは、シンポジスト一人の発表時間を 20 分に設定し、その後フロアとの論議に入った。フロアからの質問は予めテキストで質問を集約し、議論のテーマや内容はコーディネーターの末永が調整を行ったため、論議がスムーズに進行された。このテキストで意見を集約するシステムは、対面での開催時にも利用できる、シンポジウムの流れ、まとめに便利であると思われる。しかし、多くの様々な意見が挙げられたが、設定時間内で全てを拾い上げることはできず、また、コーディネーターの意向が強く反映されてしまわないか、一方でそのような懸念がある。

本研究部会と別のセッションの議論の傾向を交えて今後のオンライン開催での運営方法を検討する必要がある。また、録画映像の修正が入るが、オンラインは対面より記録として残り易いため、演者も発表内容を慎重にならざる負えない部分があり、議論の盛り上がりには少し欠けるのではないかと感じた。

① 特筆すべき点

領域横断型での発表であったことのメリットを感じた点は、現場におけるコーチやスタッフ、専門職の多様な視点、学術領域の多様な視点を共有できたことである。例えば、選手の心理的要因や心理サポートを扱う研究発表に対して、「コーチの立場からどのように見ているか、何ができるか」

「心理の専門家としてどのように見ているか、何ができるか」が共有されたり、ジュニア選手の心理面を扱う研究発表に対して、心理領域での検討にとどまらず、保護者などジュニア選手を取り巻く社会的環境や発育発達の視点が共有された。

他領域、さまざまなスタンスの違いによって、それぞれの役割の違いはあれども、選手やスポーツ界がより良くなる方向へ目配せされていることがすべての発表の根幹にあり、将来的な協働の可能性が感じられるセッションとなった。

② 課題

座長の役割が多すぎて、非常に大変だった。タイムキーパーのベルが聞こえなかったり、通信トラブルにより発表者が途中で退室してしまうなどの問題が起きたが、それらにすべて座長が対応せねばならなかった。また、質疑が出ない場合には、座長が質疑を投げかけつつ、それと並行してチャットにも目配りをしたり、タイムキーパーが横にいるわけではないため自分自身でも時計を気かけねばならなかった。これに加えて、人権および倫理的問題がないかも確認するという作業もあった。オンライン開催における運営上の問題は、今後の検討課題であると感じた。

なお、タイムキーパーは、「学会タイマー」等を使ってはどうか（たとえば以下）。

<http://maruta.github.io/timekeeper/#t1=15:00&t2=20:00&t3=25:00&m=Click%20to%20edit%20this%20message>.

また、事務局を含めて混乱していたので、来年度は発表時間（15分と20分がある）を統一してはどうか。A

競技スポーツ研究部会 課題 A シンポジウム

シンポジウムのテーマ	トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点
------------	----------------------------

競技スポーツ研究部会【課題 A】では、須甲理生 氏（日本女子体育大学）、荒井弘和 氏（法政大学）をコーディネーターとし、まず、コーディネーターから本シンポジウムの趣旨説明が行われた後に、以下の 4 つの視点から各 15 分の発表があった。

まず、山田永子 氏（筑波大学）からは、体育・スポーツ系大学の視点から、「研究・実践・指導者養成が三位一体となった高度競技力強化拠点」たるという筑波大学体育系のミッションに基づく、多彩な活動を紹介いただいた。

次に、田原陽介 氏（青山学院大学）からは、体育・スポーツ系の学部を持たない一般大学の視点から、経営資源の不足、国際大会への対応（学業との両立）等の課題を挙げていただき、他方で、学内から応援される体育会に向けての取り組み等も紹介いただいた。

次に、川本竜史 氏（大東文化大学）からは、女子学生のトップアスリート養成の視点から、女子プロサッカーリーグ（WE リーグ）の開幕で注目を集める大学女子サッカーを事例に挙げながら、普及、強化、人材育成という点について、男子サッカーとの比較も通しながら紹介いただいた。

最後に、谷釜尋徳 氏（東洋大学）からは、大学がトップアスリート養成というテーマとどのように向き合っていけばよいのか、大学スポーツ全般を扱う UNIVAS の視点から報告いただくとともに、UNIVAS が示す内容をもとに、各大学がトップアスリートも含めた運動部員に対して展開しうる支援などについて紹介いただいた。

続いて、参加者とディスカッションが約 50 分間行われた。ディスカッションでは、多くの参加者から質問や意見が出された。例えば、「大学のリーグに出つつ、トップリーグにも出られる仕組み作れたらよいが、サッカーで既にそのような取り組みが行われている」、「大学より前のカテゴリーで、デュアルキャリアを教えていく必要があるのではないか」等といった意見が出された。

本シンポジウムでは、シンポジスト 4 名それぞれが、異なった視点からご発表された中に、共通する課題や支援方法が存在することを示せたことは、領域横断型の意義であるといえる。各シンポジストのご発表・ご発言の内容から、参加者それぞれが自分の大学や状況に合わせて、持ち帰ることのできる視点が大きいにあったのではないかと感じる。総じて、200 名弱の参加者が集まり、質疑応答も途切れることなく活発な議論がなされたことから、大盛況のうちに幕を閉じることができたといえる。

他方で、運営面について、「発表中に、チャットに質問を書き込んでも良い」と示した方が良かったこと、「誰に対する質問」が明記してもらえるとコーディネーターは整理しやすかったこと、質疑応答に関わって 2 つの機能があると混乱するので、例えば「手を挙げる」機能は使わずに、「Q&A 機能」で発言したい旨を表明してもらった後、口頭で話してもらえば良かったのではないかと感じる等々の課題が残ったといえる。

① 特筆すべき点

口頭発表①では、各発表に共通して、障がい者アスリートのパフォーマンス向上やコーチングに寄与する知見を得ることが目的とされていた。討議では、障がいをもつスポーツ選手に指導者が何を提供して、どのように関わっていくかについての議論が行われた。口頭発表②では、コーチング哲学やプレーヤーへのアプローチ、いわゆる「対他者の知識」、「対自己の知識」に関する発表がなされた。

演題数の多寡については、初めての試みであったことから過去との比較はできないが、他の部会や課題と比較して、多くもなく、少なくもなくといったところである。タイムキーパーの担当が前日の発表における課題から、ベルのみでなく「チャット」でも残り時間の案内をしたことは大変役立った。チャットによる質問を受け付け、発表者がどの質問に答えるかを選択し、回答する方法を予定していたが、発表者が質問を選択することに時間を奪われてしまうため、チャットに入力された順に回答する方法に変更した。おそらく、発表者が質問を選択するよりも、チャットに入力された順に回答するほうが時間的効率は良いだろう。

チャット機能はとても有効であり、質問者の質問の途中で終了時間となった場合にも、ひとまずそこで発表を閉じ、その後、チャットでの質疑応答に切り替えることができた。この点は対面よりも良かった点である。座長としては、質問者や発表者の発言を遮ることに多少なりとも抵抗を感じるものであるが、「この後はチャットで引き続き質疑応答を継続してください」と案内できることで、心理的負担が軽減された。

通常の対面形式の学会では、発表終了後の休憩時間に発表者とフロアの参加者とでディスカッションをすることができるが、今回はできなかった。ただし、最後の発表者は大学院生であり、参加者も熱心であったことから、一度セッションを終了したことにし、発表者に確認したうえで、休憩時間ということにし、Zoomを継続して質問を受け付けた。しかし、他の発表者はこの機会を得ることができなかった。

② 課題

今後の課題としては、今後もオンラインでの開催が考えられる場合、最後の発表者の発表終了後、発表者ごとにブレイクアウトルームを設けて休憩時間としてディスカッションの場を設けることを検討する必要がある。休憩時間なので、座長を置く必要もなく、発表者も参加者も必要がなければ、Zoomから退出することが可能である。

さらに、口頭発表①での研究発表内容はアダプテッド・スポーツ科学専門領域とも関連しており、発表者は専門領域別での研究発表も検討されていたようであった。したがって、次回に向けての課題の一つとして、テーマ別および専門領域別研究発表の住み分けについての検討が挙げられる。

競技スポーツ研究部会 課題 B シンポジウム

シンポジウムのテーマ	パラ競技スポーツにおけるコーチ養成の現状とこれから
------------	---------------------------

本上位課題の論点を①パスウェイ、②指導者養成システム、③指導論の三つに設定した。本シンポジウムでは「パラ競技スポーツ」に焦点を当て、現状の課題と今後の展望について知見を得ることを目的とした。

三つの論点についてそれぞれ中澤吉裕氏（車いすテニス日本代表監督）、金子元彦氏（東洋大学）、伊藤雅充氏（日本体育大学）からの情報提供を得た。中澤氏が車いすテニス選手の指導を始める契機は偶然であり、いつかはトップアスリートの指導をしたいという希望を持ちながら指導者を続けていた際に、車いす選手側から指導の依頼があり、その熱意に打たれて指導を開始した。2012年のロンドン大会から代表コーチになり、そして監督へとキャリアを進めている。講演からは、トップアスリートのコーチであり続けるためには自身が選手とともに成長できることや、「まつ、みる、きく、引き出す」ことが重要であるとの言葉にあるように、常に誠実に選手と向き合う姿勢が重要であることが伺えた。過去には「迷う、継続する、決断する」という過程を何度も繰り返してきたことなど、経験が少ない指導者がキャリアを進める上での考え方についても示唆を得た。

金子氏からは本邦の障がい者スポーツ指導者（コーチ）養成制度の変遷について情報提供をいただいた。発足当初はリハビリテーションの一環であったスポーツ指導が公認指導者制度に移行され、現在の障がい者スポーツコーチ制度に発展している。現在の課題として養成制度の認知度の低さ、競技活動と資格取得の両立の困難さ、競技団体の指導者登録条件に本資格が組み込まれていないことなどが挙げられた。これらが影響して指導者登録数が極めて少ないという課題を改善する必要があるとの問題提起もなされた。

伊藤氏からは欧州、アジア、アフリカにおけるコーチ養成カリキュラムの現状について情報提供をいただいた。世界的にはカリキュラムに国際的な一貫性がないなどの課題が挙げられている一方で、指導者が共通してもつべき（競技）スポーツそのもの・障がい・クラス分け、大会出場に関する知識を得つつ、その他の事項については各地域の文化や社会制度の特性を踏まえた制度設計が必要であることも示された。さらにコーチ養成においてはリカレント教育の充実、指導者と選手の学びあい、アスリートの発達段階に応じたニーズに適した指導方法など、長期的視野にたった教育が必要であるとの示唆も得た。

総合討論ではパラ競技スポーツのコーチ養成の在り方として、すべてのコーチ養成カリキュラムに障がい者に関する知識習得も含めるという統合的な養成システムや、コアカリキュラムに加えてアラカルト的に学びたい知識を選択できる設えなどのカリキュラムの在り方が提案された。また情報公開が不足している現状を踏まえ、現在の競技者や指導者に広く障がい者スポーツコーチ養成カリキュラムの案内を行うことの必要性も提案された。

競技スポーツ研究部会 課題 C 研究発表

<口頭発表①>

- ・画面共有の切り替え等、進行は滞りなく行われた。討議の一部で発表者の音声途切れることがあったが（PCマイクの不調）、すぐに同室の他のPCで対応するなど、発表者はみなさんオンライン発表に慣れている様子だった。
- ・討議開始直後はタイプに必要な空白時間が生じたため、まず座長から口頭で1つ質問を行った。
- ・質問は各演題1～4つ程度チャットで寄せられ、質問内容は座長から発表者へ口頭で伝えたが、長文の質問は発表者もチャットを直接確認して回答していた。
- ・チャットの文章から質問の意図を十分にくみ取れないものに関しては、質問者にミュート解除の上、口頭で補足して頂くこともあった。
- ・大会スタッフの対応も適切で、トラブルなく終えることができたと思う。

<口頭発表②>

発表全体の印象としては聴講者からの活発な質問・意見は少なく、盛り上がりには欠けた印象であった。その理由としては、発表内容としても「ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか」というテーマを踏まえられた視点や問題提起が足りず、ディスカッションに至らなかった印象がある。

<口頭発表③>

専門領域にあてはめれば「体育方法」と「バイオメカニクス」に該当すると考えられ、これらが1つのセッションで発表されることは、テーマ別研究発表の醍醐味であったように思う。

一方、参加者からは、対象としている各競技の競技パフォーマンスレベルと研究結果との関係について質問が複数あったが、「あまりない」「未検討である」といった回答がほとんどであった。したがって、ハイパフォーマンススポーツの研究は単にトップレベルの選手を対象とすれば良いというものではなく、研究対象としている「部分」がパフォーマンスの全体像の中でどのような位置づけなのか、どのように全体に影響するのかをより深く検討していくことが課題として挙げられるセッションであったように思う。

<口頭発表④>

- ・発表者のPCのトラブルによって発表順を繰り上げたため、設定時間より早く開始することとなった。3題目の発表者のPCが画面共有後にフリーズしてしまい、テクニカルサポートの方のアドバイスにより発表者には一度退出いただいた。しばらく時間がかかる様子だったため、発表順を繰り上げて進めた。
- ・上記のトラブルによってセッション全体の制限時間を超えてしまった。また、それに伴い順番を最後に移動した発表者（トラブルの当事者）の質疑応答の時間を確保できなかった。セッション全体の延長可能時間を予め把握しておくべきだった。
- ・発表時間は基本的に守られていた。
- ・方法、考察、今後の応用に関する質問が各発表3～4つ程度上がった（チャット機能、アイコンによる挙手）。

<口頭発表⑤>

- ・一部の演題で一連の発表があったので、順序を考慮してプログラムを作成した。申し込みの段階で一連の発表の場合は、希望する発表の順序を明記してもらった方が良いかもしれない。
- ・通信障害か、途中でパワーポイントの画面がフリーズする場面があった。想定されうることだったので、座長からはフロアーに対して寛容を求めつつ、再起動まで、話をつないだ。ライブ発信であ

れば、このような事態は当然想定されうることなので、発表時間は守ることとしつつも、セッションの構成はすこしゆったりとんでおくことでリカバリーの時間が取れると思った。

- ・質問はチャットに書いていただく方式と、質疑応答時に挙手してもらう方法とを併用した。**First come、first served** を基本として、発表中にはチャットへの記入を促し、そちらを先に取り上げるようにしたことで、議論が活発になったように思う。
- ・セッション終了後、対面であれば休憩室などでお話をする場があるが、遠隔の場合、それができにくいのが難点であると思っていた。しかし実際は、関係者が自分たちで遠隔会議室を開いて議論していたようだ。今後は、もし可能なら、発表後その部屋を開放して「空き教室」にすれば、希望者がそこに残って議論することも可能かもしれない。

<口頭発表⑥>

いずれも GPS を用いてゲーム、トレーニングを評価する研究であり、質疑応答の場面ではセッション内の他の先生の研究にも言及されるなど、テーマ別の利点が活かされていた。一方、参加者は、GPS デバイスという「テーマ」に集まったというよりは、各「競技」に集まった印象であった。質問は各 1～2 で、GPS を用いるにあたっての問題に言及する貴重な質問（高強度運動のスピード立ち上げ時点は低強度運動に分類されてしまう）もあったが、時間的に十分な議論ができなかったのは残念だった。

今後も、今回のように様々な競技の専門家が 1 つのセッションに集まって議論できるプログラムを組んでいただけると、競技別ではない学会であることの意味があると感じた。

競技スポーツ研究部会 課題 C シンポジウム

シンポジウムのテーマ	ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）における フィジカルトレーニングの新たな潮流
------------	---

先日、オリンピック・パラリンピック東京大会が閉幕したが、主要国際大会での活躍を目指す、いわゆるハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）は常に進化を遂げている。このハイパフォーマンススポーツにおけるフィジカルトレーニングについて、「レジスタンストレーニング」「持久性トレーニング」「科学サポート」「身体負荷モニタリング」の4つの側面からスポットライトを当て、最新エビデンスやトレーニング方法など、そのトレンドに迫ることを本シンポジウムの目的とした。

当日は、最大 200 名の視聴者が参加し、盛況なセッションとなった。最初に、越田専太郎先生（了徳寺大学）に、「レジスタンストレーニング研究における近年の潮流」というテーマでお話しいただいた。負荷設定における Autoregulation に関しての最新知見をご提供いただいた。続いて、田畑泉先生（立命館大学）に、「rink side から生まれたタバタトレーニング」と題して、タバタトレーニングの着想に至る経緯や実証の過程などをお話しいただいた。3 人目に、「トレーニングを個別化するためのアセスメント」として山下大地先生（国立スポーツ科学センター）がハイパフォーマンスジムでの取り組みをご講演された。最後に、「ハイパフォーマンスアスリートの身体負荷モニタリング」というテーマで、小山孟志先生（東海大学）にバスケットボールを例に身体衝撃負荷のモニタリングについてお話しいただいた。その後、ディスカッションおよび質疑応答に移り、予定より約 15 分伸びたが、大変充実したセッションとなった。

今回はオンライン学会ということで Zoom を用いたシンポジウムであったが、トラブルもなく無事に進行することができた。ただ、質疑応答の際に、挙手機能を使って募ったがなかなか手が挙がらず、オンライン上で発言することのハードルが高いような感じがした。また、「テキスト機能」ではなく「挙手機能」で質問するようにと冒頭でアナウンスしたにも関わらず、テキスト機能で質問される方が数名いた。この辺りの指示を、遅れて参加してきた人にも行き届かせるような工夫が必要かと思われる。

生涯スポーツ研究部会 課題 A 研究発表

会場 16 の発表は 3 演題であった。第 1 演題「台湾における野球振興計画の事業化の現状と課題」（童安佚氏）は、台湾における野球の高度化により、八百長事件、バーンアウト問題などが社会問題となったことを受け、学校の部活動などの生涯スポーツとしての野球を発展させる「官、学、民」の取り組みが紹介され、共生社会の実現に寄与することを示した。チャットで質問があり、台湾のスポーツ振興政策の行政の仕組みについて説明が加えられた。第 2 演題「総合型地域スポーツクラブにおけるミッションの形成過程」（柴田紘希氏）は、行政主導型のクラブの成長の停滞に着目し、行政主導型クラブの理事長等にインタビュー・関連資料の収集を行った。結果、ミッションは行政担当者により形式的に定められ、クラブづくりの意味の共有不足が形骸化の理由に挙げられた。総合型クラブの不活化の課題に対して議論された。第 3 演題「総合型地域スポーツクラブにおける市民の自主運営構築プロセス」（千葉洋平氏）は、クラブの運営に関わる市民へインタビュー調査を行い、市民の自主運営のためのマネジメントについて検討した。結果、市民の自主的な運営は「パートナーとの協働」を契機としており、そこへの働き掛けを要することが示唆された。チャットを通していくつか質問があり、パートナーの育成について議論された。

会場 17 の発表は、障害者スポーツに関する 4 演題であった。第 1 演題「オーストラリアの障害者を包摂した水泳チームに対するエスノグラフィー」（瀬川海氏）は PC トラブルで開始が 5 分程度遅れたが、オーストラリアの大学の水泳部で実践されている、健常・障害者アスリートがともに練習する機会などについて事例が紹介された。討議はチャット上のみに変更し、日本国内の取り組み等について議論された。第 2 演題「障害者スポーツ・レクリエーション体験会における障害者の継続的なスポーツ参加につながる主催事業体の行動について」（飯田望見氏）では、生態学的システム理論に基づく環境構造の明確化、継続に影響を及ぼす行動が示唆され、予算や障害者の位置づけについて討議がなされた。第 3 演題「パラスポーツ観戦意欲向上のための要因：パラ陸上における競技者意識と観戦者意識の関係性に着目して」（井上幹智氏）では、パラスポーツ観戦意欲に関連する要因として、観戦の無料化やスポーツの習慣化、観戦者が期待すること等が示唆され、考察へのアドバイス等が討議された。第 4 演題「わが国の障害者スポーツ推進のあり方に関する試論」（藤田紀昭氏）では、今後の障害者スポーツ推進について、スポーツ協会の連携、地域の活動、障害者と指導者への働きかけに関する現状と今後必要な取り組みが示唆され、エビデンスの重要性、教員の知識・スキル養成、障害者へのアプローチ等について討議された。

いずれの発表も本テーマに関わる貴重な示唆となる研究発表であった。

生涯スポーツ研究部会 課題 A シンポジウム

シンポジウムのテーマ	共生社会と生涯スポーツは共存できるのか —スポーツのパラダイムチェンジが共存への鍵—
------------	---

本シンポジウムでは「共生社会」について根本的な話し合いを持ち、生涯スポーツが共生社会で果たす役割について議論した。

まず、菊幸一氏から「身体と共生社会—スポーツのパラダイムチェンジに向けて—」について発表いただき、次に実践事例として大浜三平氏「共生社会実現を目指す、総合型地域スポーツクラブ事例報告」と、藤後悦子氏「子どもも親も安心できるスポーツ環境の構築へ向けて」の2つ実践報告をいただいた。

登壇者間の質疑応答では、「新型コロナウイルス感染症の影響」について確認があった。コロナ禍、さまざまな制限がかかる昨今、スポーツは、自己目的的な身体の喜びや楽しさを享受することに向けるべきという見解を得た。そして、不自由だからこそ自由にスポーツを考え、“スポーツは不要不急だ”というベクトルに移行すべきではないとの理解を深めた。このことはコロナ禍の問題というより、日常生活におけるスポーツそのものが問われていると確認した。

本シンポジウムにおいて共生社会とは、生涯にわたって幸福な身体を追求することによって、結果として健康を得ることにつながり、身体を解放する「ラストフロンティア」であるとの確認を得た。この共生社会は、多様な人々が今できる力で誰しもが楽しさを追求できる社会であり、あるがままの自分を肯定できる社会であるという一定の結論を得た。

しかし、総合型地域スポーツクラブでは、運営費用面からも、全てのニーズに応じることの困難さがありドイツなど諸外国と比べ、手軽にスポーツにアクセスしにくい現状が報告された。また、指導場面では罵倒や暴言といったハラスメント行為が皆無とならず、子どもたちが安心してスポーツ取り組むことが難しい現状にあることも確認された。さらには、勝利至上主義や技術中心主義といった誤った日本の近代スポーツ観に基づいた指導者の再生産が、安心して取り組むスポーツ環境を遠ざけていることも明らかになった。

テーマである「共生社会と生涯スポーツは共存できるのか」について、現実には「できていない・遅れている」という結論を得た。しかし、この結論を否定的に捉え、短絡的に解決していけばよいのではなく、むしろ生涯スポーツによって互いに時間をかけて交流し社交の場を形成していくことで、「共存できるはず」という実感を互いに持つに至った。

そのために必要なスポーツのパラダイムチェンジとは、例えば文武両道ではなく“文武一道”といった質的な違いを同様に扱うように、存在することを肯定する姿勢であると結論づけた。具体的には、健全者と障害者が共にスポーツを楽しむ姿や「プレイ」そのものを楽しむ子どもの姿といった、自発性や社交性を重視したスポーツの原点回帰の姿勢として共有することができた。

今後「共存できるはず」という実感が実現する（した）システムや組織を明確にし、また逆にその実現を阻害する要因について探ることが課題である

生涯スポーツ研究部会 課題 B 研究発表

生涯スポーツ研究部会では、課題 B「スポーツの産業化は生涯スポーツ・人・地域社会といかに関連するか」というテーマのもとで 3 題の口頭発表がなされた。

まず、「女性チャリティランナーと寄付先団体のコミュニケーションに関する研究」においては、女性チャリティランナーを対象とした寄付先団体とのコミュニケーションと寄付への態度を明らかにすることと、寄付への態度と継続した支援との関係を明らかにすることを目的として SIPS モデルを用いた調査・分析について発表がなされた。質疑応答において、SIPS モデルにおける共感の対象についての議論やチャリティマラソンの種別による SIPS モデルの適合度などについての議論が深められ、産業化が進展するスポーツイベントにおいて、その経済的効果にとどまらないスポーツイベントの価値を図るうえでも有益なチャリティランナーの参加とそれを促すであろうコミュニケーションに関する知見が深められた。

次に、「地域高齢者のためのスマートシューズによる健康・見守り支援クラウドシステムの検討 e-テキスタイルセンサーを用いた歩容評価の検討」においては、産官学連携のプロジェクトとして進められている e-テキスタイルセンサーと ICT・IoT 技術活用したスマートシューズの開発過程と、地域高齢者のための健康・見守り支援クラウドシステムの実用に向けてスマートシューズから得られた歩容データの評価の試みについて発表がなされた。質疑応答において、歩容データの有用性に関する議論や、身体活動の促進に加えて障害予防といった観点からの実用可能性について指摘がなされるなど、今後の評価変数やシステムの活用方法に関する知見が深められた。

次に「e スポーツのオフラインプレーが高める気分とオキシトシン分泌」においては、実際に空間を共有して行う e スポーツのオフラインプレーの生理・心理指標への影響についてオキシトシン分泌を中心に発表がなされた。結果、e スポーツのオフラインプレーが、勝敗によらずオキシトシン分泌を促進することが報告された。質疑応答では、e スポーツの種目や対象者の遺伝的特性などの影響についての指摘や、顔が見える形でオンラインプレーを行った際の結果の見通しに関する質問がなされ、e スポーツの生理・心理的な効果に関する今後の研究の進展に向けて活発な議論がなされた。

テーマ別研究発表全体としては、発表者の所属する専門領域以外の学会員から様々な質問や意見が寄せられた。その中でも、専門領域を越えた研究チームの提案や、各専門領域の特性を生かした研究対象や分析手法に対する提案が見られるなどテーマ別研究発表にふさわしい横断的な議論がなされたことは注目に値するだろう。

生涯スポーツ研究部会 課題 B シンポジウム

シンポジウムのテーマ	Well-Being の実現に向けて ー生涯スポーツのこれからと社会・産業、そして人ー
------------	--

シンポジウムは予定時刻に予定通り開始された。まずコーディネーターの林洋輔氏（大阪教育大学）より開会あいさつならびにシンポジスト紹介および本シンポジウムの趣旨説明が行われた。

シンポジスト登壇のうち、まず渡邊淳司氏（NTT コミュニケーション科学基礎研究所）より「Well-Being 研究と展望—その社会との接点としてのスポーツ—」と題する講演が行われた。本講演はシンポジウムの趣旨説明を一部継承する導入部から始まり、おもに総論的な観点から講演タイトル通りに Well-Being 研究の現状と展望、また Well-Being の捉え方について、渡邊氏自身の研究成果も踏まえて行われた。

続いては高橋義雄氏（筑波大学）より「Well-Being の実現とスポーツの産業化」と題する講演が行われた。本シンポジウムはスポーツの成長産業化・商品化と人びとの Well-Being がどのようにして両立するのかといった問いに対して議論を深めることが開催意図として含まれているが、高橋氏の講演はスポーツが成長産業として資本主義社会のなかでいかにその位置を占めて巨大産業として発展し、現状と未来に向かって模索を続けているかについて多角的に分析の果たされた講演が行われた。

続けて重松良祐氏（中京大学）より「健康・科学・産業 一産・官・学が生み出す健康の諸相と Well-Being」と題する講演が行われた。三重県の事例を中心とし、産官学の関係のもとで高齢者を対象とした健康増進を期す身体運動プログラム——「スクエアステップ」と呼ばれる運動プログラム——の成功事例が紹介され、Well-Being の具体的な一事例が明らかにされた。

上記の3名による講演が終了後、共同コーディネーターである松尾哲矢氏（立教大学）のもとで指定討論者である関根正美氏（日本体育大学）よりシンポジスト3名に対して Well-Being の議論における社会の「格差」問題をはじめ、討論が行われた。

フロアとの質疑応答に際し、上記コーディネーターである松尾氏からシンポジスト3名に対する質問が行われた。特に学校運動部活動に着眼した質問など、具体的な事例をも視野に据えた質問と応答が行われた。

フロアからは渡邊氏、高橋氏に対して質問が行われた。時間の関係から高橋氏への問いに対して回答が行われた後、総括的コメントとしてシンポジスト三名および指定討論者から本シンポジウムを振り返っての研究者としての気づきおよび今後に向けての展望が語られた。

閉会あいさつとしてコーディネーターの林氏より、Well-Being 研究が多面的なアプローチから行われている現状ならびに様々な知見の交わされるシンポジウムという場を通じて今後発展的に Well-Being をめぐる議論が継続することへの期待が述べられ、シンポジウムが閉会した。

補遺として、シンポジウム開催に際して予期された Zoom トラブルなどについては、サポートスタッフ各位の適切な対応により終始にわたって問題なくシンポジウムが行われた。

生涯スポーツ研究部会 課題 C 研究発表

会場 21 の発表は、約 50 名の参加者が来場した。4 名の演者の各発表は、ほぼ時間通りに進行された。チャットによる質疑応答は各演題に約 2 つずつ寄せられ、活発な議論が展開された。上位目標と掲げた「人生 100 年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか」に関連した考察や提案、質問がなされており、今回新しく取り組んだテーマ別発表の成果が出ていると感じた。一方、オンライン発表の問題点として、今回、質疑は原則チャットで行うとアナウンスしていたが、手を挙げる機能を使って質問された方が 1 名いた。特に指摘せずに許可して進めたが、問題なく進行できた。チャットの質問は、発表後に打ち込む時間が必要であるため、今後、オンラインで開催する機会があれば、手を挙げての質問を許可しても良いかもしれない。また、発表終了後、次演者の画面共有はスムーズに行われたが、発表を開始するまでに 30 秒～1 分程度の時間を要した。そのため、実際の発表時間はその分短くなっていた。オンラインの場合は、演者間の間を 1 分程度空けおくところちょうど良いと感じた。さらに、対面であれば全ての発表が終了した後に、質問者が発表者にフォローしに行くことができ、その時に交流が生まれることも学会の醍醐味だと感じるが、オンラインではそれが出来なかったことは残念だった。課題はあるものの、オンラインでも議論が十分に展開できたことは今回の成果だと感じる。

会場 22 の発表は、演題 C-5 は、運動教室終了後の運動行動変容に着目し、「貯筋運動」の教室終了後 10 か月間の女性高齢者の運動行動変容及び関連要因を質的アプローチから明らかにすることを目的とした発表であった。運動継続との関連が考えられた要因には「運動プログラム」と、取組の際の簡便性などといった「運動の特性」に関するものが多くみられたことなどを中心に報告がされた。演題 C-6 では、初心者向け車いすバドミントン体験会を実施後の「継続」に着目した導入プログラムの有効性を検証することを目的として発表が行われた。参加動機、体験会内容、車いすバドミンントンの印象を中心とした化インタビュー調査の結果、参加者に応じて柔軟な内容を用意し提示する体験会が「継続」において有効であることが示された。演題 C-7 は、知的障害者スポーツのボランティアに参加することを選ばない大学生の阻害要因を検討することで、ボランティア活動への大学生の参加を促す有効な手立てについて明らかにすることを目的とした発表であった。そのようなボランティアを行える環境がないことや時間や機会がないと言った回答が多く、これらが阻害要因となりうることが示された。発表後の質疑応答では 3 つの演題に対し、計 6 つが行われた。テーマ別研究発表としては、テーマに対する統一性をあまり感じられなかった点は、今後の課題であると思われる。

生涯スポーツ研究部会 課題 C シンポジウム

シンポジウムのテーマ	国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点 —国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて—
------------	---

本シンポジウムは、国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点について、学会員の皆様と共有し、今後の施策立案に役立つエビデンス構築の足掛かりとすることを目指して開催された。まず、コーディネーターの中野貴博氏より、本シンポジウムの背景とねらいについて5分程度で説明があった。

一人目のシンポジストである澤田亨氏からは、主に中年世代の運動、スポーツへの参加状況について紹介があった。最初にEBMやEBPMの推進について説明があり、その上で現在の政策の状況や示されている中年世代の運動、スポーツの実施状況の説明、現在進行中の今後の施策についての紹介があった。また、発表内では、全身持久力と2型糖尿病および、がんとの関連を示す疫学研究の成果や、見る、支えるといったスポーツとの関わりと元気・活力などとの関連を示す研究成果の紹介があった。

二人目のシンポジストである宮本幸子氏からは、若年世代の運動、スポーツへの参加状況についてデータをもとに発表があった。発表の前半では、近年の子どもを対象とした様々な公的な施策や取り組みについて時系列に沿って紹介があった。次に、笹川スポーツ財団の子ども・青少年のスポーツライフデータの調査結果から、若年世代の運動、スポーツの実施状況の詳細が紹介された。運動実施内容の変化や実施種目数の減少、また、小学校高学年以降からは、ネガティブなデータが目立つことも示された。最後に、政策提言に向けて、部活動改革後の受け皿や幼小期の運動習慣をいかに中高につなげるかが必要であるとの考えが示された。

三人目のシンポジストである小笠原悦子氏からは、主に女性の運動、スポーツ活動に焦点をあてながら「パーソナリティタイプに基づいたスポーツ・身体活動のすすめ」というタイトルで講演いただいた。冒頭、高校生を境に女性の運動、スポーツ実施は極端に減少することが示された。発表の中盤では、女性が運動から離れる要因について、イギリスでの先進的研究成果が示された。あわせて、イギリスでの革新的な女性のスポーツ促進のための取り組みやプロモーションについて紹介がされた。発表の後半では、パーソナリティタイプに基づいたスポーツ、運動の推奨について、我が国でのデータに基づく結果とともに示され、最後に、今後のスポーツ推進のための提言として、個々のパーソナリティを考慮することの重要性が示された。

以上3名のシンポジストのご発表を踏まえ、フロアより主に3件のご質問があった。質問内容は、示された結果の分析手法や今後の縦断研究の可能性、エビデンスの捉え方などに関する質問であり、各シンポジストより回答いただいた。最終的に、今回、ターゲットとした世代、性別等における運動、スポーツの状況や課題、推進のためのアイデアについて共有された。次年度以降は、さらなる対象の拡大と政策へのエビデンス収集について議論を進めていくことが最後に確認された。

健康福祉研究部会 課題 A 研究発表

本研究部会の課題 A「健康につながる体力・運動のあり方をいかに考えるか」に基づき、4 演題の研究発表が行われた。応用（領域横断）研究部会設置の趣旨にふさわしく、発表者の主研究領域は、体育科教育、スポーツ心理学、アダプテッド・スポーツ、体育哲学と多岐に及んだ。

第 1 演題「大学教育における健康持続のためのレジリエンスプログラム開発」では、コロナ禍で他者との関わりが希薄となる中、自他の体への気付きやコミュニケーションスキルアップを目指した大学教育の実践から、他者や自分の心身を見つめる教材の有効性が示された。Zoom 接続は 53 名であった。

第 2 演題「メディカルフィットネスにおける利用者のロコモ度と性格特性の関連の検討」では、一般的なフィットネスクラブとは異なり、医療の要素を取り入れたスポーツ施設という特色ある実践現場で求められる、リハビリテーションや疾患を有する参加者個人の特性を考慮した効果的な運動指導の必要性が示された。Zoom 接続は 55 名であった。

第 3 演題「コロナ禍における精神障害のある人の運動・スポーツ参加」では、就労継続支援 B 型事業所の利用者を対象とした調査研究の結果が報告された。まずは精神障害という障害の理解を深めること、運動の重要性を理解して運動欲求がありながらも、コロナ禍において十分な活動参加ができない現状の問題点が指摘された。Zoom 接続は 72 名であった。

第 4 演題「オンライン社会における『社会的健康』を問い直す」では、コロナ禍において「健康」が改めて問い直され、(1)「他者とのかかわり」における身体活動の役割、(2)直接対面状況における暴力性、(3)オンライン社会における身体の意味の三点について、哲学的観点からの問題提起がなされた。Zoom 接続は 78 名であった。

このように、本セッションでは健康、福祉、運動などをキーワードとした実践について、各専門領域の観点から結果や考察が示され、深いディスカッションが展開された。例えば、「健康」の捉え方については、身体的、精神的、社会的という各立場からの考察や見解が示され、健康福祉研究領域の今後の検討課題にもつながる内容であった。

また、研究テーマの多くはコロナ禍における運動実践をテーマに取り上げられたものであり、最新の研究成果が示された口頭発表でもあった。

Zoom 接続者は、発表者やスタッフを含めて平均 64.5 名、延べ 258 名であった。

○運営について

運営上の問題点や改善点については、特に認められなかった。Zoom 操作の不慣れから、若干の時間的なロスがあったものの、想定内の出来事であった。発表者や座長、タイムキーパーとの打ち合わせについても、15 分前からの接続で問題なくできたように思われる。

運営の問題ではないものの、4 演題を通じて参加者からのチャットによる質問はなく、いずれも発表者や座長からのものであり、オンラインによる学会の課題が感じられた。

健康福祉研究部会 課題 A シンポジウム

シンポジウムのテーマ	ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方 —「女」を生きることと健康・スポーツ—
------------	---

本シンポジウムでは、多様なライフスタイルやライフコースを念頭に、これからの健康増進や体力向上のあり方を考えるうえで、ジェンダー／セックスとしての“女”のスポーツ経験や健康増進にまつわる問題に焦点をあてた。自然科学と社会科学、最前線を歩んでこられた競技の専門家を招き、シンポジウムを構成した。

工藤報告では、大規模社会調査の結果から女性・女子のスポーツ実施の現況に焦点があてられた。成人のスポーツ非実施者（過去1年間）が全年代で女性が男性を上回っていること、12～21歳の非実施者の増加が女子について顕著であること、さらに女子の場合には中学校卒業が実施／非実施のターニングポイントになっていたり、幼少期からの組織的なスポーツ系種目の活動実施率の相対的低さが目立っているといった点が指摘された。

続く能瀬報告では、女性のライフステージと女性特有の問題について、女性アスリートの三主徴（LEA、無月経、骨粗鬆症）を中心に議論が展開された。とりわけ、若年期の無月経にまつわる低骨量・疲労骨折のリスクの高さ、そしてそれが長期的なスパンで骨粗鬆症のリスクを招来してしまうことの問題点などが指摘された。さらに、引退後のアスリートの不妊治療実施率や更年期障害にまつわる問題点、女性アスリートの医学的支援の新しい動きに関する情報提供もなされた。

最後の山口報告では、御自身の競技者そして指導者としての経験から、生物学的な性差（セックス）から女性スポーツとその支援の取組みの現況に焦点があてられた。そこから、女性が実施するスポーツのルールのある方を実施者や観戦者にとって、より面白味のあるものに変えていくことの可能性や、女性の発育発達、ライフイベント、ワークライフバランスを考慮した新しい教育を構築することの重要性が指摘された。さらに、それらを可能にする体制づくりや、女性の研究者、指導者、スポーツ組織の役員、政策立案に影響力を持つ人材育成の必要性についても提言がなされた。

発表後には、学校教育や部活動のあり方が女性のスポーツ実施のあり方に影響を及ぼしているのではないかという観点での質問が、複数のオーディエンスから寄せられた。また、学校教育における月経と女性の身体をめぐる教育内容の不十分さにも議論が及んだ。

本シンポジウムは、女性のスポーツ・健康・身体をめぐる問題点や課題を学際的な雰囲気の中で共有・明確化するという点で画期的なものであったと思われる。その一方、学校教育の現場や幼少期のスポーツ活動について、さらなる検討が必要であることが課題として浮かび上がった。さらに「真のequality」のあり方やトランスジェンダーの問題も十分な掘り下げが求められるトピックである。今後の活動につなげていきたい。

健康福祉研究部会 課題 B 研究発表

【テーマの選択状況と発表内容】

本テーマ別研究発表では、「認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか」という上位の課題に付随して下記の5つのテーマを設定し、発表者に事前にテーマを選択していただいた。

テーマ1：体力・身体活動と認知機能

テーマ2：心理・社会的要因からみた運動・認知

テーマ3：運動・認知機能の発育発達

テーマ4：認知症予防（食事・栄養、認知と転倒、社会参加、政策、プログラム開発、その他）

テーマ5：運動・認知機能の測定評価

テーマ1からは3演題、テーマ2からは2演題、テーマ4からは1演題、テーマ5からは3演題の発表があった（総演題数：9演題、テーマ3は該当なし）。当日は、テーマ1と2を合わせた5演題とテーマ4と5を合わせた4演題に分けて発表された（それぞれ口頭発表①、②）。「運動・認知機能の発育発達」と「認知症予防」ではそれぞれ、幼児・児童、高齢者対象の研究が集まるのではと予想していたが、実際には幼児・児童、高齢者を対象とした演題は、より広い領域を含んでいるテーマ1または2としてのご発表であった。「運動・認知機能の測定評価」を選択した演題は、運動学習、動作分析手法、歩行を取り扱っており、多様な視点からご発表いただいた。

【当日の発表状況】本テーマ別発表において発表のキャンセルはなく、当日に大きな問題も生じず、定刻通りに開始・終了することができた。また質疑応答は積極的に議論していただけるよう、挙手者への指名、指名なしでの直接のご発言、チャット機能の使用等の多様な形態を適宜案内し、活発に質疑応答がなされた。発表者やスタッフを除く参加者数は、口頭発表①は約45名、口頭発表②は約20名であり、セッション間で偏りが生じていた。

【今後の課題】今年から導入されたテーマ別発表は、専門領域間の連携協力による研究成果の統合化がすすめ、体育学／スポーツ・健康科学の進歩普及を図る主意がある。本テーマ別発表では、「運動」「体力」「認知」を軸に、研究領域を超えた議論を目指していた。実際に、研究内容に共通集合が生じる専門領域（たとえば、測定評価、体育心理学、バイオメカニクスなど）の演題がひとつのセッション内に集まっており、近接領域間を橋渡しすることにはある程度成功したと考えられる。しかしながら、基礎的な研究発表においては「このようなアプローチ・考え方・研究もあるのか」と遠巻きになってしまい、深い議論に発展しない傾向もややみられた。これは改善すべき課題だと考える。会場運営上の問題点としては、同セッション内で演題によって発表時間が異なると分かりにくい、参加者の表示名変更が徹底されていない、タイムキーパーの音声がかえりにくい、等が挙げられた。今後は、領域を超えての議論を促進するようなテーマ設定と、快適に参加していただくための環境づくりが課題であると考えている。

健康福祉研究部会 課題 B シンポジウム

シンポジウムのテーマ	認知機能改善のための身体活動の在り方
------------	--------------------

慢性的運動が認知機能改善に及ぼす効果について高い期待がある。本シンポジウムは、認知機能改善という目標に対して、体育・スポーツに携わる研究者がいかに貢献すべきなのかを考える機会として企画された。現状の研究成果や社会還元可能性について、体育領域における様々な領域から話題提供いただくことで、最新の知見を共有し、かつ領域横断としての新しいアプローチの可能性を議論することを目指した。

シンポジウムでは冒頭に本研究部会ならびに本シンポジウムの趣旨について、オーガナイザーの樋口より説明した。その後、兵頭和樹先生（明治安田厚生事業団体力医学研究所）、森司朗先生（鹿屋体育大学）、水上勝義先生（筑波大学）の3名の先生から25分ずつ話題提供を頂戴した。最後に、オーガナイザーである根本みゆき先生（筑波大学附属病院）の司会で、15分間の総合討論を行った。

兵頭和樹先生の講演タイトルは「高齢者の認知機能維持・向上に資する運動の役割」であった。運動生理学の立場から、運動が認知機能に及ぼす影響に関する最新情報をアップデートしていただく内容であった。誰もが気軽に実践できる「低強度運動」の効果を実証した研究や、コロナ渦での運動支援として注目される、自宅での運動に対するリモート支援の研究事例についてご紹介があった。

森司朗先生の講演タイトルは「運動と認知：子どもの運動発達の立場から」であった。“運動と認知”と聞くと、高齢者支援を連想しがちであるが、実際には子供の発達などより広範囲な年齢にかかわる問題である。そこで、子どもを対象とした身体活動と認知機能の研究としてどのような話題があるのかをご紹介いただいた。運動発達の背景にある認知発達という視点から、運動を支える認知情報処理の発達について、理論的枠組みを解説いただいた。

水上勝義先生の講演タイトルは「認知症専門医の立場から体育分野に期待すること」であった。認知症に対する運動の効果について、基礎から応用にいたるまでの最新の知見をご紹介いただいた。その中の課題に対応する形で、認知症の専門家から見て、体育学会関係者にどのような情報提供を期待するのかについてご提言いただいた。

総合討論では、各話題提供者への質問、ならびに全話題提供者への説明として「他者との競争の意味（単に一緒にやるという社会的な意味を超えて、競い合うという事の効果は期待できるか）」について回答を得た。また最後に、各話題提供者より、分野横断的な研究の枠組みに対するコメントを頂戴した。本シンポジウムには平均して110名程度（100～123名を推移）の参加があったことから、運動と認知の話題は本学会会員にとっても関心の高い話題であるといえよう。今回の良好なスタートを基盤とし、次の開催に向けて会員にとって斬新かつ有益な情報を提供していくことが今後の課題であると考えられる。

健康福祉研究部会 課題 C 研究発表

本テーマ別研究発表では、「運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか」を上位の課題とし、5つのテーマが設定された。各テーマはそれぞれ2～4演題であり、テーマによる極端な偏りはなかった。各テーマと演題数から、3つのセッションに分けて開催した。

各セッションでは、領域横断の名にふさわしく、幅広い研究領域から発表がなされた。研究内容は自然科学系も人文社会系も見られた。子どもから高齢者までの幅広い年代や障害のある方など、研究対象範囲は様々であった。特に時代背景が反映され、コロナ禍による生活習慣の変化に関する研究やオンラインを活用した運動に関する研究が多数見られた。コロナ禍による生活習慣の変化に関しては、外遊びの減少が幼少期の精神的健康に影響を及ぼす可能性や、スクリーンタイムが増加すること、就寝・起床時間が遅くなることなど、心身の健康へ暗い影をもたらしている実態や可能性が示された。一方で、オンラインを活用した運動に取り組み、身体活動が制限された環境の中でも、運動・身体活動を推進しようとする取り組みも報告された。オンラインといってもオンデマンド型とリアルタイム型では人気の運動の種類・目的が異なることや、オンラインを活用した運動の生理的効果や心理的効果が報告された。また、諸外国へのオンラインによる運動支援については、専門家の協力、インターネット環境の普及、支出の少ない用具の準備、魅力的なコンテンツの提供などが求められるが、それぞれの不足状況は国々によって異なる傾向があることが示された。そのほかにも、身体活動・運動と体力、生活習慣病予防の関係を示す研究等の発表がなされた。

多数の発表が見られた一方で、「領域横断」や「解決すべき上位の課題」について、発表者も参加者も十分に意識できていなかった印象がある。本テーマ別研究発表は各テーマを抛り所に他領域の研究成果を知るよい機会であったが、それぞれが専門とするバックグラウンドを活かして有機的に研究内容を深めるような機会とはなり得なかったと言えよう。また、全般的に質問が少ないという課題が見られた。その理由が、領域横断による質問の難しさによるものなのか、オンライン（チャット機能）による質問のしにくさによるものなのかは明確にはわからなかった。後者の場合には対面型の学会大会が開催されれば解決する可能性が高いが、前者の場合には、次回に向けた課題として何らかの対策を検討する必要があるだろう。

健康福祉研究部会 課題 C シンポジウム

シンポジウムのテーマ	テレワーク時代における心身の健康の保持増進の工夫と提言 (新しい生活様式と健康の保持・増進)
------------	---

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）により、我々は生活様式の変更を余儀なくされている。その変更は極めて急速であり、スポーツ活動・運動習慣の変化や、それらが健康に及ぼす影響が十分に解明されない中で、その影響を予測して対策を施すことが必要とされている。そこで本シンポジウムでは、研究者や職能団体の立場から俯瞰的に見た現状や課題、教育・指導現場における個々の実践事例を紹介して頂き、集積が必要だと思われるエビデンスおよび実践事例について議論し、研究・実践活動の指針を示したいと考え、4名のシンポジストを迎えた。

岡氏は、COVID-19 流行に伴う身体活動・座位行動の変化と健康指標の関連を検討した諸外国の研究から、COVID-19 の流行により歩行量の減少、体重の増加が認められ、身体活動指針を充足することが不安や抑うつ、感染・重症化・関連死のリスクを抑制すること、さらに日本の就労者を対象にした COVID-19 と座位行動に関する研究事例から、在宅勤務が多い者ほど仕事での座位時間が長くなっており、健康への悪影響が懸念されることを示した。

岩井氏は、コロナ前とコロナ下におけるフィットネス産業界の動向を概観し、コロナ禍の環境変化への対応策としてのオンラインフィットネスの浸透やヘルスケアテクノロジーの進化など世界のトレンドを紹介した後、With/After コロナ下での今後のビジョンとして、ヘルスケアテクノロジーの活用、ファンクショナル（機能改善）トレーニングの浸透、運動療法としてのフィットネスを挙げ、コロナ禍で改めて注目されるフィットネスクラブの本質的価値の提供を謳った。

塩田氏は、障害者のスポーツ環境の現状と課題、障害者がスポーツを行う意義について述べた後、COVID-19 流行下で活動が制限された障害者に対するオンラインでのスポーツ教室や動画の制作などの取り組み事例を紹介した。また、アダプテッド・スポーツの考え方と現状の大学体育授業の在り方への問題意識から、アダプテッド・スポーツを取り入れた体育教育の必要性を説いた。

大槻氏は、コロナ禍による緊急事態宣言下でオンライン授業を余儀なくされる中、クラウド型教育支援サービス（manaba）を利用した健康教育を企画・実施（学部学生全員を対象にアンケートを実施し、集計結果を学生にフィードバックするとともに教員がコラムを執筆するといった実践的な健康教育の教材を開発）した成果の報告を通し、新しい生活様式において実施可能な大学生の健康教育の在り方について提案した。

それぞれの話題は非常に内容が濃く、有益な情報を得る場になったと考えられるが、発表時間が全体的に長引いたため、参加者を交えたディスカッションの時間が十分にとれなかった。時間枠と登壇者の数を検討する必要がある。

体育哲学

○研究発表（口頭発表）について

口頭発表総数は1題を予定し、キャンセルはなく、予定された行程は滞りなく遂行された。口頭発表は大会三日目（9月9日）に口頭発表①（9時00分～9時30分）が行われた。

内容は次の通りである。「体育・スポーツ哲学において倫理学を『応用』するとは -ジープ『具体倫理学』の価値概念に着目して-」。質疑応答については、応用倫理学についての具体的な展開、体育とスポーツの関係についての整理などについて質問、意見が出された。発表者は、新たな着想や視点を得ることができたように思われる。約30名以上の聴講者がオンラインルームに入室し、活発で多角的な議論がなされたということは、今大会の口頭発表がフロアを大いに刺激したことを意味する有意義な時間であった。

○浅田学術奨励賞受賞記念講演について

浅田学術奨励賞受賞記念講演は、大会3日目（9月9日）の9時40分～10時40分に開催された。受賞者の高岡英氣会員（敬愛大学）による講演テーマは、「プロフェッショナル競技者の概念的考察」と題され、関根正美会員（日本体育大学）の司会で約60分の講演後、時間の許す限りの質疑応答がなされた。記念講演はパワーポイントと資料が準備され、発表者はスライドを適宜使用しながら説明をした。会場は同様に約65名が入室した。発表後の質疑応答では講演内容に基づく質問がなされた。

○総会について

総会は大会3日目（9月9日）の10時50分～11時50分に開催された。

○運営について

体育哲学領域の会場運営は体育哲学領域事務局の田井が担当した。領域企画行事、研究発表数が少なかったために運営上の問題はなかった。オンライン開催のメリットとして対面形式よりも参加者の負担が少ないように感じた。デメリットとしては、今回の発表では問題がなかったがオンラインツールに不慣れな座長・発表者には円滑な研究発表の進行に課題があることが考えられる。また、発表後のフリートークでの意見交換などの場がないことも学会大会として今後の検討事項と思われる。しかしながら、移動時間や費用の面での利点から多くの会員の参加が見込まれ、今後の学会運営でもオンライン配信と対面のハイブリッド形式などによって学術活動が活発になると感じた。

文責：田井健太郎（群馬大学）

体育史

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

体育史専門領域の研究発表は9月9日（木）、新井博体育史学会会長からの挨拶の後、9時05分より開始された。

今回の学会大会では専門領域と複合領域とが設定されたこともあり、専門領域での発表は6演題（すべて口頭発表）と少なめであった。複合領域での発表は、歴史研究者が他領域の研究者に自身の研究の意義を分かりやすく説明する、つまり歴史研究と現代的な問題との接合点を意識するよい機会であると考えられる。一方で、方法論を共有する専門領域での議論の場も引き続き充実させていきたいものである。

今回の発表者の中には体育史専門領域で初めて発表する方もおり、大学院生からベテラン研究者までさまざまな研究歴をもった発表者によるセッションとなった。普段は他領域に足場を置いている研究者がいつもとは違う専門領域での議論を求めて発表すること、あるいは質問をすることにはそれなりの緊張があると考えられ、発表者のバックグラウンドもふまえて建設的な議論を積み上げられる場としていきたい。こうした場が設定できるのは本学会の意義の一つであるといえる。

聴衆は、9時台は32～35名とやや少なめであったが、その後の発表は35～40名程度で推移し、最大値は52名であった。普段から体育史学会に参加いただいている会員以外の聴衆も多く見受けられ、ここにも各領域にまたがって開催される本学会の特色が見られた。

多くの会員がオンラインでの学会に慣れており、また会場運営に携わっていただいた方々のご尽力によって発表や質疑応答に技術的な滞りはなかった。発表15分、質疑応答10分が設定されたが、発表時間が足りず、内容を十分に伝えられなかったケースが2題ほどあり、興味深い内容であったがゆえに残念であった。有意義な時間とするための発表者の周到な準備が求められる。

各発表間の5分のインターバルは発表者および座長の準備、少々の時間超過への対応策として設定されているが、オンラインでの運営がスムーズにおこなわれるようになってきていることをふまえれば、例えばインターバルを2～3分とし、発表時間を17～18分に拡大するといった対応もあり得る。

残念ながら全体的に議論は活発とはいえ、座長からの質問や特定の会員からの質問に終始する傾向が見られた。事前に配布される発表抄録は10行程度の概要であり、15分の発表時間内に研究の背景や意義をふまえて内容を把握することが難しいこともその一因と考えられる。当日に資料を配付したとしても状況はそれほど変わらないであろう。今回の方式は異分野間での研究交流のきっかけにもなり得るが、予備知識がほとんどない状態でそれぞれの研究に当日接するという限界のなかで、議論の深まりが得られないということにもつながり得る。発表者にはこの状況を前提とした工夫が必要と思われる。

○運営について

研究発表の運営は、専門領域事務局3名（進行1名、タイムキーパー2名）が担当した。学会大会のオンライン化も進み、発表者の音声接続や画面共有による発表は滞りなく行われた。時間管理には呼び鈴とチャット通知を併用し、各発表間に5分のインターバルを設けることでスケジュール通り進行した。質疑応答は手をあげる機能及びチャット機能を併用した。

当日の運営自体に問題はなかったが、参加者の名前（所属）表記の統一がなされないなど、学会参加者全体での統一が必要だと感じた。また、組織委員会から研究発表者に対してなされる連絡事項については、事前に専門領域事務局にも共有することで、発表資料の配付等を含めた当日の運営がよりスムーズなと考えられる。

文責：体育史専門領域理事会

体育社会学

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

3 日目の専門領域のみの発表では口頭発表が 10 題であった。

○企画について（実施された領域のみご記入下さい）

特になし。ただし、期間中にシンポジウムや独自企画を望む声も寄せられた。

○運営について

事務局と研究委員会にてオペレーションがなされた。また、3 日目の口頭発表の中から学生研究奨励賞審査委員会により当該賞受賞発表が選出された。

○その他

専門領域に与えられた Zoom のアカウントが 1 つのみであったことから、混乱が生じた。3 日目に代議員会が開催されたが、それが延びてしまい、その後の口頭発表を視聴する参加者が代議員会中にアクセスする事象が発生した。

次回大会時には、アカウントをせめて複数にして、代議員会や総会用と、一般発表用に別ける必要があると感じた。

文責：事務局長 石澤 伸弘

体育心理学

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

口頭発表は、9月9日の午後に3セッション×各3演題の構成で行われた。各セッションの座長は、口頭発表1（13時から14時）が星野聡子先生（奈良女子大学）、口頭発表2（14時10分から15時10分）が兄井彰先生（福岡教育大学）、口頭発表3（15時20分から16時20分）が内田遼介先生であった。質疑応答は質問者がマイクをオンにして直接質問する形式で行った。セッション全体を通して、60–100名程度の参加があった。ポスター発表は、9月7日～9月16日の期間、Webシステム（Confit）上にポスターと抄録が掲載される形で発表された。体育心理では全43演題の発表があった。質疑は、Confitのチャット機能を使って行われた。

○キーノートレクチャーについて

9月2日の9時から11時まで、2つのキーノートレクチャーが企画された。第1のキーノートレクチャーにおける演者は須崎康臣先生（島根大学）であり、テーマは「体育・スポーツにおける自己調整学習」であった。60分にわたる話題提供では、自己調整学習理論の概要、自己調整に基づく研究事例、今後の展望と課題などについて説明がなされた。司会は兄井彰先生（福岡教育大学）であり、話題提供後はQ&Aに基づく質疑がなされた。第2のキーノートレクチャーにおける演者は中本浩揮先生（鹿屋体育大学）であり、テーマは「運動の制御と学習を支える知覚スキル」であった。60分にわたる話題提供では、他者の行為観察など、運動を“みる”ことの背景にある予測機能の働きや、動作観察に基づく運動学習の話題などが説明された。司会は関矢寛史先生（広島大学）であり、時間の都合上質疑は割愛された。2つのキーノートレクチャーともに、演者自身の研究成果と、関連する国内外の研究動向が豊富に紹介され、充実した内容であった。全体を通して約150名（130–180名）の参加があった。

○運営について

学会大会前に口頭発表の座長等の当日の役割について、体育心理学領域の学会大会委員が中心に人選を行った。この人選については、応用研究部会での担当と重複しないように、事前の確認が必要であった。当日の運営は、Zoomのホストとして教員3名（組織委員会側の1名を含む）で行い、予定された時間通りに進行され、大きな問題はなかった。キーノートレクチャー及び口頭発表の事前打ち合わせは、開始時間前に、Zoom上でスムーズに行われた。また、キーノートレクチャーでは質疑の時間が不十分だったため、急遽、昼休みの時間帯にブレイクアウトルームが開設され、そこで演者ごとに有意義な情報交換が行われた。このような臨機応変な対応が良かったと感じた。改善点については、学会のリモート開催を前提とすると、Zoomとは別にバーチャルビデオチャットを準備するなど、領域での自由裁量がある程度許されるとより活発な情報交換が可能になると思われる。

○その他

総会は、9月9日11時10分から11時45分まで行われた。参加者は約70名であった。開会の辞（杉山佳生先生、九州大学）、会長挨拶（山本裕二先生、名古屋大学）議長選出（國部雅大先生、筑波大学）が行われた後、2021年度事業など6つの事項について報告された。その後、2020年度決算報告、2021年度補正予算案などの審議事項5つが審議され、承認された。

文責：兄井 彰

バイオメカニクス

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

バイオメカニクス専門領域では、口頭発表 9 件、ポスター発表 21 件、合計 30 件の研究発表が行われた。例年と比較して演題数が少な目ではあったが、日本体育・スポーツ・健康学会では、専門領域の枠に依らない領域横断セッションでの発表を推進していることも、少なからず影響していたかもしれない。また例年の研究発表では大学院生の発表が主であったが、今年度は複数名の若手のポスドク・教員の発表が複数見受けられたことも特徴的であった。国際学会では、若手・シニアを問わず、様々な年代の研究者が筆頭で発表している様子を見かける一方で、国内学会では、大学院生の発表が主という印象が強い。これには所属機関での業務等の様々な要因が関与していると考えられるが、個人的には、様々な年代の研究者による発表と忌憚のないディスカッションが繰り返されたとより良いように思う。また筆者の知る限りではあるが、本学会のオンライン開催は初めての試みであり、そのため発表者や視聴者がとまどうシーンも少なからず起きるだろうと想像していたものの、思いの他スムーズに進行していたように思う。各セッションでの発表者や視聴者の方々はもちろんのこと、進行にご助力いただいた座長の保原浩明氏(産業技術総合研究所)、阿江数通氏(茨城県立医療大学)、佐渡夏紀氏(筑波大学)に、この場をお借りして感謝申し上げたい。

○企画について（実施された領域のみご記入下さい）

バイオメカニクス専門領域では、専門領域企画として、小池関也氏(筑波大学)によるキーノートレクチャー「高速スウィング動作のしくみを解き明かす」を実施した。昨年度、小池氏が日本バイオメカニクス学会学会賞を受賞されたため、受賞者講演として企画されたものである。様々なスポーツで活用される高速スウィング動作に焦点を当て、運動方程式を構成する各項の動作生成に対する貢献から、高速スウィング動作の仕組みとコツについて、丁寧に解説いただいた。近年では、良くも悪くもバイオメカニクスに関する解析用ソフトウェアのパッケージが充実しつつあり、式の中身や意味を理解せずとも”それらしい”解析が出来てしまうことも少なくない。だからこそ小池氏の研究によって示された結論のみならず、その発想とアプローチから、多くの気づきを得た視聴者も少なくないと思う。なお日本バイオメカニクス学会学会賞の受賞論文は、「Direct and indirect effects of joint torque inputs during an induced speed analysis of a swinging motion」というタイトルで、2019 年に Journal of Biomechanics へ掲載されている。スポーツパフォーマンスの改善に興味・関心のある方々にはもちろんのこと、身体動作の生成メカニズムについて、踏み込んだ解析に興味・関心のある方々にも是非ご一読いただきたい。

○運営について

バイオメカニクス専門領域は、日本体育・スポーツ・健康学会と深く関係しつつも独立した学会である日本バイオメカニクス学会の運営にも関わっている。そのため日本バイオメカニクス学会では、日本体育・スポーツ・健康学会の会員外でも理事として選任され得る仕組みであることから、必ずしも理事全員が本学会に参加するとは限らない状態にある。そのような状況も想定されていたようで、理事会については、学会参加者以外でも参加できるよう、予めご設定いただいていたようである。おかげ様で、理事会についてもトラブルなく実施できたことをご報告するとともに、そのご配慮に御礼を申し上げます。

文責：橋詰 賢

体育経営管理

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

今大会においては、大会 3 日目（9 日）に口頭発表が行われ、併せて大会期間中でのポスター発表が行われた。口頭発表では、伊藤リナ氏（名古屋大学大学院）、永田秀隆氏（仙台大学）、望月拓実氏（大阪国際大学）、山北隆太郎氏（オタワ大学）による計 4 題の発表が行われた。他領域所属の参加者も多く、最大 80 名程度の参加があり、質疑応答では活発な議論が展開された。また、ポスター発表では、河野隆志氏（東都リハビリテーション学院）、大城卓也（聖カタリナ大学）、笠原春香（筑波大学）、霜島広樹氏（福岡大学）による計 4 題の発表が行われた。今大会では、コメント機能を用いた質疑応答が行われ、従来の形式とは異なりより具体的な指摘や質問についてやり取りがなされていた。

○運営について

今大会は初のオンライン開催であったが、大きなトラブルもなく終えることができた。しかし、オンライン開催であるからこそ、検討しなければならないことがあったと考えている。それは、発表者の研究情報保護についてである。研究発表やシンポジウムでは、発表資料を zoom のチャット上にそのまま貼り付けるケースが多くみられたが、情報漏えいやプライバシー保護の観点から適当なやり方とはいえない。セキュリティ体制のなかで展開されるべき事項である。当専門領域では、情報漏えいの観点から、各発表者に発表資料の閲覧権限（ダウンロード可もしくは閲覧のみ）を決めてもらい、フロアに発表資料の共有を行うようにした。本来このような仕組みづくりは、学会全体で統一したルールの中で行われるべきである。デジタル社会の今だからこそ、研究者ファーストの安心・安全な学会運営へシフトしていけるように改善をお願いしたい。

○その他

今年度から研究発表のスタイルが、応用（領域横断）研究部会が企画する「テーマ別シンポジウム」と「テーマ別研究発表」に大きく変更となった。特定のテーマに焦点をあて、様々な専門領域からの研究の知見が討議されたことはとても有意義と感じた。しかし一方では、これまで各専門領域別に実施されていた口頭発表・ポスター発表が、例年 30 件ほどあったものが、今年度は 8 件と減少した。このことについては、今後の課題として検討したい。

文責：小山さなえ

発育発達

○研究発表（ポスター発表）について

研究発表はポスター発表のみで行い、13 演題の発表があった。質疑応答に関しては、発表ごとに Confit のコメント機能（チャット）を用いて適宜行った。9 月 7 日（火）～9 月 9 日（木）17:00 までがポスターへのコメント受付期間で、9 月 16 日（木）17:00 までがコメントへの回答期限であった。

○企画について（実施された領域のみご記入下さい）

キーノートレクチャーとして「新型コロナウイルス感染症対策に配慮した体育における学習活動の取扱いの現状と今後の展望」をテーマに塩見英樹氏（国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官/スポーツ庁政策課教科調査官）に講演をお願いした。実技を伴う体育の授業は、コロナ禍では集団で行う活動を避け個人で行う活動を中心に行うなど様々な配慮が必要であるが、現場での混乱や、また教師の研修においても機会が減少するなどの制約を受けたことによる課題もみられた。その中で国として行ってきた対応や取り組みについて具体例を含めて紹介がなされた（コロナ禍における体育、保健体育の教師用指導資料:https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop04/list/jsa_00001.htm）。本キーノートレクチャーへ参加は 130 名(同時接続)であった。(2021 年 9 月 9 日(木) 13:00～14:00)

○運営について

ポスター発表は、自由で時間の制約の少ないディスカッションを提供できる発表形式であるが、オンラインでの開催となると、質問や回答を入力する必要があるため、十分な表現が出来ず、加えて、質問や回答にタイムラグが生じるため、十分な討論をする場が提供できていない。オンラインでのポスター発表はその意義を十分に発揮できておらず、今後は口頭発表形式のほうが好ましいと思われる。

文責：中西純，吉田伊津美，國土将平

測定評価

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

測定評価専門領域では、口頭発表 12 演題を 3 つのセッション（各 4 演題）に振り分け、1 演題あたり発表 8 分と質疑応答 4 分の計 12 分で実施した。当日は、これらの発表に 44～66 人の入室があり、活発な質疑応答が行われた。ポスター発表は 17 演題の登録があったが、9 月 9 日 17 時時点のコメント数（質問や意見等）は、0～2 件の範囲で 2 件が 1 演題、1 件が 5 演題、0 件が 11 件と書き込みがほとんどなかった。

○企画について（実施された領域のみご記入下さい）

測定評価専門領域の企画は開催しなかった。

○運営について

専門領域別の Zoom の運営は、座長や発表者、時計係の氏名の前にこれらを加えていたことから、発表者の確認やダイレクトのメッセージを送りやすかった。ただ、本領域のホスト担当者がミーティングに入室できなかったことから、共同ホストが入室の承諾を行ったトラブルはあった（複数の共同ホストが必要）。

○その他

1. 大会事務局より、本専門領域の発表として異なる演題があれば報告してほしいとの依頼が 5 月中旬にあった。専門領域関係者で発表演題を確認し、今回はすべての希望を本領域で受入れた。この目的の意図や理由が分かりづらかったことから、依頼にその旨の連絡を入れてほしかった。
2. ポスター発表に対してコメント数が少なかったことから、コメントの受付期間と回答期間を公開期間に合わせた方が活発な質疑応答ができると思う。
3. 一般研究発表の登録時に、「テーマ別」、「専門領域」のどちらで発表してよいか迷ったという会員からの声があった。
4. 大会事務局の方針が、できるだけ「専門領域」発表ではなく、「テーマ別」発表を促していたため、例年、測定評価専門領域で行っている「優秀発表賞」の選考を行わなかった。今大会では、一定数の専門領域発表があったことから、来年度以降「優秀発表賞」を復活させるか検討したい。
5. 専門領域企画として、企画件数を絞ったうえで実施方法を柔軟にしていいただきたい。例えば、スピーカー 2 名以上、シンポジウム形式など柔軟にしていだけた方が、企画したテーマを解き明かす最適な実施方法を選択できるようになり、結果的に魅力的な企画となると考える。
6. 統計相談コーナーは、体育・スポーツ・健康学会員へのサービスとなることから、専門領域企画（1 件）とは別に次年度以降開催することを希望する。

文責：中谷 敏昭（天理大学）

体育方法

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

今年度は口頭発表は行わず、オンデマンドのポスター発表のみ実施した。昨年度未開催（国際学会開催による）となり、コロナ禍で初めての遠隔運営にも関わらず、日本コーチング学会大会（本年 3 月に開催）と遜色ない 64 件の発表申し込みがあった。しかし、本領域では珍しく、大会前に 2 件の発表取り下げがあった。おそらく、コロナ禍の行動制限等により想定した研究活動ができなかったことが要因であろうと思われた。

本領域の会員の皆様は、オンデマンド開催そのものは、3 月コーチング学会大会でも経験済みのため、過不足なく論議ができていたと思われた。

文責：野口 智博

保健

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

保健専門領域では、2つのセッションの下で6題の口頭発表が行われ、活発な質疑応答が交わされた。

・第1セッション（参加者47名）

戸村貴史氏らは、海外在住の日本人幼児の運動環境に関する予備的研究として、ドイツ在住の日本人保護者を対象に実施した質問紙調査から、日本人コミュニティエリアの存在が運動環境に関する保護者の認識に肯定的な影響を与えていることや、言語や文化的な課題により運動施設の利用等ができない状況があること等を確認し、保護者の積極的な支援が必要であることを報告した。

物部博文氏らは、小学校教員養成系大学1年次生における病原体と病気の起こり方の関係の理解状況を Common Cold Research Unit の実験等を基に作成した問題場面を通して調査し、半数の学生がかぜの発生と病原体との関係を理解できていた一方で、残りの半数は「鼻水や発熱等の症状が出るのがかぜである」などの誤った概念形成がなされている状況であったこと等を報告した。

山田浩平氏らは、一般教員と養護教諭を対象としたがん教育に対する意識等についての質問紙調査から、両教員ともに、がん教育への積極性はあるものの、知識の理解度は内容によって偏りがみられ、それが指導の自信にも関連していたこと、また、がん教育推進の条件として、一般教員は準備のための時間的な余裕を、養護教諭は教職員の理解と合意を挙げていたこと等を報告した。

・第2セッション（参加者50名）

久保元芳氏らは、米国で効果を上げている包括的性教育プログラム Personal Responsibility Education Program の特徴と可能性を検討し、そこでは成人への移行期の性に関する課題として、発育発達、人間関係、金融リテラシー、キャリア形成などの視点を踏まえた題材が多様な指導方法と共に設定されており、日本での教科等横断的な性教育の充実に向けて適用性があること等を報告した。

宮地美帆氏らは、Andragogy Theory に基づいて、中学校および高等学校の保健体育科教師における性に関する指導の認識を半構造化面接と主題分析法により検討した結果、「性に関する指導におけるネガティブな認識」「性的指向とジェンダー表現における指導のジレンマ」「問題解決型の教師の学び」「性に関する指導の教師教育の重要性」の4つのテーマが見出されたこと等を報告した。

古田映布氏らは、アンドラゴジー理論を枠組みとしながら、学生主催のオンライン性教育に参加した大学生の学習経験を半構造化面接と継続的比較分析法により検討した結果、「オンライン教育による利点」「一人暮らしの大学生における性教育の重要性」「妊娠・中絶に関する倫理的問題と価値観」の3つの主要なテーマが学習経験として導き出されたこと等を報告した。

○運営について

・オンライン形式での運営の状況

第71回大会の運営方針に従い、本専門領域の研究発表及び総会も Zoom を用いたオンライン形式での開催となったが、通信障害等のトラブルは発生せず、滞りなく進行することができた。また、Zoom のチャット機能を活用した質疑の確認や参加者への情報共有などの新たな取組も取り入れられた。

・応用（領域横断）研究部会・学校保健体育研究部会でのテーマ別研究発表との併存に関わる要望

保健専門領域の研究発表は、学校での保健教育に関するものが多いという特徴がある。そうした中、本専門領域の総会において「本大会より設定された応用（領域横断）研究部会の学校保健体育研究部会でのテーマ別研究発表の課題と重複があるため、演題登録時に迷った」という意見があがった。また、それに関わって「学校保健体育研究部会での研究発表の課題をより焦点化したテーマにすることで、専門領域での研究発表とのすみ分けを明確にしてほしい」という要望もあがった。次年度に向けて、応用（領域横断）研究部会・学校保健体育研究部会との調整が必要である。

文責：久保 元芳

体育科教育学

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

本大会における一般研究発表は28題であり、発表形式別にみると、口頭発表14題、ポスター発表14題であった。発表内容は、カリキュラム論に関する発表が2題、教授・学習指導論に関する発表が23題、体育教師教育論に関する発表が3題であった。特に、小学校を対象とした授業研究や教材論に関するものが多くみられた。

口頭発表は、大会3日目においてZoom会場12を使用し、口頭発表①～④の4つのセッションに分かれて実施された。参加者は、セッションによって異なるが、平均で70名～80名程度の入室があり、発表によっては100名程度入室していたこともあった。また、口頭発表のセッション全体を通して、440名の参加があったことから、多くの参加者に入室いただいた。チャット機能を活用しながら、活発な質疑応答が行われ、回線トラブル等もなく口頭発表のセッションを終えることができた。

ポスター発表は、9月7日（火）～9月16日（木）17:00までポスターのWEB公開期間が設けられ、9月7日（火）～9月9日（木）17:00までの期間で、参加者によるポスターへのコメントの受付が行われた。9月16日（木）17:00までに発表者から質問者へコメントを行うスケジュールで実施された。

○運営について

口頭発表での運営については、日本体育科教育学会総務担当の陳（国土舘大学）がZoom会場12のホストとなり、鈴木聡先生（東京学芸大学、計時担当）、大会本部より宮崎明世先生（筑波大学）が共同ホストとして運営にあたった。

以下の①～④について、各セッションの座長へ事前に依頼し、当日参加者へアナウンスを行っていただくことでスムーズに口頭発表が進むよう努めた。

- ①ご担当のセッション開始時間の15分前までにご入室ください。
- ②タイムキーパーについては、総務担当の方で実施いたします。
総務担当よりチャットへ時間経過を書き込みさせていただき、計時を行わせていただきます。
- ③質疑については、発表中に質問事項が出てきた方はチャットにて書き込んでいただく、質疑の時間に発言希望の際は「手を挙げる」で意思表示していただく形でアナウンス・対応をお願いいたします。
（挙手の確認につきましては、総務担当の方でもフォローさせていただきます）。
- ④口頭発表の様子を学会総務担当の方で記録（録画）する旨、セッション開始前にフロアの皆様へアナウンスいただきますようよろしくお願いいたします。

チャット機能を有効活用することで、座長が質問内容をすぐに確認することができ、スムーズに質疑に移れたり後続の質問がなされたりと活発な議論に繋げることができた。進行の課題として、Zoomの画面共有や画面共有解除などZoomの基本操作に慣れておられない発表者がいたことから、進行に遅れが生じる場面があった。

○その他

海外協定学会（インド体育学会）からの発表者による英語での口頭発表が1題あったが、口頭発表②の座長である吉野聡先生（茨城大学）にご対応いただき、円滑に実施することができた。

文責：陳 洋明

スポーツ人類学

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

筑波大学を主管校として、同時双方向オンライン（一部オンデマンド配信）で開催された。本領域は会場 13 にて口頭発表が実施された。午前中は佐川哲也氏（金沢大学）を座長に据え、2 題の発表があった。いずれも東南アジアを対象に政策に着眼した発表であった。午後は松浪稔氏（東海大学）・山口順子氏（津田塾大学）が座長を担い、3 題の発表があった。ここでは海外からの発表もあり、コロナ禍における 3 密回避が逆に新たな発表者を迎え入れ、国際的な展開への可能性を示したとも言えよう。ポスター発表は僅かに 1 題であったが、これもまた海外からの発表であった。タイムキーパーのベルによる通知に課題は残すものの、チャット機能を利用できる質疑応答の機会は、本領域のみならず、体育・スポーツ・健康への広い範囲での議論をオンタイムに近い形で可能にしたと考えている。

発表者は国内外のベテラン研究者から大学院生まで、会場への参加者は午前 28 名、午後は 68 名（いずれも最高値）を数えた。

○企画について

真田久氏（筑波大学・特命教授）によるキーノートレクチャー「学校体育におけるスポーツ人類学の可能性を探る」を開催した。体育・スポーツの歴史学、人類学を専門に、教科用図書検定調査審議会の専門委員を務められたご経験をふまえ、本領域の専門研究と学校体育（特に体育理論）の接点についてご発表いただき、各専門領域から幅広く 107 名の参加者を得た。主な論点は以下の通りである。

2022 年度から実施される新学習指導要領では、引用の通り、スポーツのルーツを日常の遊びや生活に見出し、それが近代スポーツとして競技的側面を強調しつつ普及されたこと、またその身体文化が時代に応じて多様化された経緯を学習する必要性が記されている。本講義は、この学習活動の充実に向けてスポーツ人類学専門領域がどのような役割を担うかという観点から、特にスポーツの「起源」としてのメタ・コミュニケーション、民族スポーツと国際スポーツ、身体技法やジェンダーなどのキーワードを手掛かりに、これまでの本領域における研究の蓄積を活用した授業実践が提案された。また、大学生を対象とするアンケートにより、高等学校における保健体育科（体育理論）授業を通してそれらの内容が一定のレベルで理解されていることが報告され、大学の授業ではその基盤の上で講義・研究指導を行うことの重要性が指摘された。このことは、本学会の目指す体育・スポーツ・健康学の領域横断的研究の発展に向けて、これまでにスポーツ人類学専門領域で蓄積された研究成果をベースとする新しい発信をするための重要な試みとなった。

○運営・その他について

全面オンライン開催となった今大会では、zoom を活用した口頭研究発表と質疑応答が進行された。システム障害（映像や音声の不具合等）はなかったが、対面形式と大きく異なったのは、発表後の意見・情報交換の機会が制限されてしまったことだろう。チャットツールは便利であるが、扱う情報量が少なく、また他の研究者らがその議論に入り込むこともできず、この点は今後に向けた課題の一つといえる。一方で、オンラインだからこそのメリットは、遠隔地からの発表が実現されたことである。本領域では写真 1. の通りインドからの発表を受け入れて、発表後には英語での質疑応答もあった。今後も、必ずしも英語を得意としない参加者等への配慮を工夫しつつ、国内外からの積極的な研究発表に期待したい。

文責：松浪登久馬・大林太朗

アダプテッド・スポーツ科学

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

本専門領域では、口頭発表が行われた。本大会より、テーマ別研究発表が中心となったことから、多くの発表者が自分の研究テーマに関わるテーマ別研究発表にエントリーされたが、3日目の専門領域研究発表では4題の口頭発表が行われることとなった。それぞれ「集団における行動問題を包摂する教師の言葉がけの検討 ある体育活動場面におけるエスノグラフィーによる記述から」（黄金理佐ほか）、「重度・重複障害児を対象としたアダプテッド・スポーツ用具開発に係る有効性の検討 ウォータースポーツ「SUP（Stand Up Paddleboard）」の用具開発を通じて」（加地信幸ほか）、「ランナーと伴走者によるブラインドマラソンにおける「面白さ」の相互行為的構築 「空間の固有性」への協働的対処に着目して」（植田俊・山崎貴史）、「アダプテッド・スポーツの授業において実施したハイフレックス型授業の検証」（近藤克之）であった。参加者はおよそ40名であった。

黄金氏および加地氏による研究発表は、いわゆる発達障害といわれる子どもや、重度・重複障害の子どもを対象とした研究であり、個々へのアダプテッドの内容に言及する本専門領域ならではの研究発表であった。植田氏からの研究発表は、ブラインドマラソンの「面白さ」を「空間の固有性」に着目して捉えたもので、これまでにない切り口からの議論が行われ、参加者とも様々な意見が交わされた。近藤氏の研究発表は本専門領域の研究者が共通して課題としている大学での授業に関するものであり、実践的に今後どのようにアダプテッド・スポーツの教育を行っていくか、発展的な議論が交わされた。

研究対象や手法が多様な本専門領域において、今回のようにテーマ別研究発表と専門領域研究発表の両方の機会を設けることができたことは、とても有意義なものであった。特に、本専門領域は独立学会を持っていないことから、会員が一同に集まることができるのは日本体育・健康・スポーツ学会の学会大会のみである。3日目の専門領域研究発表の日には、本専門領域の総会も行われたため、会員が一同に集まる良い機会となった。

○運営について

上述のように、本専門領域の特性からすると、今回のようにテーマ別研究発表と専門領域研究発表の両方の機会を設けることができたことは有意義であったと考えている。しかし、今後ますます多様な研究発表が行われるであろうことを考えると、自分の研究発表の内容がテーマ別研究発表に相当するのか、専門領域研究発表がよいのか、など迷ってしまうことも予想される。テーマ別研究発表がどのように軌道に乗ってくるのかを見計らいながら、双方の特徴を明確に区別して学会大会が運営されていくことを望む。

文責：村上 祐介

体育・スポーツ政策

○その他（総会報告）

本専門領域は2021年4月に発足したばかりであるので、今年度は、設立総会のみ実施した。

総会には、専門領域会員外を含む49名が参加した。まず、齋藤健司専門領域代表（筑波大学）の挨拶があり、設立の経緯や規約の策定、運営委員会の開催といったこれまでの活動が報告された。続いて、事務局より関連規程の提案があり、原案通り承認された。また、事業計画案及び予算案が提示され、いずれも承認された。質疑では、当面想定される厳しい財政状況に関して、専門領域会費の値上げなどの対策を検討すべきといった意見が出された。

次に、設置された専門領域内の各委員会から活動計画等が示され、12月に発足記念研究会を開催すること、3月に第1回研究会を開催すること、さらに3月には専門領域研究誌「体育・スポーツ政策論叢」の発行を企画していることが報告された。

文責：森 浩寿

監査報告書

一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会
会長 菊 幸一 殿

2021 年 12 月 10 日
日本体育・スポーツ・健康学会第 71 回大会組織委員会

監事 西 保 岳 (印略)

監事 長 谷 川 聖 修 (印略)

監事 中 川 昭 (印略)

2021 年 9 月 7 日から 9 日まで開催された「日本体育・スポーツ・健康学会第 71 回大会（主管：筑波大学）」における会計および業務の監査を行い、以下の通り報告いたします。

1. 監査方法の概要

- (1) 会計監査について、帳簿、銀行口座通帳、関係書類の閲覧など、必要と思われる監査手続きを実施し、会計書類の正確性を検討した。
- (2) 業務監査について、大会組織委員会・大会実行委員会等の会議に出席し、大会組織委員長および事務局長からの業務報告を聴取し、関係書類の閲覧など、必要と思われる監査手続きを実施し、業務執行の妥当性を検討した。

2. 監査意見

- (1) 収支計算書は、大会の収支状況及びその用途を正しく表示していることを認める。
- (2) 大会報告書の内容は事実であると認める。
- (3) 大会実行委員長、事務局長および大会実行委員の業務執行に関する不正行為又は法令もしくは定款に違反する事実はないと認める。

以上

学会員及び大会参加者を対象とした第71回大会の運営と実施に関するアンケート調査結果

アンケート期間：2021年10月13日～2021年10月27日

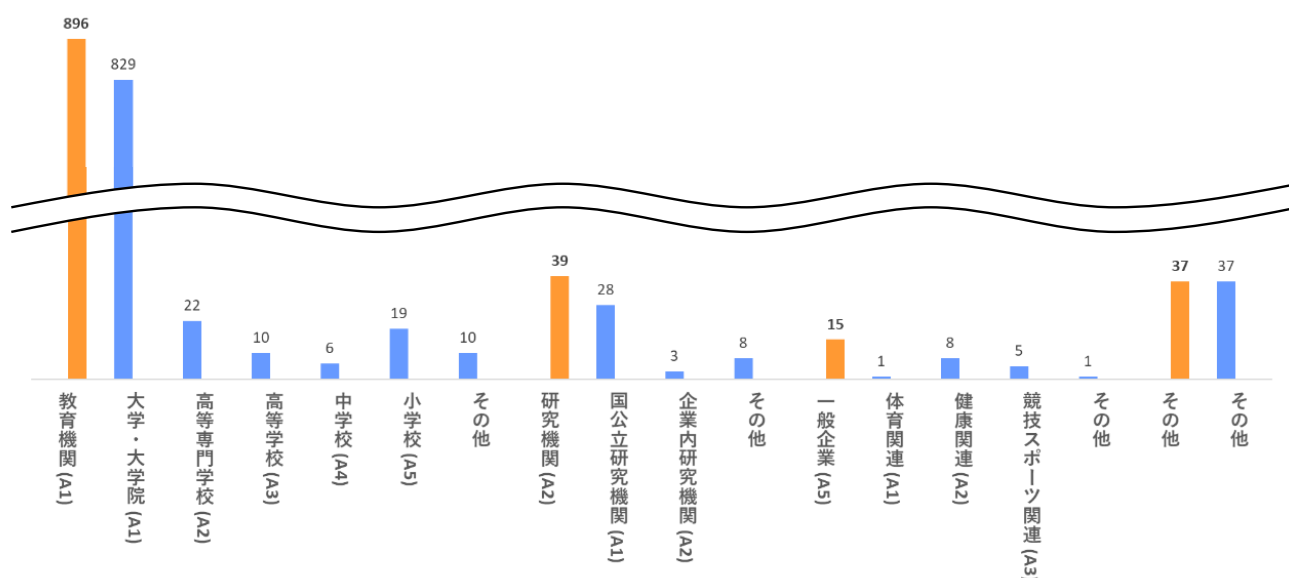
対象者：第71回大会参加者1,933名/日本体育・スポーツ・健康学会会員3,884名

回答数：987名

(1) 回答者の属性

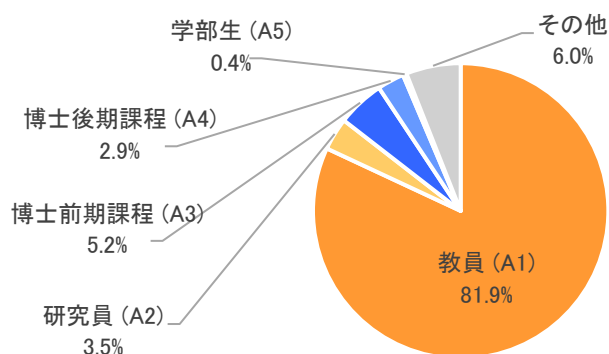
1-1: 所属（回答者数 987 名）

回答者の所属は教育機関が全体の90.8%を占める。特に、大学・大学院が教育機関の92.5%（全体の84.0%）を占める。



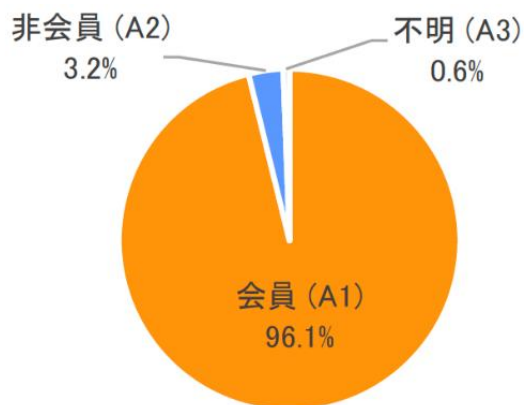
1-2: 職種（回答者数 987 名）

回答者の職種は教員が全体の81.9%、大学院生（博士前/後期）が8.1%を占める。



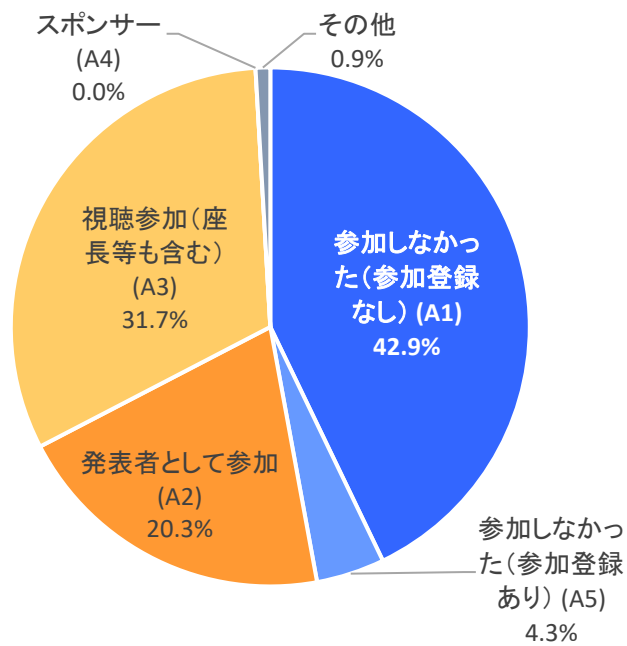
1-3: 会員資格（回答者数 987 名）

回答者の資格は、会員が全体の 96.1% を占める。



1-4: 参加の有無（回答者数 987 名）

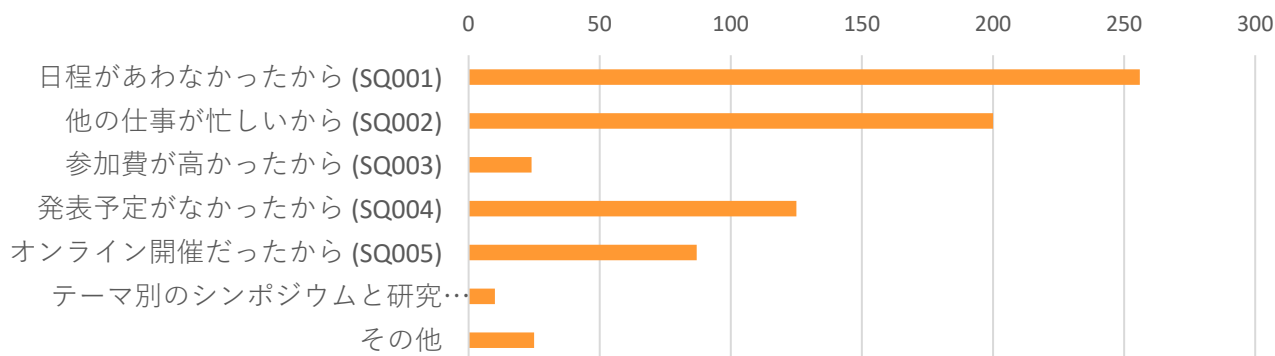
参加の有無は、全体の 47.1% が参加せず、52.0% が参加した。



(2) 非参加(参加登録なし)への質問

2-1: 非参加(参加登録しなかった)の理由 (回答者数 423 名 回答数のべ 727 件)

参加登録しなかった理由には、全体の 60.5% (256 名) の回答者が少なくとも参加者の日程の問題を挙げている。2 番目以降は、仕事が忙しいこと、発表予定がないこと、オンラインであることが続いている。



※6 番目の選択肢は「テーマ別のシンポジウムと研究発表が学会大会の中心になったから (SQ006)」

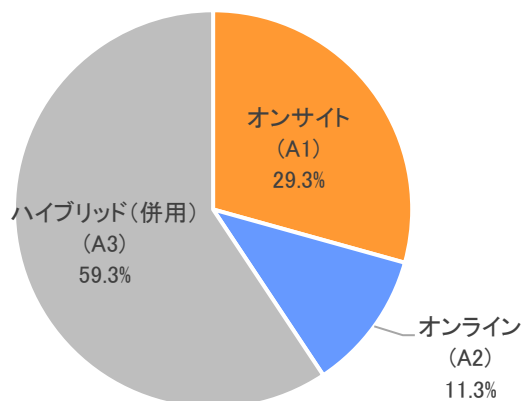
自由記述

- 学会に時間を割くだけの魅力を感じなかったため
- 学会の範囲が広すぎて、自分の現在の研究内容に沿う内容に関する議論がされそうにないため
- 以前あった専門領域と、現在ある専門領域が異なっており分かりにくさを感じているから
- 画面越しで緊張感・臨場感がなく参加・発表した実感が得られないから
- 研究発表は英語で行うことにしているので

2-2: 来年度の学会大会について、どの開催方式を希望しますか。 (回答者数 423 名)

・選択肢 オンサイト/オンライン/ハイブリッド(併用)(特に理由があればコメント欄に記入してください。)

来年度の学会大会開催方式は、オンサイトが 29.3%, オンラインが 11.3%, ハイブリッド(併用)が 59.3%希望されている。



自由記述

- 学会大会に参加する利点と価値は内容が予めわかっている発表を聞くことより、全国から集まってくる研究者と会って情報交換ができるところにあると言ってよい。大学教員のほとんどはこの機会に大学の経費を使って普段は行けない地方にある大学を訪れ、学会大会でしか会えない研究者とあって忌憚ない意見交換ができることに意義を見出していると思われる
- 自身に障害があり、学会会場には毎回多くの移動の問題に直面し、満足感を得ることが難しい状況です。ハイブリッドにして頂ければ幸いです
- オンラインだと、仕事が重なる時でも参加できます。私の場合、地理学、防災科学を専門としており（中略）メインの学会でないので、都合がつけやすいです
- 貴重な夏休みを利用した海外での調査中でも参加できるから
- 私は小さな子供がいるためここ数年は学会に参加できていません。オンラインで開催された場合、参加できる学会が増えるのは、私のような立場の研究者にはとてもありがたいことだと考えています。（中略）オンライン開催に救われる者が少なからずいることをお伝えしたいです
- シンポジウムはオンラインでも良いと思うが、研究発表は研究者や大学院生との交流の観点から可能ならばオンサイトでの実施がよいと考える
- 他の学会ですが、オンデマンドで発表を確認できるのはとても有意義でした
- 平日開催では、オンサイト、オンラインとも講義の兼ね合い等で参加を諦めざるを得ない現状です。開催形式というよりは開催日程の検討をしていただきたく存じます

(2) 1-4 で「参加しなかった（参加登録あり）」を選択した方への質問

2-1: 参加しなかった理由は？（回答者数 42 名）

（自由コメント）

- オンラインだったため大会のために特別に予定を確保しておらず，その後学内業務が多数入ったため
- オンラインなので発表以外の情報が得られないと判断したため
- オンラインでのポスター発表ができなかったため

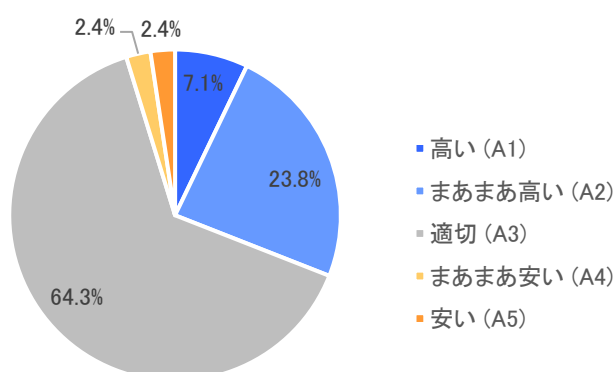
2-2: 大会参加費は適切でしたか？（回答者数 42 名）

	会 員	非会員	学 生
早期参加費 (4月1日～5月18日)	4,000円	5,000円	1,500円
事前参加登録 (5月19日～8月23日)	5,000円	6,000円	2,500円

・選択肢 高い/まあまあ高い/適切/まあまあ安い/安い

（ご意見・ご感想等がありましたら，コメント欄に記入してください．）

大会参加費は，回答者の 31.0%が高い/まあまあ高いと感じている．



自由記述

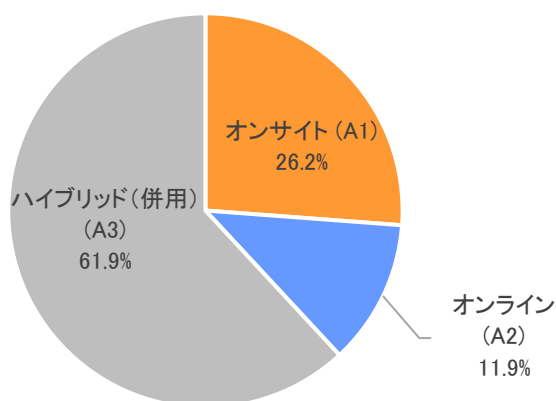
- オンラインでの開催なので，大会運営経費はかなり節減なったのではないかと．オンラインでは当然参加者は減少すると思われるので，格安にして多くの会員参加を目指した方が良いと思われる．しかし，今回の収支がわからないので，なんとも言えない部分がある

2-3: 来年度の学会大会について，どの開催方式を希望しますか．（回答者数 42 名）

・選択肢 オンサイト/オンライン/ハイブリッド（併用）（特に理由があればコメント欄に記入してください．）

来年度の学会大会開催方式は，オンサイトが 26.2%，オンラインが 11.9%，ハイブリ

ッド（併用）が 61.9%希望されている。



自由記述

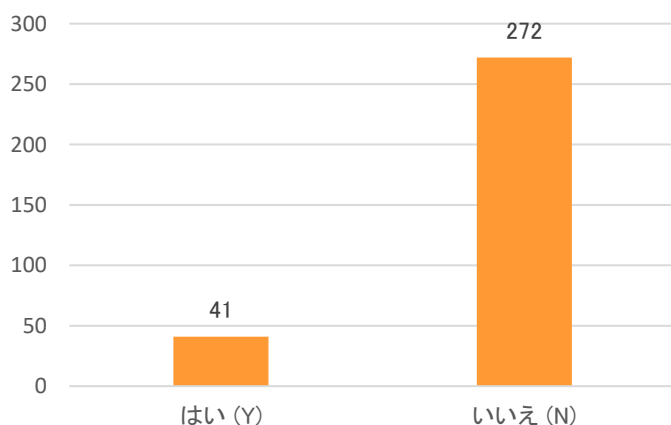
- ハイブリッドが大会の運営に大きな負担をもたらすようであれば難しいと思うが、可能であればそうすることにより参加者は増えるのではなかろうか。特に旅費を含む研究費が大幅に削減されている大学も少なくない現状では、旅費が不要になることのメリットは大きいと思われる
- 遠隔だけだと意見交換等がやりにくい
- 交流も含め対面で行うことは重要と考えます
- 遠方の人も参加できるよう、オンラインはしてほしい

(2) 1-4 で「視聴参加(座長等も含む)」を選択した方への質問

オンライン開催でなければ発表する予定はありました？（回答者数 313 名）

選択肢 はい/いいえ

272 名の回答者（回答者の 86.9%）がオンライン開催でなければ発表する予定があった。

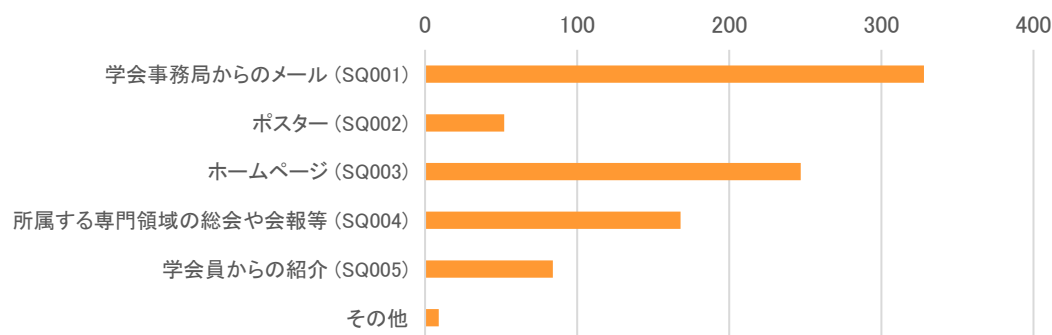


(2) 1-4 で「発表者として参加/視聴参加(座長等も含む)/スポンサー/その他」を選択した方への質問

2-1:学会大会をどのように知りましたか？（回答者数 522 名, 回答数のべ 888 件）

選択肢 学会事務局からのメール/ポスター/ホームページ/所属する専門領域の総会や会報等/学会員からの紹介/その他(複数選択可)

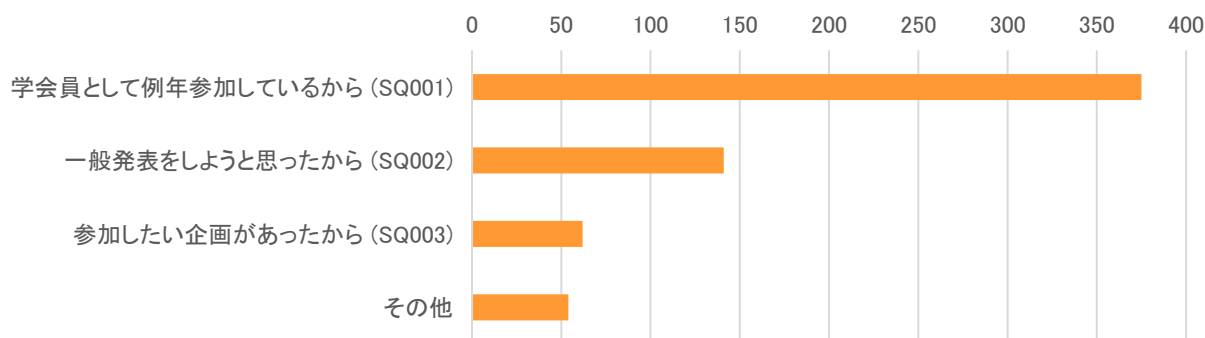
学会大会を知った理由として、1 番多いのが事務局からのメールで（回答者の 62.8%）、次いでホームページが多い（回答者の 47.3%）。



2-2:学会大会の参加動機は？（回答者数 522 名, 回答数のべ 632 件）

選択肢 学会員として例年参加しているから/一般発表をしようと思ったから/参加したい企画があったから/その他(複数選択可)

学会大会の参加動機は、例年参加しているからが最も多い（回答者の 71.8%）。



自由記述

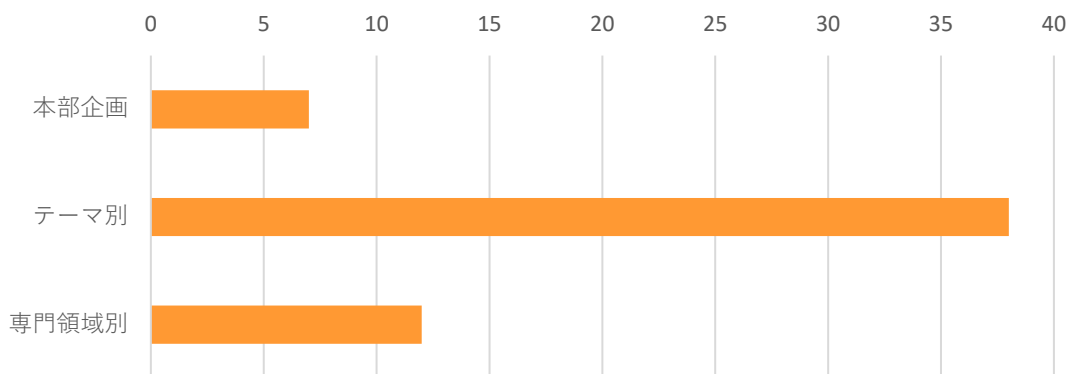
- 登壇や運営など 14 件
- 勉強のため、研究動向の確認のためなど 15 件
- 学会員の紹介など 5 件
- 「学会がどういうものか経験して、学びを得たかった」「M1 のため初参加」など 8 件
- 「オンラインで一部でも参加可能になった」など 4 件

2-2 で「参加したい企画があったから」をご選択された方は、その具体的な企画をご記入ください。

(自由コメント)

自由記述にて挙げられた各演題タイトルから、「本部企画」「テーマ別」「専門領域別」の3領域に分類し、ある領域の演題が1つ以上挙げられていた場合、それぞれの領域に計上した。(回答者数 62 名)

参加したい企画について、テーマ別演題を挙げる回答が最も多かった。



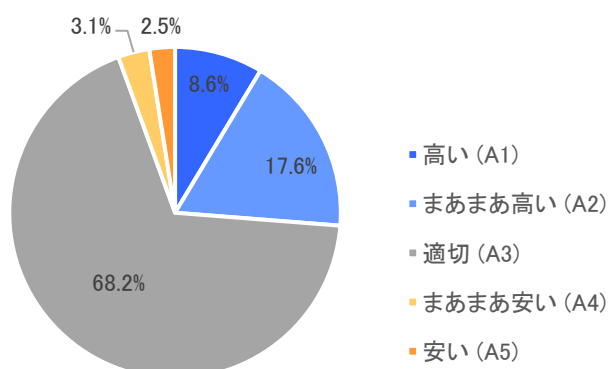
2-3: 大会参加費は適切でしたか？ (回答者数 522 名)

	会 員	非会員	学 生
早期参加費 (4月1日～5月18日)	4,000円	5,000円	1,500円
事前参加登録 (5月19日～8月23日)	5,000円	6,000円	2,500円

・選択肢 高い/まあまあ高い/適切/まあまあ安い/安い

(ご意見・ご感想等がありましたら、コメント欄に記入してください。)

大会参加費は、26.2%の回答者が高い/まあまあ高いと感じている。



自由記述

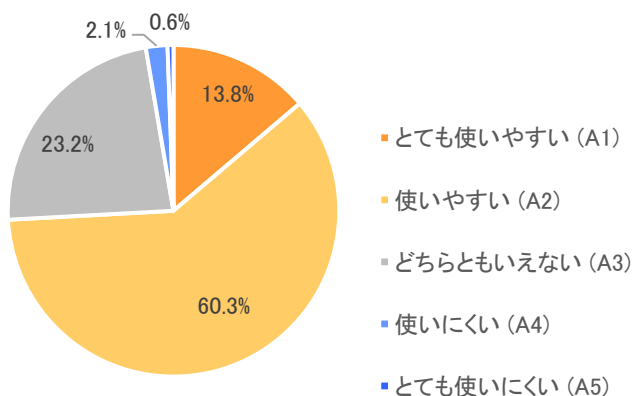
- 会員の参加費は他の学会と比べると安いほうかと思います。願わくは、学生にもっと気軽に参加してほしいので、学生は早期・事前の区別なく 1500 円にしてもらえると、参加を勧めやすいです（特に学部生）
- 学生には参加しやすい金額であったと思います。オンラインだと安価になることを期待する人が多いのですが、学生の料金を安くするためなど、“相互扶助”的に会員が支えていることを機会あるごとに説明する必要があると思います。また大学院生も自分の発表がないと参加せず、広い視野を養う傾向が減少しているようにも感じられるため、大学院教育において学会に参加することの重要性を伝えていく必要があると考えます
- まず、これは大会校には全く責任がない話という前提での話になります。今回はオンライン大会であり、対面による現地開催よりかなり経験レベルが下がることは否めないなので、参加についてはもう少し下げるという考え方は十分検討に値すると思われます。同時期の他の学会では、通常より若干ディスカウントした設定となっておりました。オンラインではかなり経費が下がることは既に多くの会員が様々な場で認識しているので、その点は大会への感想に大きく影響すると思われます
- オンラインによる学会運営において、外注の範囲とその金額が分からないので個人的な意見ですが、会場設営や人件費にコストがかからないとすると、参加費を値下げできるのではないかと考えてしまいます
- 価格としては適切だが、演題登録を急がせすぎな気がした
- 金銭的な参加のしやすさと研究の進捗を天秤にかけるのは変な感じがした
- オンライン開催ですと、旅費が必要ない分、参加費が高くても仕方ないと思いますが、ピンポイントで拝聴するとなると割高と感じてしまいました。（中略）参加者が減少しているようであれば、学会開催費（参加費）を年度会費に含んでも良いのかもしれません

2-4: 参加登録システムは使いやすかったですか？（回答者数 522 名）

選択肢 とても使いやすい/使いやすい/どちらともいえない/使いにくい/とても使いにくい

（改善すべき点があればコメント欄に記入してください。）

参加登録システムは、74.1%の回答者がとても使いやすい/使いやすいと感じている。



自由記述

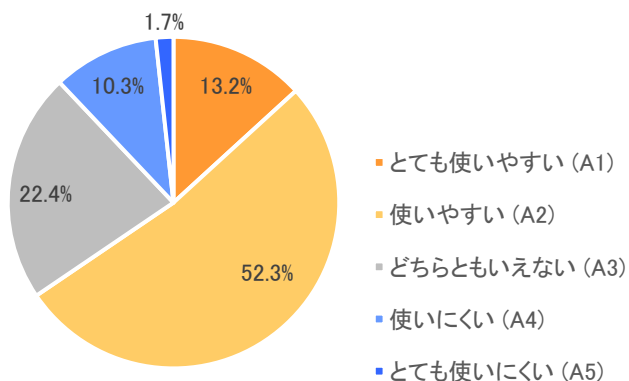
- 部門をどこに発表すればよいのか、の選択に悩みました
- 全体としてはよかったと思います。ですが、発表者がテーマ選択をする際に、どれを選択すればよいのかがわかりにくかったです
- 発表登録した際に、日本語と英語両方があって、日本語以外、英語の抄録も登録しなければいけないと思いました
- 領収書を印刷するところがわかりにくかった
- 発表抄録登録時に文字化けの問題が発生しました
- パスワードを変更していないのにログインできないことがあり、変更してくださいという指示に従って何回もパスワードを変更する手続きをした。とても手間であったし、セキュリティも気になる。
- Gmail が使えない
- さまざまなメールがきて、どれがログイン情報なのかなどわかりづらかった

2-5:タイムテーブル表示などの視聴システム(WEB ページ)は使いやすかったですか？(回答者数 522 名)

選択肢 とても使いやすい/使いやすい/どちらともいえない/使いにくい/とても使いにくい

(改善すべき点があればコメント欄に記入してください。)

視聴システムは、65.5%の回答者がとても使いやすい/使いやすいと感じている。



自由記述

- タイムテーブルや一覧表示のどちらでも、各セッションの属性(〇〇部会【課題】〇〇)の表記が幅をとり、肝心のセッションの中身(タイトル)がわかりにくかった。そのような機械的なラベルは上下に小さく付記したり、色分けしたりするなど、タイトルと同レベルの文字表記でなく、別の視覚的表現が望ましいのではないかと
- タイムスケジュールは追いやすかったが、プログラムの内容などを参照するのが少しややこしく、何が行われているのかがわからなかった
- どのページに行けば抄録が見られるのか等、難しかった
- 各セッションのタイトルや登壇者をタイムテーブル上で確認しづらく、詳細を見ようとすると不意

にセッションページへとんでしまい、不便だった

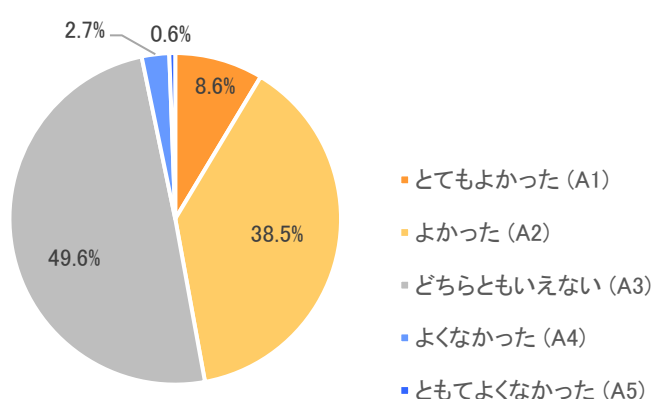
- 比較的使いやすかったが、プログラム(抄録集)に記載の時間帯・会場とWEB上での時間帯・会場との間で確認作業がスムーズに進みにくい表示であったように感じられる。この点は、今年度の日本体力医学会大会のシステムの方がとても参加しやすかった

2-6:大会本部企画(初日午前のシンポジウム, 夜の交流企画)はよかったと思いますか？(回答者数 522 名)

選択肢 とてもよかった/よかった/どちらともいえない/よくなかった/とてもよくなかった

(ご意見・ご感想等がありましたら、コメント欄に記入してください。)

大会本部企画は、47.1%の回答者がとてもよかった/よかったと感じている。



自由記述

- シンポジウムの行い方やテーマ(論点)の設定をこれまで以上に詳細に定めておく必要があると考えます。以下のテーマ別シンポジウムに対するコメントとも重複しますが、領域横断となったことでこれまで以上に1つのシンポジウムに対し多様な背景を持つ参加者が増えております。このため論点を明確にしておかなければ登壇者の発表内容も個別の事例・取り組みの紹介に終始してしまいますし、ディスカッションも登壇者に対する個別の質問の受け答え終了してしまいます。今回のシンポジウムに限った課題ではありませんが、シンポジウムの質の向上が非常に重要かと考えています。具体的には、①シンポジウムの論点を明確にすること、②シンポジストにも論点に即した発表内容を徹底していただくこと(論点に関連しない内容はできる限り少なくする)、③シンポジストの発表内容は単なる事例紹介ではなく、事例紹介を踏まえテーマに関する議論に資する発表者の私見や問い(疑問)も合わせて提示いただくこと、④ディスカッションでは指定討論者等が質問の内容をコントロールし、論点と関係のない質問を受け付けないこと。⑤フロアに質問を投げかける場合は、登壇者に対する個別の質問は避けるよう促すこと、等の改善策が考えられます。初めての取り組みでご尽力頂いたことは重々承知しておりますし、今回のシンポジウムからもたくさんのことを学ばせて頂きました。僭越ながらご意見させて頂きました。今後の学会大会のさらなる充実を期待しております
- 夜の交流企画は事務連絡の会議であって、特に参加して良かったとは思われませんでした。”なし”

でも良かったのでは

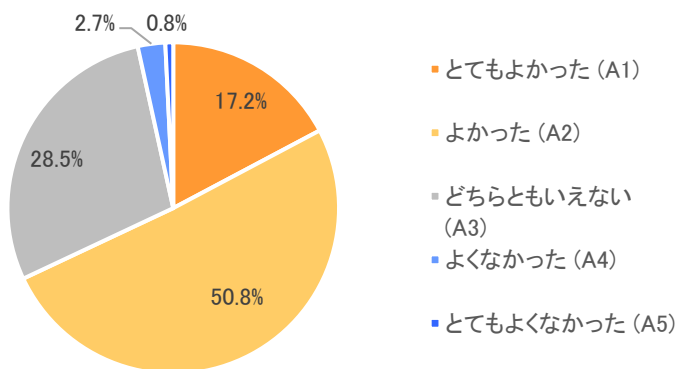
- 交流企画にもかかわらず、交流する要素がなかったように思う。Zoomのブレイクアウトルーム等の機能を活用してもよかったのではないかと思います。など同様の内容6件

2-7: 領域横断型のテーマ別シンポジウムはよかったと思いますか？(回答者数 522 名)

選択肢 とてもよかった/よかった/どちらともいえない/よくなかった/とてもよくなかった

(ご意見・ご感想等がありましたら、コメント欄に記入してください。)

テーマ別シンポジウムは、68.0%の回答者がとてもよかった/よかったと感じている。



自由記述

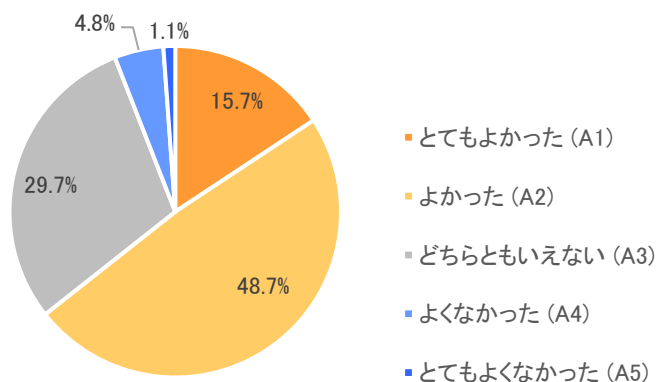
- 領域横断型の各部門について、将来的に当該部門で何をどのように議論し、何を発信するのが、コアメンバーの方々に共有されていないのではないのでしょうか。体育・スポーツ・健康分野のアカデミアを社会に開いていくことが目的の一つと思いますが、従来の学術的思考と成果のイメージをもたれていないのでしょうか。本学会において、なぜ領域横断型のシンポジウムに人と時間を割くのか、将来どうしたいのかが伝わりませんでした。過去そして現在において、体育・スポーツ・健康の世界で生起している問題に対して、本来学際的な本学会が社会に何をどのように発信して行くべきかは、よく考えれば見えるはずです
- 論点が絞れていないシンポジウムが多かった印象があります。様々な領域の先生方にそれぞれの意見を言っていただくのは貴重なことでしたが、相互のやりとりによって議論が深まるということとは少なかった気がしています。ただ初回からテーマを絞るのは難しかったとも思いますので、今後の検討課題としていければよいと思います
- 領域が混ざったというだけでも一定のインパクトがあったのではないのでしょうか

2-8: 領域横断型のテーマ別研究発表はよかったと思いますか？（回答者数 522 名）

選択肢 とてもよかった/よかった/どちらともいえない/よくなかった/とてもよくなかった

（ご意見・ご感想等がありましたら、コメント欄に記入してください。）

テーマ別研究発表は、64.4%の回答者がとてもよかった/よかったと感じている。



自由記述

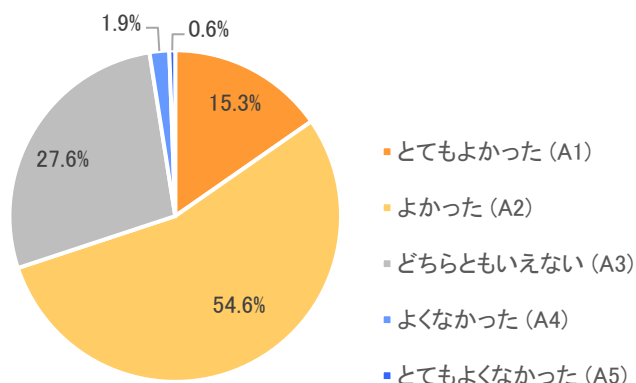
- 異業種交流のように、別分野の人とのネットワークが新しいものづくりや技術開発などにつながると期待できる業種では意味があると思いましたが、ディシプリンの異なる研究という業種では、あまり生産性を感じませんでした。私個人は、専門領域別の部会で発表しましたが、有益な質問をいくつか得られました。また、同分野の他の研究者に自分たちの研究や考え方を知ってもらう良い機会になったと思います。しかし、スポーツ分野は総合領域であることもまた一つの特徴だと思いますので、もし領域横断の方法を今後も継続するならば、まずはお互いの“研究”の質の向上や有意義なディスカッションを惹起させる工夫が必要になると思いました
- 文化の領域で、スポーツマネジメント研究の動向について調査した内容を発表しました。発表者としては、領域外の研究者に研究成果を報告できて、満足感がありました（哲学の先生からご質問もいただけたので嬉しかったです）。ただ、私の発表が、文化について考えるテーマ別の研究発表として適切であったかと問われれば、あまり適切ではなかったように反省しておるところでございます。今後は、よりテーマに相応しい発表を行うことで学会に貢献したいと考えております。そのような考えを深めるために、ぜひ、司会の方や各領域の企画を担当された先生による、テーマ別研究発表実施に対するフィードバックを公開してもらいたいという思いがあります
- 企画の意図は理解できるが、専門領域の研究発表とのすみ分けができていない。テーマ別研究発表の設定課題が広すぎるので、より焦点化した課題を設定することで、専門領域の発表との違いや相互の関係性が明確化されると思われる

2-9: 専門領域別企画(キーノートレクチャー, 研究発表等)はよかったと思いますか？(回答者数 522 名)

選択肢 とてもよかった/よかった/どちらともいえない/よくなかった/とてもよくなかった

(ご意見・ご感想等がありましたら, コメント欄に記入してください。)

専門領域別企画は, 69.9%の回答者がとてもよかった/よかったと感じている。



自由記述

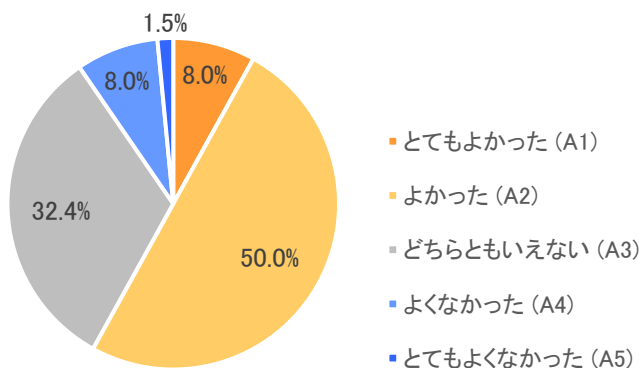
- 学会員の中には日本体育・スポーツ・健康学会に対してアイデンティティや帰属意識を持っているのではなく, それぞれの専門領域に対して帰属意識を持っている会員も多いのではないかと思います。今回の大会では従来の大会に比べ専門領域別企画が希薄になったようにも感じたが, もしこの傾向が続くようであれば, 専門領域に対して帰属意識を持っている会員の大会への参加が減少していくようにも考えられる。そしてそれが結局は学会全体の会員数の減少につながってしまう事を懸念する。個人的には, 専門領域別企画を盛り上げた先にある領域横断での検討なのではないかと感じている
- 専門領域の発表数が減少していたり, 発表がない領域があったが, 専門領域の発表も確保すべきである。専門領域が研究成果を発表する場がなければ領域を横断する以前に領域が衰退すると思う。また, このような状況が続くと今年度の大会発表者数にみられるように発表者の減少につながると考える
- 企画自体はよかったが, 研究発表者が横断型の方にシフトしてしまったのか専門領域における発表数が少なくなり, 専門領域別に企画を立てることや専門領域の存在意義, が薄くなってしまっていると感じました
- 領域横断と並行して専門領域もあったので, 意見をどこから聞きたいかで選べる場所があるのはよいことだと思った

2-10:オンラインでの質疑応答はよかったと思いますか？(回答者数 522 名)

選択肢 とてもよかった/よかった/どちらともいえない/よくなかった/とてもよくなかった

(改善すべき点があればコメント欄に記入してください。)

オンラインでの質疑応答は、58.0%の回答者がとてもよかった/よかったと感じている。



自由記述

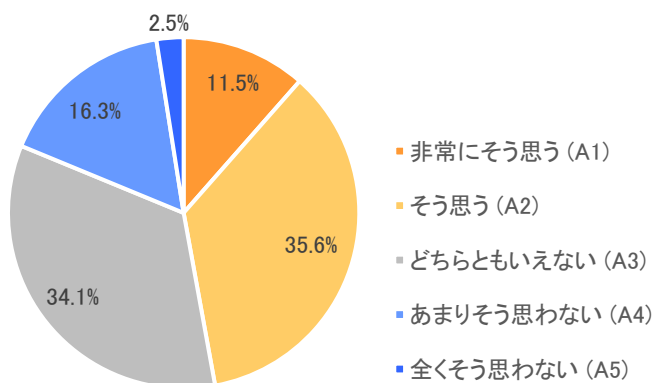
- 挙手機能を使つての質問者と、チャット機能を使つての質問者がいて、セッションによっていずれが優先されるのかが異なっていたのでわかりにくかった。また、『発表の途中でもチャットに書き込んで OK』という案内もあったが（私自身も、座長の際にはそのように案内をしたが）、実際に視聴していると、『いま疑問に思っている内容が、あとから説明されるかもしれない』と思うと、発表を聴きながらチャットに記載するというのは、いささか難しいように感じた。加えて、対面においても質問が出ないことはあるが、オンラインでは質問が出ない際に参加者の顔が見えないことが重なり、発表者は心理的にストレスがあるのではないかと感じた
- 座長の方が時間をコントロールしてさばいてくださったので、安心して応答できました（発表者として）。質問内容をかみ砕いて下さることもあり、助かりました。質問側としても、身構えすぎずに質問出来て良かったです
- 積極的に発言ができる人とそうでない人がいたが、慣れていくことが重要だと思う。運営はスムーズであったため、その点でのオンライン化での問題はないと感じられた
- コメントを書き込んで座長が拾う感じなので、いつも以上に意見が出やすかったのではないかと思います。ただ、座長の意見の拾い方や質疑の進行についてはある程度統一した方がいいかと思った。今まで以上に座長次第な部分が増えたように感じた

2-11: Zoom のブレイクアウトルームを活用して、セッション後に発表者と自由な意見交換する時間をもうけた方がよいと思いますか？(回答者数 522 名)

選択肢 非常にそう思う/そう思う/どちらともいえない/あまりそう思わない/全くそう思わない

(ご意見・ご感想等がありましたら、コメント欄に記入してください。)

セッション後の自由な意見交換の時間について、47.1%の回答者が設けた方がよいと考えている。



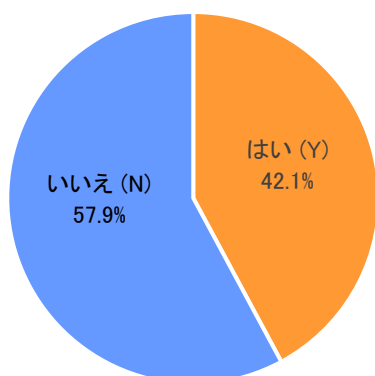
自由記述

- お互いに遠慮があって、質問しにくかったのかなと推察します。総合知を重視する本学会としては、発表後の交流を充実させていくことが肝要かと思ひますし、本学会の魅力を高めることにもつながると思ひます。もう一つ、時間がタイトなため致し方ありませんが、セッション終了後も一定時間開いておくことも考えたらよろしいかと存じます
- 全体の前で聞きづらかったり、質疑応答時間に対応できなかった部分を掘り下げたりするために、会場内にフリースペースのようなものがあるのもいいのかなとは思ひ。現実で言うところのお茶をしばくような休憩所をイメージしました
- オンラインは、自由な意見交換にはあまり向かないと思ひています。やはり司会が必要と感ひます。
- それぞれのブレイクアウトルームのマネジメントが難しい。そのままセッションで残りたい方が残るほうが会話を聞いていて残ろうかどうか考える
- zoom のブレイクアウトルームだと、同時にやりとりするのも2~3人が限界なので、意見交換しにくい部分はあると思ひます。ただ、ないよりはあった方が、コミュニケーションも取れて、参加している感が出そうな気はする

2-12:大会終了後のオンデマンド配信を視聴しましたか？(回答者数 522 名)

選択肢 はい／いいえ

オンデマンド配信は，回答者の 42.1%が視聴した．

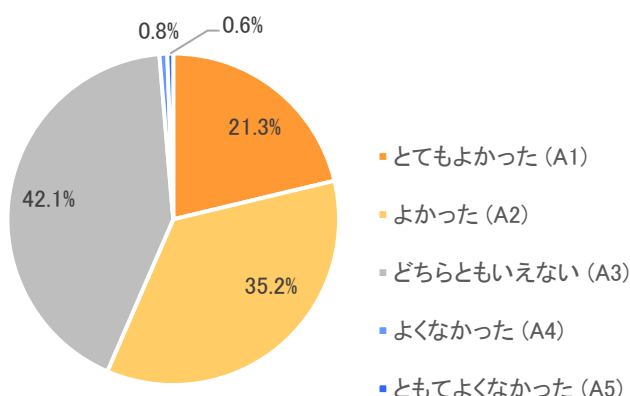


2-13:大会終了後のオンデマンド配信はよかったと思いますか？(回答者数 522 名)

選択肢 とてもよかった/よかった/どちらともいえない/よくなかった/とてもよくなかった

(ご意見・ご感想等がありましたら，コメント欄に記入してください．)

オンデマンド配信は，56.5%の回答者がとてもよかった/よかったと感じている．



自由記述

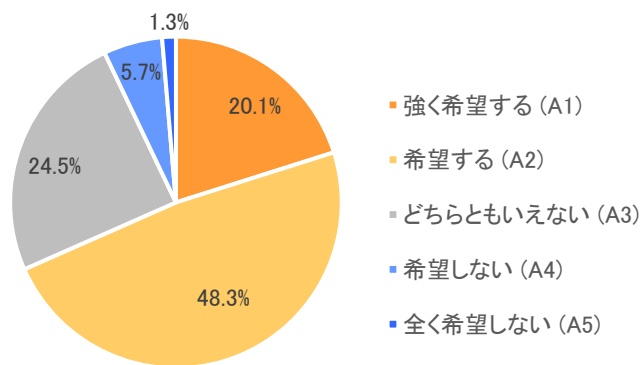
- 聞きたいシンポジウムが重なっていたり，本務校の会議のためリアルタイムで視聴できなかったため，後日視聴できたことで情報を得ることができ，またその他，あまり興味がなかったセッションも視聴出来で他分野への考えも広がり大変良かった
- 後期授業が始まり，慌ただしくしているうちに配信期間が終了してしまった．もうしばらく配信していただけたら，ありがたいです．など配信期間の短さに言及 18 件
- 発表者の希望が必要ではあるが，発表時に配布した資料へのアクセスができるようになるとより利便性が向上すると考える．また，オンデマンドをきっかけとしたコミュニケーションについてのガイドのようなものがあると，議論を活発にする，あるいはトラブルを防ぐことに役立つかもしれない

2-14: 専門領域の発表についても、大会終了後のオンデマンド配信を希望しますか？（回答者数 522 名）

選択肢 強く希望する/希望する/どちらともいえない/希望しない/全く希望しない

（ご意見・ご感想等がありましたら、コメント欄に記入してください。）

専門領域でのオンデマンド配信は、68.4%の回答者が強く希望/希望している。



自由記述

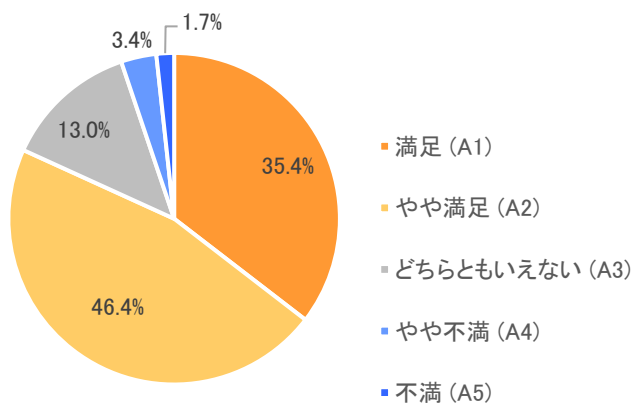
- 視聴する立場からすればオンデマンド配信していただいたほうが助かりますが、発表する立場から考えるとデータの流出等の心配があるので、現実的には発表のオンデマンド配信は難しいのではないのでしょうか
- 専門領域の発表を行うのであれば、テーマ別と同じ扱いにすべきである。学会がテーマ別を中心にしたと記載があったが、選択できる以上、テーマ別も領域別もフェアに扱うべき。同じ参加費をとっているのに扱いが異なるのは差別的・アンフェアであった
- 専門領域の発表については、ライブ感もあるので、配信した方がいいかは何とも言えない。シンポジウムなどの企画は、広く考えを共有しようという趣旨なので、配信してもよいかと思う
- 発表者や質問者に許可をとる必要はないのでしょうか

2-15: 今回の学会大会に満足していますか？(回答者数 522 名)

選択肢 満足/やや満足/どちらともいえない/やや不満/不満

(ご意見・ご感想等がありましたら、コメント欄に記入してください。)

今回の学会大会は、81.8%の回答者が満足/やや満足している。



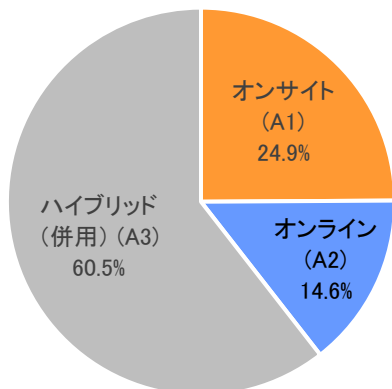
自由記述

- 学会大会という場を作って頂き、視聴者としてのみですが参加できたことには非常に感謝しております。ただ、個人的には、体育学会大会は他の先生方との交流であったり、様々な地域の魅力をしようということも大きな意義の一つであると思うので、その点で、オンラインでの開催はあまり好きではありません。一方で、他の仕事との兼ね合い等で、オンラインの方が参加が容易であるなどのメリットも感じられました
- 本務校の仕事の合間に視聴できるので、研究発表や企画を聞く分には満足
- また、対面の学会だと勤務を完全に休むことができるが、休みを取るべきか大いに迷い、勤務しながらの視聴になったため、発表だけに集中できなかった(自分の責任ではあるが)。他の参加者はどのような工夫をされていたか情報が知りたい
- オンサイト同様、大会参加証明書を発行して頂けると、ありがたいです(発行されていて、気付いていない場合は申し訳ありません。こちらのコメントはご放念ください)
- 全体へのチャット以外にも個人チャットにて質問やコメント下さる先生もいて、今後の研究の励みにできました

2-16: 来年度の学会大会について、どの開催方式を希望しますか。(回答者数 522 名)

・選択肢 オンサイト/オンライン/ハイブリッド(併用) (特に理由があればコメント欄に記入してください。)

来年度の学会大会開催方式は、オンサイトが 24.9%，オンラインが 14.6%，ハイブリッド(併用)が 60.5%希望されている。



自由記述

- オンラインで実施されたことで、オンサイトのメリット（細かな議論，情報交換等）をあらためて実感した。同時にオンラインのメリットもある（時間，金銭的負担，健康状態に応じた参加等）。事務局の負担は大きい，ハイブリッドが望ましい
- 大学教職員等研究職以外の会員や，興味のある非会員は，休暇をとり自費負担参加となるため，政策実務を行う全国の行政職が参加するにはハードルが高いともいます
- 今大会は学際性を謳っていましたが，今後の事を考えますと，せっかくの研究も現場で実現しにくいものなのではと思います
- 運営コストの面で両立が難しいかもしれないが，オンラインでのオンデマンド配信サービスやタイムテーブルなどのシステムは継続しつつ，従来のように対面形式の学会で研究者との直接の議論ができるとより快適でかつ充実した学会になると感じた
- 移動時間と費用のロス，対面式の場合の会場手配や天候に左右されること等，広い意味での環境面ではオンラインは圧倒的に優れていると感じる。観光や交流機会は減るが，それらは時間と費用があれば個人でも十分に設けることができる。ハイブリッドは運営と経費の点で採用すべきではないと考える

以上